YAMANOKAMIISEKI

山ノ神遺跡

GOTANDAISEKI

五反田遺跡

一般国道9号（安来道路）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書　16

９８年３月

建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

YAMANOKAMIISEKI

山ノ神遺跡

GOTANDAISEKI

五反田遺跡

一般国道9号（安来道路）建設予定地内

埋蔵文化財発掘調査報告書　16

1998年3月

建設省松江国道工事事務所

島根県教育委員会

序

建設省松江国道工事事務所においては、安来地区の一般国道９号の交通混雑を緩和して、円滑な交通を確保し、地域社会の発展に資するため、一般国道９号のバイパスとして安来道路の建設を進めています。

道路整備に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、避けることのできない埋蔵文化財については、道路事業者の負担によって、必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当安来道路においても道路建設予定地内にある文化財について島根県教育委員会と協議し、同委員会の御協力のもとに平成元年度から発掘調査を行っています。

本報告書は、平成６年度に実施した遺跡調査の成果をとりまとめたものであります。本書が郷土の埋蔵文化財に関する貴重な資料として、学術ならびに教育のため広く活用されることを期待すると共に、道路事業が埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ進められていることへの御理解を頂きたいと思うものであります。

最後に、今回の発掘調査及び本書の編集に当たり、ご指導ご協力いただいた島根県教育委員会並びに関係各位に対し深甚なる謝意を表すものであります。

平成10年３月

建設省中国地方建設局松江国道工事事務所

所長　大石　龍太郎

序

島根県教育委員会では、建設省中国地方建設局の委託を受けて、平成元年度から一般国道9号安来道路建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このたび報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書は平成6年度に調査を実施した安来市吉佐町に所在する山ノ神遺跡・五反田遺跡の調査成果をとりまとめたものです。この調査では弥生時代から古墳時代にかけての集落跡を検出したほか、多量の遺物が出土しました。特に古墳時代の終わり頃の製鉄関係の遺構・遺物の発見は、島根県の鉄の歴史を語るうえで貴重な資料となりました。また、この他の調査成果も、出雲地方全体の歴史の解明に大きく寄与するものと思われます。本報告書が地域の歴史を解明する糸口となり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり御協力を頂きました建設省松江国道工事事務所、安来市教育委員会をはじめ、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成10年3月

島根県教育委員会教育長

江口博晴

例　言

1．本書は、建設省中国地方建設局の委託を受けて、島根県教育委員会が平成６年、に実施した、一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

安来市吉佐町　　山ノ神遺跡
　　五反田遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会
事務局　　島根県教育庁文化課　　広沢卓嗣（課長）　野村純一（課長補佐）
　　埋蔵文化財調査センター　　勝部　昭（センター長）、佐伯善治（課長補佐）、
　　工藤直樹（企画調整係主事）、田部利夫（島根県教育文化財団嘱託）
調査員　　福島　浩（埋蔵文化財センター（兼）文化財保護主事）、椿　真治（同主事）
　　山代　徹（臨時職員）
調査協力　　角矢　永嗣（羽須美村教育委員会）
調査指導　　山本　清（島根県文化財保護審議会会長）、池田満雄（島根県文化財保護審議会委員）、田中義昭（島根大学法文学部教授）、渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）、河瀬正利（広島大学文学部教授）
整理作業員　　天津文子、石川真由美、門脇卓子、多久和文子、田中路子

4．平成６年度、平成７年度の発掘作業（発掘作業員雇用等）については、建設省中国地方建設局、島根県教育委員会、（社）中国建設弘済会の三者協定に基づき、島根県教育委員会から（社）中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人　中国建設弘済会島根支部（平成６年度）
　布村幹夫（現場事務所長）、勝部達也（技術員）、与倉明子（事務員）

5．現地調査、及び資料整理については、上記調査指導の諸先生の他、以下の方々から有益なご助言とご協力をいただいた。記して感謝の意を表させていただく。（敬称略）

三宅博士（安来市教育委員会）、東森市良（安来高校教諭）、村上泰通（愛媛大学）、
森下浩行（奈良市教育委員会）、増田孝彦（京都府埋蔵文化財調査研究センター）、
原　俊一（宗像市教育委員会）、行時志郎（日田市教育委員会）、穴澤義功（たたら研究会委員）

6．挿図中の方位は国土調査法による第Ⅲ座標系の軸方位を示し、レベル高は海抜高を示す。

7．挿図の縮尺は、図中に明示した。

8．本書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院発行の地形図を使用した。

9．本書に掲載した遺物の実測及び挿図の浄写は、主として以下の者が行った。

椿、大西憲和、天津文子、石川真由美、門脇卓子、多久和文子、田中路子

10．本書に掲載した遺物の写真撮影は、椿、広江耕史（埋蔵文化財センター文化財保護主事）が行った。

11．本書の編集・執筆は椿が担当した。

12．本書掲載の遺跡出土資料及び実測図、写真などの資料は、島根県埋蔵文化財調査センター（松江市打出町33）で保管している。

本文目次

序　文
序　文
例　言
目　次
第1章　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
第2章　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
第3章　位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第1節　地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
　第2節　歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
第4章　山ノ神遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　第1節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 8
　第2節　検出した遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　第3節　小　結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 55
第5章　五反田遺跡の調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
　第1節　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 56
　第2節　検出した遺構・遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 61
　第3節　小　結　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
第6章　考　察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・115
　第1節　弥生時代中期後葉の土器について・・・・・・・・・・・・・・115
　第2節　古墳時代前期末の土器について・・・・・・・・・・・・・・・117
　第3節　古墳時代後・終末期集落の移動について・・・・・・・・・・119
　第4節　出雲東部の古墳時代終末期における鉄生産について・・・・122
第7章　科学的考察　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・125
　第1節　安来道路予定地内遺跡出土物の金属学的調査・・・・・・・125
　第2節　五反田遺跡他出土の羽口の調査・・・・・・・・・・・・・・175

図　版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・182

挿図目次

第1図　建設中の安来道路（五反田遺跡付近）
第2図　遺跡位置図（1／25，000）
第3図　山ノ神遺跡調査風景
第4図　五反田遺跡調査風景
第5図　山ノ神遺跡調査区配置図（1／1，000）
第6図　山ノ神遺跡全景
第7図　山ノ神遺跡遺構全体図（1／400）
第8図　山ノ神遺跡　建物1（1／60）
第9図　山ノ神遺跡　建物1出土遺物（1／3）
第10図　山ノ神遺跡　建物2（1／60）
第11図　山ノ神遺跡　建物2出土遺物（1／3）
第12図　山ノ神遺跡　建物3（1／60）
第13図　山ノ神遺跡　建物3出土遺物①（1／3）
第14図　山ノ神遺跡　建物3出土遺物②（1／3）
第15図　山ノ神遺跡　建物4（1／60）
第16図　山ノ神遺跡　建物4出土遺物（1／3）
第17図　山ノ神遺跡　建物5（1／60）
第18図　山ノ神遺跡　建物5出土遺物
第19図　山ノ神遺跡　建物5壁材痕跡
第20図　山ノ神遺跡　建物6（1／60）
第21図　山ノ神遺跡　建物6出土遺物（1／3）
第22図　山ノ神遺跡　建物7（1／60）
第23図　山ノ神遺跡　建物7出土遺物①（1／3）
第24図　山ノ神遺跡　建物7出土遺物②（1／3）
第25図　山ノ神遺跡　段状遺構1（1／60）
第26図　山ノ神遺跡　段状遺構1出土遺物（1／60）
第27図　山ノ神遺跡　段状遺構2～4（1／60）
第28図　山ノ神遺跡　段状遺構3出土遺物（1／3）
第29図　山ノ神遺跡　段状遺構5（1／60）
第30図　山ノ神遺跡　柱穴内遺物出土状況（1／30）
第31図　山ノ神遺跡　段状遺構5他出土遺物（1／3他）
第32図　山ノ神遺跡　段状遺構6・7（1／60）
第33図　山ノ神遺跡　段状遺構6出土遺物（1／3）
第34図　山ノ神遺跡　段状遺構8（1／60）
第35図　山ノ神遺跡　段状遺構9（1／60）
第36図　山ノ神遺跡　段状遺構9出土遺物（1／3）
第37図　山ノ神遺跡　段状遺構10（1／60）
第38図　山ノ神遺跡　段状遺構10出土遺物（1／3）
第39図　山ノ神遺跡　土坑1（1／60）
第40図　山ノ神遺跡　土坑1関連遺物①（1／3）
第41図　山ノ神遺跡　土坑1出土遺物（1／3）
第42図　山ノ神遺跡　土坑1関連遺物②（1／3）
第43図　山ノ神遺跡　土坑2（1／30）
第44図　山ノ神遺跡　土坑2出土遺物（1／3）
第45図　山ノ神遺跡　土坑3（1／30）
第46図　山ノ神遺跡　土坑4（1／30）
第47図　山ノ神遺跡　土坑5（1／30）
第48図　山ノ神遺跡　土坑6（1／30）
第49図　山ノ神遺跡　土坑7（1／30）
第50図　山ノ神遺跡　土坑8（1／30）
第51図　山ノ神遺跡　土坑9（1／30）
第52図　山ノ神遺跡　土坑10（1／30）
第53図　山ノ神遺跡　坑道状遺構（1／200）
第54図　山ノ神遺跡　坑道状遺構入口（1／60）
第55図　山ノ神遺跡　坑道状遺構出遺物（1／3）
第56図　山ノ神遺跡　土器溜まり①（1／3）
第57図　山ノ神遺跡　土器溜まり②（1／3）
第58図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物①（1／3）
第59図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物②（1／3）
第60図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物③（1／3）
第61図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物①（1／3）
第62図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物②（1／3）
第63図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物③（1／3）
第64図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物④（1／3）
第65図　山ノ神遺跡　包含層出土遺物①（1／3）
第66図　山ノ神遺跡　包含層出土遺物②（1／3）
第67図　山ノ神遺跡　包含層出土遺物③（1／3）
第68図　五反田遺跡　調査区配置図（1／1，000）
第69図　五反田遺跡全景
第70図　五反田遺跡遺構全体図（1／400）
第71図　五反田遺跡　建物1～5、段状遺構1（1／60）
第72図　五反田遺跡　建物1（1／60）

第73図　五反田遺跡　炉1（1／20）
第74図　五反田遺跡　炉2（1／20）
第75図　五反田遺跡　土坑1（1／30）
第76図　五反田遺跡　建物4カマド（1／30）
第77図　五反田遺跡　建物2（1／60）
第78図　五反田遺跡　建物3（1／60）
第79図　五反田遺跡　建物5（1／60）
第80図　五反田遺跡　炉3～11、土坑2～7（1／30）
第81図　五反田遺跡　炉12（1／8）
第82図　五反田遺跡　段状遺構1（1／60）
第83図　五反田遺跡　建物1～5他出土遺物（1／3ほか）
第84図　五反田遺跡　建物6（1／60）
第85図　五反田遺跡　建物6出土羽口（2／3）
第86図　五反田遺跡　建物6出土遺物（1／3）
第87図　五反田遺跡　段状遺構2（1／60）
第88図　五反田遺跡　段状遺構3（1／60）
第89図　五反田遺跡　段状遺構4（1／60）
第90図　五反田遺跡　炉14（1／20）
第91図　五反田遺跡　段状遺構4出土遺物（1／3）
第92図　五反田遺跡　段状遺構5～9（1／60）
第93図　五反田遺跡　段状遺構5被熱面（1／20）
第94図　五反田遺跡　土坑8（1／30）
第95図　五反田遺跡　段状遺構5～7出土遺物（1／3）
第96図　五反田遺跡　段状遺構10～12、土坑9・10（1／60）
第97図　五反田遺跡　土坑10（1／30）
第98図　五反田遺跡　段状遺構10～12出土遺物（1／3）
第99図　五反田遺跡　土坑10関連遺物（1／3）
第100図　五反田遺跡　建物7、土坑11（1／60）
第101図　五反田遺跡　段状遺構13（1／60）
第102図　五反田遺跡　段状遺構13壁際土坑（1／30）
第103図　五反田遺跡　段状遺構13出土遺物（1／3）
第104図　五反田遺跡　建物8、段状遺構14～16（1／60）
第105図　五反田遺跡　建物8出土羽口（2／3）
第106図　五反田遺跡　炉15・16（1／20）
第107図　五反田遺跡　建物8、段状遺構14～16出土遺物（1／3）
第108図　五反田遺跡　溝状遺構1、段状遺構17・18（1／120ほか）
第109図　五反田遺跡　段状遺構17出土遺物（1／3）
第110図　五反田遺跡　溝状遺構1遺物出土状況①（1／30）
第111図　五反田遺跡　溝状遺構1遺物出土状況②（1／30）
第112図　五反田遺跡　溝状遺構周辺上層出土遺物（1／3）
第113図　五反田遺跡　溝状遺構1出土遺物①（1／3）
第114図　五反田遺跡　溝状遺構1出土遺物②（1／3）
第115図　五反田遺跡　溝状遺構1出土遺物③（1／3）
第116図　五反田遺跡　溝状遺構1出土遺物④（1／3）
第117図　五反田遺跡　段状遺構18（1／60）
第118図　五反田遺跡　建物9（1／60）
第119図　五反田遺跡　建物10（1／60）
第120図　五反田遺跡　建物10出土遺物（1／3）
第121図　五反田遺跡　建物11（1／60）
第122図　五反田遺跡　建物11カマド（1／30）
第123図　五反田遺跡　建物11周溝他土遺物（1／3）
第124図　五反田遺跡　建物11出土遺物①（1／3）
第125図　五反田遺跡　建物11出土遺物②（1／3）
第126図　五反田遺跡　建物11出土遺物③（1／3）
第127図　五反田遺跡　土坑12（1／30）
第128図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物①（1／3）
第129図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物②（1／3）
第130図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物③（1／3）
第131図　五反田遺跡　溝状遺構2、段状遺構19（1／60）
第132図　五反田遺跡　溝状遺構2出土遺物（1／3）
第133図　五反田遺跡　建物12（1／60）
第134図　五反田遺跡　第2調査区包含層出土遺物①（1／3）
第135図　五反田遺跡　第2調査区包含層出土遺物②（1／3）
第136図　五反田遺跡　建物13（1／60）
第137図　五反田遺跡　建物14（1／60）
第138図　五反田遺跡　建物15（1／60）
第139図　五反田遺跡　建物13出土遺物（1／3）
第140図　五反田遺跡　建物14出土遺物（1／3）
第141図　五反田遺跡　建物15出土遺物（1／3）
第142図　五反田遺跡　階段状遺構（1／60）
第143図　五反田遺跡　階段状遺構出土遺物（1／60）
第144図　五反田遺跡　坑道状遺構（1／200）
第145図　布田遺跡　出土土器
第146図　出雲東部古墳時代前期後半～中期初頭土器
第147図　集落・土器変遷図（1）
第148図　集落・土器変遷図（2）
第149図　出雲郡製鉄関連遺跡

図版目次

山ノ神遺跡図版1　主要部全景（東から）
山ノ神遺跡図版2　調査前全景（南東から）、周辺部（東から）
山ノ神遺跡図版3　谷部全景（東から）、同上（西から）
山ノ神遺跡図版4　建物1（東から）、同上遺物出土状況
山ノ神遺跡図版5　建物1・2（東から）、建物2（東から）
山ノ神遺跡図版6　建物3（南西から）、同上検出状況（北東から）
山ノ神遺跡図版7　建物4・5（南西から）、同上（北東から）
山ノ神遺跡図版8　建物5床面（南西から）、同上（南西から）
山ノ神遺跡図版9　建物6（西から）、同上堆積土層（南から）
山ノ神遺跡図版10　建物7（北西から）、段状遺構1（東から）
山ノ神遺跡図版11　段状遺構2～4（南から）、段状遺構5（西から）
山ノ神遺跡図版12　段状遺構6・7（南西から）、段状遺構8（東から）
山ノ神遺跡図版13　段状遺構10（東から）、土器溜まり（北から）
山ノ神遺跡図版14　土坑9（北東から）、土坑6・7（北から）
山ノ神遺跡図版15　坑道状遺構調査風景（南東から）、坑道状遺構入口（西から）
山ノ神遺跡遺物図版16　建物1・3・7、段状遺構5出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版17　建物4出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版18　建物7出土遺物、段状遺構3出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版19　段状遺構10出土遺物、土坑1関連出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版20　土坑1関連出土遺物、土坑2出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版21　土器溜まり、包含層出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版22　包含層出土遺物
山ノ神遺跡遺物図版23　土坑1関連出土遺物、包含層出土遺物
五反田遺跡図版24　遺跡と周辺（北西から）
五反田遺跡図版25　遺跡全景（北から）
五反田遺跡図版26　第Ⅰ調査区北半部全景（北西から）
五反田遺跡図版27　調査前全景（西から）、第Ⅱ調査区調査前全景（北東から）
五反田遺跡図版28　第Ⅰ調査区北半部　（南から）、同上南半部（北から）
五反田遺跡図版29　第Ⅰ調査区南半部（北西から）、同上北半部（南から）
五反田遺跡図版30　第Ⅰ調査区中央部（南西から）、第Ⅱ調査区北半部（南から）
五反田遺跡図版31　建物1周辺調査風景（北東から）、建物1（東から）
五反田遺跡図版32　建物2・3・5（北から）、建物4カマド付近（西から）
五反田遺跡図版33　建物5（南から）、建物6（北から）
五反田遺跡図版34　段状遺構4（北から）、段状遺構5～9（北から）
五反田遺跡図版35　段状遺構10～12（北東から）、段状遺構11遺物出土状況

五反田遺跡図版36　建物７・段状遺構13（南から）、段状遺構13遺物出土状況
五反田遺跡図版37　溝状遺構１周辺部（南から）、同上（北から）
五反田遺跡図版38　溝状遺構１遺物出土状況（南から）、同上（北から）
五反田遺跡図版39　建物９（北から）、建物10（南から）
五反田遺跡図版40　建物11（西から）、同上堆積土層（北から）
五反田遺跡図版41　建物11カマド（西から）、同上煙道部断面（西から）
五反田遺跡図版42　溝状遺構２土層断面（南から）、建物12（南東から）
五反田遺跡図版43　建物13～15（北東から）、土坑12（東から）
五反田遺跡図版44　階段状遺構（北西から）、同上遺物出土状況（北から）
五反田遺跡遺物図版45　建物１～４出土遺物、建物６出土遺物
五反田遺跡遺物図版46　段状遺構４出土遺物、段状遺構５～９出土遺物
五反田遺跡遺物図版47　段状遺構10～12出土遺物、段状遺構13出土遺物
五反田遺跡遺物図版48　建物10出土遺物、建物11出土遺物
五反田遺跡遺物図版49　建物11出土遺物
五反田遺跡遺物図版50　溝状遺構１・段状遺構17出土遺物
五反田遺跡遺物図版51　建物15出土遺物、建物14・15出土遺物、階段状遺構出土遺物
五反田遺跡カラー図版52　建物11造り付けカマド
五反田遺跡カラー図版53　土坑10
五反田遺跡カラー図版54　段状遺構５被熱面、炉13～16、土坑３
五反田遺跡カラー図版55　建物４造り付けカマド、炉２～11、土坑２～７

第１章　調査に至る経緯

昭和47年５月26日付で、建設省松江国道工事事務所から島根県教育委員会に「国道９号バイパス」建設の基本設計資料として、島根県境の安来市吉佐町から松江市乃白町までの30.3kmにおける埋蔵文－化財の有無について照会があった。

そこで、県教育委員会では、地元教育委員会の協力を得て昭和47年、48年に遺跡の分布調査を実施した。これらの調査結果をふまえ建設省からルート案が提示され、昭和48年７月には松江市東地区の予定ルートに係わる遺跡の取り扱いについて協議があった。昭和49年７月には安来地区の清水～月坂間のルート案について協議があった。続いて、昭和50年１月22日付けで県教育委員会あて松江東地区と安来地区のうち清水～月坂間の一部について発掘調査の依頼があった。これを受けて、昭和50年７月には建設省と契約を取り交わし、昭和50年度に松江市竹矢町才ノ峠古墳群、同矢田町平所遺跡、安来市早打町大坪古墳群の発掘調査を、昭和51年度には松江市平所遺跡の再調査、東出雲町出雲郷夫敷遺跡の試掘調査を実施した。平所遺跡では、県内初の埴輪窯跡から馬・鹿・家・人物などの形象埴輪が出土し、昭和52年には重要文化財に指定された。

昭和55年度・56年度には、昭和57年に開催が決定していた「くにびき国体」の主要幹線同道路となる「松江東バイパス」（以前は「米松バイパス」と呼称されていた）予定地内の東出雲町出雲郷から松江市古志原町に至る5.4km間の７遺跡の残り４車線分の調査依頼があった。これによる調査は昭和61年度から平成３年度にかけて順次行った。

昭和61年度には安来市島田町から同赤江町に至る延長6.9kmが「安来バイパス」として事業化されたが、昭和63年度には高規格道路に計画変更され、「松江道路」につなぐ東出雲出雲郷～安来市吉佐町間の18.7kmの「安来道路」として実施されることになった。この計画変更で予定ルートにも変更が生じたため、昭和62年度・63年度に再度遺跡の分布調査を実施した。

発掘調査は、安来市赤江町から島田町に至る6.9km（インター部を含む）において平成元年度から同５年度まで７遺跡（安来市宮内町宮内遺跡、佐久保町大原遺跡、同臼コクリ遺跡、同岩屋口遺跡など）で実施され、平成４年度からは安来市荒島町～東出雲町出雲郷を「安来道路西地区」として、さらに平成５年度からは安来市吉佐町～同島田町を「同東地区」として調査を実施している。とくに鳥取県との県境付近は遺跡の密集地帯であり、これまでに彩色を施した穴神横穴墓群や、古墳時代前期の吉佐山根１号墳、そして古墳時代中期から後期の集落跡であるカンボウ遺跡などがある。

第１図　建設中の安来道路（五反田遺跡付近）

第２章　位置と環境

山ノ神遺跡と五反田遺跡は、島根県安来市吉佐町に所在し、県東端部の中海南岸に面した低丘陵上に位置する。この丘陵は南側山塊から北方向に派生するいくつもの小丘陵からなっており、古代においては全面に中海が入江状に入り込んでいたものと推定される。この「入江」は現在では米子湾として縮小したものとなり、県境はその中央部を走っているが、本来は、この入江沿岸部は一つの地域と捉えられるように見え、このことが歴史上どのような性格を持っていたか興味の引かれる点である。また、安来道路予定地で発見された遺跡群は、それまでに周知されていたものの南側縁辺部にあたり、以前は遺跡の知られていない地帯である。このことは中海沿岸の丘陵先端部に、発見しやすい古墳が集中していることに関わるが、それ以上に内陸部が居住地、あるいは生産の場として早くから利用されていたことを物語っている。以下では、この入江に面した遺跡の様子を時代を追って紹介したい。

縄文時代

縄文時代の遺跡は、島田黒谷Ⅰ遺跡において前期から後期の土器、石器が出土しており、他の中海周辺部の縄文遺跡と同様早くから生活の場となっているようである。この他鳥取県側でも陰田遺跡群において早・前期の土器や、晩期の貯蔵穴なども確認されている。今回報告する山ノ神遺跡では早期と考えられる土器が出土しているが、単独出土であるため、性格等は明らかでない。また当該期の住居等が発見されないのはこの地に限ったことではなく、山陰全般に言えることであり、今後の調査が待たれる。またこの期と推定される落とし穴も少なからず検出されており、五反田遺跡の東に隣接する目廻遺跡でも、丘陵斜面部で１基検出されている。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡は今のところ明確でないが、やや離れた米子市の奥陰田遺跡群や目久美遺跡などで確認されているほか、この地域でも中海沿岸部、あるいは沖積地に存在する可能性が高い。

弥生時代中期の遺跡は、これまでやや内陸部にある高広遺跡の住居等が知られる程度であったが、近年の調査で比較的多く検出されており、特に丘陵部で展開する後葉の資料が増えつつある。建物等の集落構造は今ひとつ明確でないが、今回報告する山ノ神遺跡の遺構群はこの点では、まだ良好な資料と言える。また奥陰田遺跡群では、この期の特徴とされる分銅形土製品も出土しており、注目される。

弥生時代後期の遺跡は、安来道路予定地の調査でも非常に多く見られ、特に前半期の丘陵集落として門生黒谷Ⅲ遺跡は良好な資料と言える。後半期の集落は丘陵高所に立地するものが多く、特に陽徳遺跡では比高差約80mの丘陵頂部に数件の住居が存在し、いわゆる高地性集落の一つのあり方として注目されつつある。山ノ神遺跡でもわずかながら後期の土器片が出土しており、調査区外の高所に遺構が存在する可能性が高い。この時期の墳墓は島田黒谷Ⅲ遺跡で１基見つかっているほか、目廻遺跡でこの時期の可能性のある木棺墓が単独で見つかっている。周辺地域ではかなり確認されており、この他にも中海沿岸部の丘陵高所に存在する可能性もあろう。また包含層出土であるが、カンボウ遺跡からは九州北部から搬入された壺も出土しており、この地域の性格の一端を反映している可能性がある。

古墳時代

古墳時代の遺跡は最も多く確認されており、古墳以外にもここで紹介するような集落が普遍的に存在するようである。安来道路の調査でも、遺物の大半は古墳時代、特に後半期のものがほとんどであり、徳見津遺跡のように奈良時代に継続する集落も認められる。

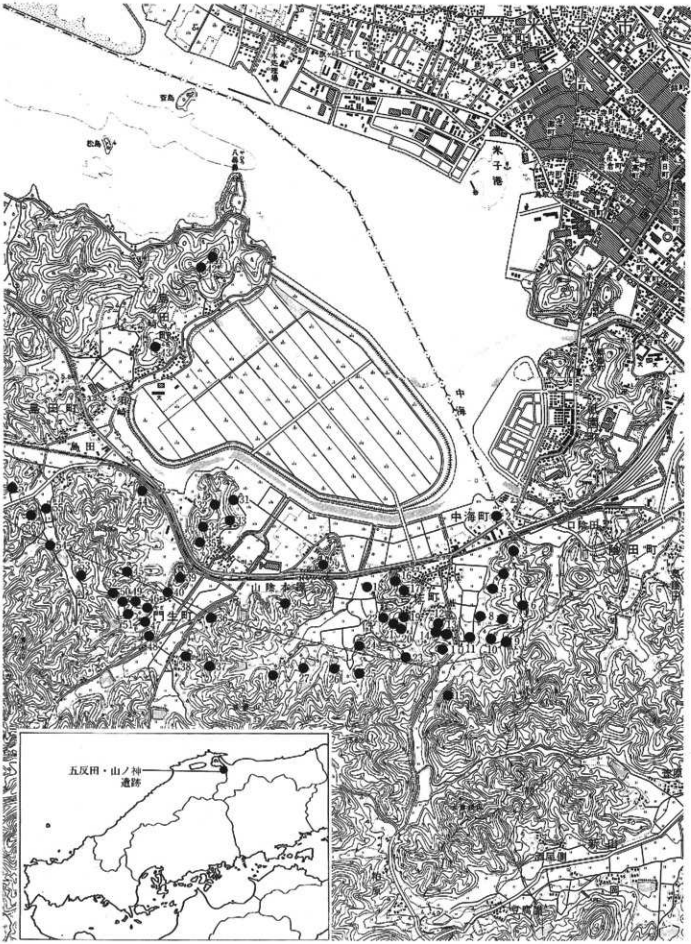
古墳時代前期の遺跡は、その後半期集落として五反田遺跡や石田遺跡の竪穴住居のほか、丘陵部を中心に遺物が散見される。墳墓は吉佐山根1号墳（一辺約8mの方墳）、陽徳遺跡Ⅱ区2号墳（一辺10m以下の方墳、土器棺）、五反田古墳群（1号墳は径25mの円墳で竪穴式石室を持つ。他は小型の方墳等）、八幡山古墳（小型の円墳）などが知られる。これらは古墳時代前期でもその終わり頃に築造されたものと考えられ、五反田1号墳は中期に入るものと考えられる。これらは主体部に箱式石棺を持つものが多く、中でも吉佐山根1号墳では3基の石棺と1基の木棺が納められており、特徴的である。これらはいずれも丘陵高所にあり、五反田1号墳が突出する規模である。

古墳時代中期（5世紀～6世紀前葉）の遺跡は、集落としてカンボウ遺跡、平Ⅱ遺跡の他、陰田遺跡群などでも確認されており、やや周辺部であるが、東宗像遺跡では九州系の石室などが存在し注目される。また、平Ⅱ遺跡ではこの期のものと推定される玉作関連遺物が出土しており、当該期に出雲部の一部であることを物語る資料と言えるかもしれない。古墳はカンボウ遺跡で小墳が見つかっているほか、丘陵頂部に比較的多数の小墳が見られ、前期から中期にかけて築造されたものと考えている。また、油田古墳群では6世紀前葉の須恵器が表採されており、横穴式石室導入前の古墳群と考えられる。生産遺跡としては高畑古窯址群が著名である。この遺跡は北側の高畑地区と南側の山根地区に大きく二分されているが、基本的にこの一帯が5世紀から6世紀前半の須恵器生産の場であったことを物語っており、安来道路予定地でも門生黒谷Ⅰ遺跡で1基調査が行われている。また、その廃絶時期については明確でなく、6世紀後半に引き続き生産を行っている可能性は高いものと考えている。

古墳時代後・終末期の遺跡は今回報告する山ノ神遺跡、五反田遺跡の他、徳見津遺跡、目廻遺跡平Ⅰ遺跡、平Ⅱ遺跡、石田遺跡、カンボウ遺跡、そして米子市の陰田遺跡群などで他の時期に比して圧倒的な遺構・遺物が検出されている。特に山ノ神遺跡・徳見津遺跡では、6世紀中葉から始まるこの一大画期の開始期の集落が検出されており、その特徴的な須恵器と伴に鍛冶遺構も存在している点が注意される。やがて、この鍛冶遺跡は製鉄を伴う製鉄関連遺跡としての五反田遺跡を生み出しており、その後も徳見津遺跡や陰田遺跡群など、当地域の大生鉄遺跡群に発展する。この時期の古墳は県境に位置する神代塚古墳などの横穴式石室墳が少数見られる他、ほとんどが横穴墓を採用しており、特に穴神1号横穴墓では、出雲東部で使用される荒島石製の横口式家形石棺を内蔵しており、この石材の東限として注目されている。また、この地域周辺の当該期横穴墓で製鉄炉の炉壁や、製錬滓が出土することも多く、詳細な時期等は不明確であるが、鉄製産と絡む重要な問題を提起している。

奈良時代

奈良時代も引き続き丘陵部が集落として利用されており、鉄製産も行われている可能性が高い。また文字資料の出土も散見され、今後最も注目される時期と言える。



第2図　遺跡位置図（1／25，000）

番号	遺跡名	所在地	内容	概要
1	平ラII遺跡	安来市吉佐町	古墳	土師器、須恵器、鉄器、
	吉佐山横1号墳		横穴墓	布目瓦、玉作関係(碧玉等)
	穴神横穴墓群		集落跡	
2	八幡山古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺、鉄剣、合せ口土器棺
3	国吉山古墳群	安来市吉佐町	古墳	
4	吉佐古墳	安来市吉佐町	古墳	円墳3基
5	穴の坪遺跡	安来市吉佐町	集落跡	土師器、須恵器
6	国吉遺跡	安来市吉佐町	石蓋土壙墓	
7	カンボウ遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	竪穴住居跡、弥生土器、土師器、須恵器
8	神代塚古墳	安来市吉佐町	古墳	横穴式石室、須恵器
9	神宝古墳群	安来市吉佐町	古墳	円墳
10	古佐貝姫塚古墳	安来市吉佐町	古墳	横穴式石室、須恵器
11	石田遺跡	安来市吉佐町	古墳、集落跡	竪穴住居跡、弥生土器、土師器、須恵器
12	四方神古墳	安来市吉佐町	古墳	方墳
13	油田・平古墳群	安来市吉佐町	古墳	
14	平横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	直刀、須恵器、陶棺、円筒埴輪
15	山ノ神古墳	安来市吉佐町	古墳	
16	河原崎古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
17	八幡山遺跡	安来市吉佐町	散布地	土師器
18	茶屋畑廃寺	安来市吉佐町	寺院跡	須恵器、土師器、布目瓦
19	小枝宅遺跡	安来市吉佐町	散布地	石斧
20	塚根山横穴群	安来市吉佐町	横穴墓	4穴、四柱式平入り
21	塚根山古墳群	安来市吉佐町	古墳	2基
22	湯横穴	安来市吉佐町	横穴墓	四柱式妻入り
23	平ラI遺跡	安来市吉佐町	散布地	土師器、須恵器、布目瓦、陶磁器
24	松本古墳	安来市吉佐町	古墳	箱式石棺
25	**山ノ神遺跡**	**安来市吉佐町**	**集落跡**	**集落、縄文土器弥生土器、土師器、須恵器、**
26	徳見津遺跡	安来市吉佐町	集落跡	須恵器、土師器、鉄製品
27	日廻遺跡	安来市吉佐町	木棺墓	
28	**五反田遺跡**	**安来市吉佐町**	**集落跡**	**土師器、須恵器、銅冶炉、鍛錬炉炉壁**
29	八坂古墳	安来市門生町	古墳	円筒埴輪
30	八坂経塚	安来市門生町	経塚	
31	小崎遺跡	安来市門生町	散布地	弥生土器
32	和田古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
33	下口古墳群	安来市門生町	古墳	円墳2基
34	常福寺山上墓地	安来市門生町	土壙墓	
35	山根古墳	安来市門生町	古墳	前方後円墳
36	陽徳経塚	安来市門生町	経塚	一字一石経
37	陽徳遺跡	安来市門生町	集落跡、古墳	弥生土器、上師質土器
38	陽徳寺遺跡	安来市門生町	寺院跡	土師器、須恵器、陶磁器、五輪塔
39	大歳神社古墳	安来市門生町	古墳	方墳か?
40	門生・山根遺跡	安来市門生町	集落跡	竪穴住居、掘型はそう
41	岩崎宅横穴	安来市須崎町	横穴墓	直刀、須恵器
42	赤埼山横穴	安来市島田町	横穴墓	丸天井形
43	ちょう塚古墳	安来市島田町	古墳	円墳、陶棺
44	東谷古墳群	安来市島田町	古墳	人物埴輪
45	門生古窯跡群高畑地区	安来市門生町	窯跡群	須恵器散布地、須恵器工房跡
46	黒谷古墳群	安来市門生町	古墳	方墳、円墳
47	門生黒谷II遺跡	安来市門生町	集落跡	土師器、須恵器、スラグ、緑釉陶器
48	門生黒谷III遺跡	安来市門生町	古墳、集落跡	五反田古墳群(円墳)、土師器、円
49	ウガフキ炉跡	安来市門生町	炉跡	筒埴輪、弥生土器 スラグ
50	門生古窯跡群山根地区	安来市門生町	窯跡群	須恵器散布地
51	門生黒谷I遺跡	安来市門生町	集落跡、窯跡	須恵器窯体、須恵器
52	島田黒谷III遺跡	安来市島田町	墳墓群等	木棺墓、箱式石棺、土壙墓、管
53	島田黒谷II遺跡	安来市島田町	散布地	玉、須恵器
54	島田黒谷1遺跡	安来市島田町	集落跡	縄文土器、弥生土器、土師器、
56	蔦靖場遺跡	安来市島田町	集落跡	須恵器、竪穴住居、加工段、弥生土器、
57	島田南遺跡	安来市島田町	集落跡	土師器、掘立柱建物跡、土師器、須恵器、墨書土器、ヘラ描き土器

第1表　周辺の遺跡一覧表

第３章　調査の経過

第１節　　山ノ神遺跡

平成５年６月１日～同７月12日に、遺構の広がりを押さえるためにトレンチによる１次調査を行った。その結果丘陵部のトレンチ12カ所のほぼ全てから弥生土器、土師器、須恵器などが出土し、竪穴住居などの遺構も確認され、一旦は全面調査を行う必要があるものと判断された。その後全面調査を担当することになった調査員により再度、トレンチ調査の成果の確認を行ったところ、谷水田部の水田遺構（畦畔）は自然流路と判断されたため対象地から外した。また、丘陵南半部の竹林の一部は畑地造成時の削平が著しいことから、調査の状況を見て判断することにした。

現地調査は平成６年４月11日から開始した。調査以前は北半部が果樹園、南半部は竹林であったため、攪乱土層が通常より厚く重機によってこれを除去した。この表土掘削寺の排土量は相当なものであったため、標高19m付近で一旦中止し、それ以下の調査は順次行うこととした。

遺構検出は丘陵高所から開始し、徐々に谷底に向かって降りながら遺構の有無を確認した。最初に検出した遺構は坑道状遺構の陥没痕跡で、当初はその性格がつかめず、検出に手間取ったが、最終的には重機を利用しての確認程度とした。丘陵裾部や谷部では古墳時代後期の建物が検出された他、弥生土器も出土したため、下層に弥生時代の遺構面が存在するものと想定し、調査を進めた。しかし、古墳時代の遺構面と弥生時代の遺構面のレベル差は10cmに満たない場所がほとんどであり、結局、地山同一面でしか両者を検出できなかった。

７月から８月にかけては百年に一度と言われるような猛暑に見舞われ、気温30度以上、降雨量０が続いた。特に８月上旬は気温36～37度の中、遺構検出が一番困難な谷底部の調査を実施せねばならず、建物や段状遺構も基底部付近でようやく認識できる状態であった。このような状況の中、次の調査対象地である五反田遺跡の調査範囲確定のため、トレンチ調査を平行して実施した。最終的に調査が終了したのは８月29日である。

第３図　山ノ神遺跡調査風景

第２節　五反田遺跡

前記した山ノ神遺跡の調査が最終段階に入った後の、平成６年８月２日から次の調査区である五反田遺跡のトレンチ調査を開始した。遺構の広がりを確認した後、８月31日に重機により表土除去を行ない、９月５日より本格的な調査を行なった。

遺構検出は東側の第Ⅰ調査区から開始したが、この尾根西斜面では想像以上の遺構群が検出されはじめ、特に北端部では鉄滓が多数出土し、製鉄関連遺跡であることが判明した。しかし、遺構は数回の造り替えにより重複したものとなっており、調査は困難を極めた。また、第Ⅱ調査区（10月19日調査開始）、第Ⅲ調査区（10月３日）と調査が進むにつれて、遺跡全体をカバーすることも困難となり、また、東側に位置する日廻遺跡の調査も平行して行わねばならず、最終的には調査班を２～３グループに分離してこれに対処した。この間、相次ぐ鍛冶炉の検出から、調査時には県内最古級の鍛冶集落であることが判明し、当時では類例の乏しい貴重な資料と言うことで、調査方法に検討を加える必要が生じた。

遺構の調査は、製鉄関連遺物の採取を目的とした方法（床面に方眼を組み、メッシュ毎にサンプリングするなどの方法）も検討したが、調査期間の制約や、何よりも床面の検出自体が困難なことから、必要最低限のサンプリングに留めた。また、第Ⅱ調査区では、山ノ神遺跡と同様の坑道状遺構が検出されたが、これについても最小限の調査しかできなかった。このように調査は遺構検出そのものに時間を費やしたため、測量等はなかなか進まず、他の調査班からの応援を得るなどして対処した。

11月17日には、徳見津遺跡、門生黒谷Ⅱ遺跡と併に調査指導を受け、古墳時代集落と製鉄関連遺跡として多くの知見を得た。その後、調査は最終段階を迎えたが、12月初旬の突然の大雪（積雪20cm）などにより、最終的には作業は12月24日に終了した。なお、一部の鍛冶炉については翌年の１～３月の天候を見ながら調査し、完了したのは３月14日であった。

第４図　五反田遺跡調査風景

第４章　山ノ神遺跡の調査

第１節　遺跡の概要と調査区

山ノ神遺跡は標高15～30mの丘陵部に立地し、この一帯に広く展開するナシ畑、竹林として利用されていたため、遺構の遺存状況は耕作のため良好とは言えない。中心となるのは弥生時代中期後葉と、古墳時代後期の集落跡である。このうち古墳時代後期に関して言えば、西側に隣接する徳見津遺跡東半部でも同時期の遺構が確認されており、さらに谷奥部にも拡がっているものと推定される。特に、この谷地形は緩やかに上昇する扇状地状を呈しており、遺跡の中心はさらに奥まった部分に存在するものと推定している。この点は弥生時代の遺跡が周辺ではこの地点のみで検出されていること、さらに古墳時代後期にこの地点から集落が開始されることと無関係ではないであろう。

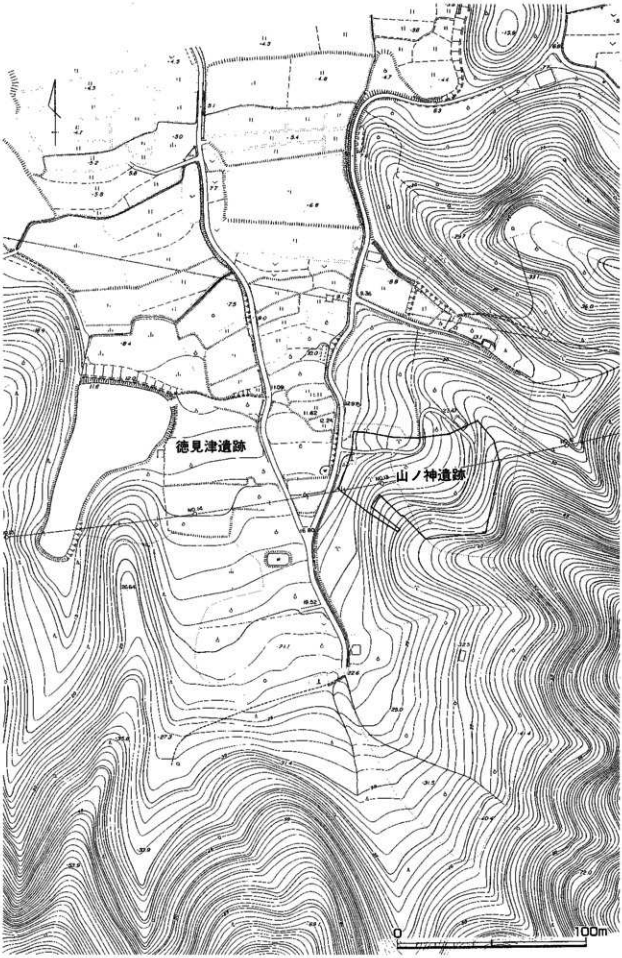
本遺跡で検出された遺構は大半が集落関連のもので、時期的には弥生時代中期後葉と古墳時代後期の二つに分けることができる。この他遺物としては、縄文時代早期と推定される土器の出土や、弥生時代後期中葉頃の土器片なども確認されている。

調査区はトレンチ調査の成果を元にできるだけの面積を対象としたが、排土処理の問題や、調査区上方では遺構がほとんど存在しないことから、新たにトレンチを追加して調査対象地を限定する方法を採った。特に、丘陵西側斜面部は竹林造成時の削平を受けていることが判明し、調査対象地から除外した。また、谷低位部はほとんど遺物を出土しないため、これも調査対象から外し、隣接する徳見津遺跡の谷部調査を見ながら行うこととした。

まず縄文時代の遺物であるが、早期と推定される土器片が丘陵高所の坑道状遺構で検出されている。この遺構は当初地下式横穴と想定していたものであるが、最終的には性格不明のトンネル状を呈する遺構であることが判明し、大半の天井部が崩落し、陥没痕跡は土坑と誤認する状況であった。この遺構が縄文時代早期以前にまで遡る可能性もあるが、今後の調査例を待って判断したい。

弥生時代中期後葉の集落は、丘陵の比較的低位部検出されており、土器や石器が少なからず出土している。トレンチ調査結果からは、これらは層位的に検出できるものと考えていたが、実際には薄い包含層を挟むのみで、古墳時代の遺構と同時に地山面でしか検出できなかった。名確な竪穴住居は検出できなかったが、壁溝、あるいは排水溝を伴う段状遺構が３基確認されており、何らかの建物が存在していたことは間違いないと考えている。そのほかに性格は不明であるが、土坑２基が検出されており、内部から良好な土器資料が検出されている。また、土器溜まりとしか認識できなかったが、この時期の指標となる土器群も存在し、この時期としては全体的に好資料を得たと言える。

古墳時代後期の集落は上記した弥生時代集落に重複して検出されており、立地的には古い時期のものが谷低位部に、新しい時期のものがやや高所で検出されている。確認できた遺構は竪穴住居２軒、掘立柱建物７軒、段状遺構10基であるが、このうち段状遺構については無柱穴の竪穴住居や、平地式建物と推定されるため、本文では便宜的に、明確な建物と段状遺構の二つに分けて説明した。このうち比較的古い時期のものは大半が小型無柱穴の竪穴住居と推定され、集落開始期の状況として注意すべき点かもしれない。新しい時期のものは掘立柱建物の他、４本柱の竪穴住居が確認でき、無柱穴の小型竪穴住居は消失する可能性すらある。この他建物以外では小型の被熱土坑が７基検出



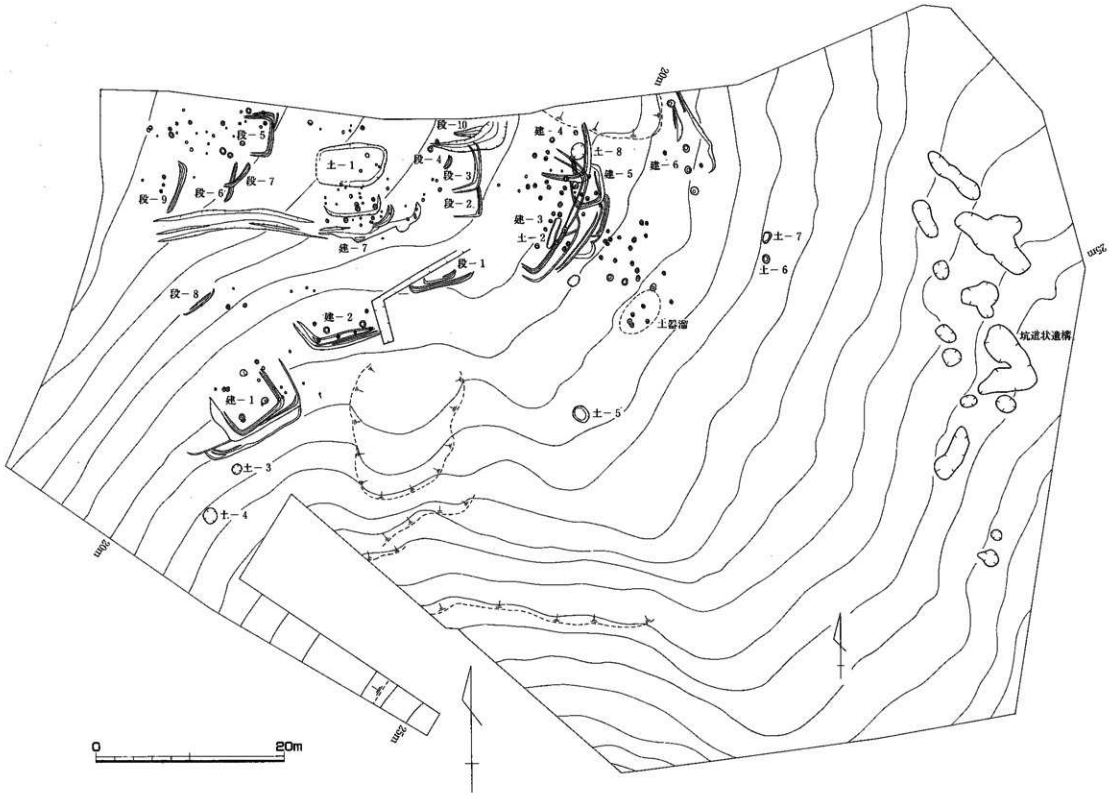
第5図　山ノ神遺跡調査区配置図（1／1，000）

されており、いずれもこの時期のものと考えている。これらは隅丸（長）方形、あるいは円形プランを持ち、壁面上部に粘土貼りが認められるものである。内部には炭化物や粘土壁片を多量に含むものが多く、これらが小型の製炭窯であることを示している。

なお、本文中では出土須恵器から遺構の時期について、実年代を多用したが、もちろんおおよその年代についてであり、遺構の流れを理解しやすいために行ったものである。

古墳時代終末期の遺物、７世紀の前半～中頃の土器も少量ながら出土しており、この点については第６章において考察している。

第６図　山ノ神遺跡全景



第７図　山ノ神遺跡構全体図（１／４００）

第2節　検出した遺構・遺物

（1）建物

建物については便宜的に、柱穴配置が想定できるものと明らかな竪穴建物を取り扱っており、後者のうち柱穴を持たない小型のものについては、後述する段状遺構の中にもその可能性があるものが多数あることを断っておきたい。

建物1（第8図）

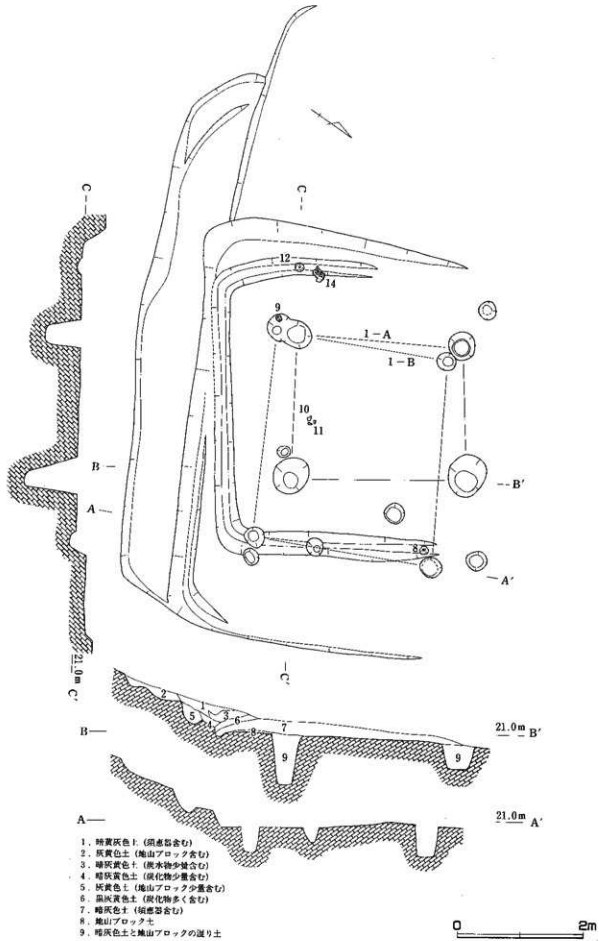
遺跡南側の尾根斜面部に位置する竪穴建物で、調査区内では最も標高の高い位置にある。また、平成5年時のトレンチによって、すでに存在が確認されていたものであり、全面調査時点ではほぼ中央部がトレンチにより削平されていた。1回の建て替えが認められ、切り合い関係から後出する小型のもの（建物）1－A、先行する大型なもの（建物）1－Bが存在する。また、建物南側にこれと関連すると推定される段状遺構が建て替えに対応するように重複して検出されているが、詳細は明確にできなかった。

建物1－Aは東西4.35m、南北推定4.85mを測る方形プランを呈し、柱穴配置は4本柱である。壁溝は北半部は流出のため不明であるが、他は途切れることなく回っており、内部から完形の須恵器坏などが出土している。柱穴と壁溝の距離は芯々で1～1.2mを測り、床面積と柱穴内区画面積の比は約100：29と推定される。柱穴の深さは均一でなく、柱材の長さは柱穴の深さで調整したものと考えられる。土層観察で炭化物を多く含む層が認められ、焼失とは限らないが、壁材の痕跡である可能性も捨て切れない。建物1－Bは切り合い関係から1－Aに先行するものであることが明かであり、規模は東西6.1m、南北推定4.8mを測り、柱穴は4本柱である。壁溝は南東コーナー部でのみ検出したが、本来は全周していた可能性が強い。柱穴と壁溝の距離は1.0～1.3mを測り、床面積と柱穴内区画面積の比は100：32である。床面の標高は約21.15mで、1－Aに比して18cm高い。

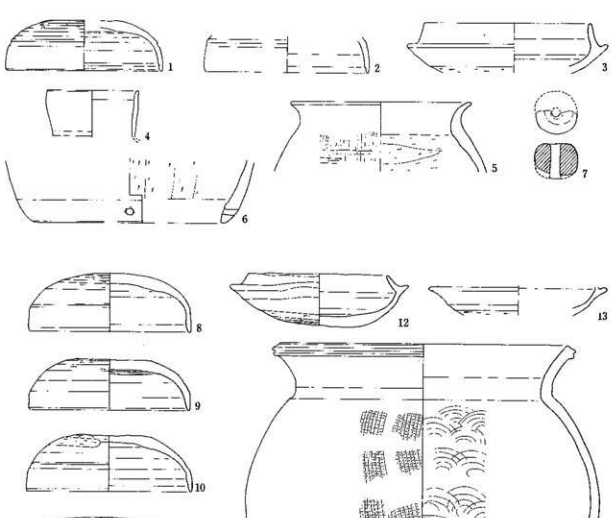
遺物（第9図）は、堆積土中から1～7が、1－Aの床面・壁溝内から8～10が出土している。いずれも須恵器が多数を占めている点や、床面に完形品を残す建物跡は他にほとんど見られない点も注意される。1～3の須恵器蓋坏は床面出土品に比してやや古相を呈しており、先行する時期の建物1－Bに関連する可能性が高い。4は須恵器の直口壺口縁部、5は土師器の甕片である。6は須恵器の甑底部片で、端部の小孔は2方向と推定される。7は土師質の土錘片で、全長2.8cm、外径3.3cm、孔径0.7cmを測る。

床面出土の須恵器蓋坏8～13はいずれも回転ヘラケズリが施されており、蓋は外面の稜線は痕跡をとどめるものと、屈曲部のみで表現されるものとがある。また、蓋の口縁端部内側には明確な段や沈線などは見られないが、微かにそれを意識したような調整が施されている。蓋の口径・器高は12.9～13.2cm以上・4～4.6cmを測る。14は小型の甕で、焼成は極めて不良、復元口径24cmを測る。

これらの出土須恵器から、この建物の廃絶時期は6世紀第4四半期の内にあると考えられる。また、築造時期については、6世紀第3四半期まで遡ることになろう。なお、廃絶時資料（8～14）は本遺跡内では最も新しい型式と言え、次章で扱う五反田遺跡出土須恵器の最古型式（溝状遺構1出土品）より古相を呈しており、集落移動の根拠となるものである。



第8図　山ノ神遺跡　建物1（1／60）



第9図　山ノ神遺跡　建物1出土遺物（1／3）

建物2（第10図）

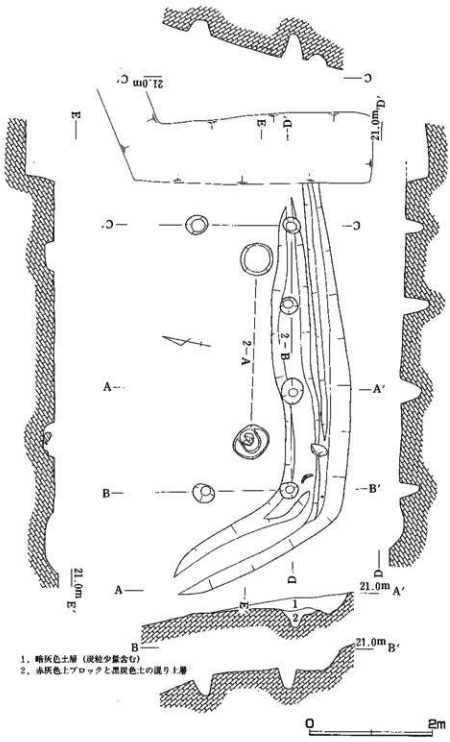
建物1の北東斜面に位置する掘立柱建物で、壁溝と柱穴配置から1回の建て替えを行っているものと判断している。明確な切り合い関係は不明であるが、標高の高い側に作り替えていることが通常であることから、この建物も同様に想定し、本来は1×1間の柱穴配置の建物2－Aから建て替え後に2×3間の柱穴配置建物2－Bに変化しているものと考えられる。

建物2－Aは柱穴2穴と壁溝の一部のみしか残存しておらず、全体の様子は不明確であるが、柱穴が非常に浅く、西側の柱穴内には礎石状に詰め石がなされている。自然に考えれば、1×1間の柱穴配置を持つ建物を想定できるが、調査区内にこれと同様なものが見あたらないことから、他の建物構造も考慮する必要があろう。

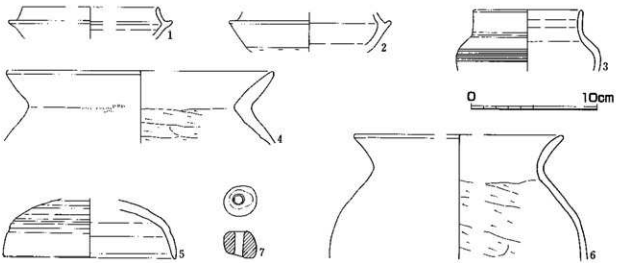
建物2－Bは東西3間（4.15m）、南北2間（推定2.9m）の柱穴配置を持ち、柱穴事態は径が23～35cmと非常に小規模であるが、深さは35cm前後と、2－Bに比して全く異なるものである。また、

中間部の柱穴が一段浅くなるような傾向が見られない点も注意しておきたい。

遺物（第11図）は堆積土中（ほぼ床面）から、１～４が、柱穴Ｐ－１の（柱痕と推定）内から５～６が出土している。４は復元口径21.4cmを測る土師器甕で、くの字に屈曲する古式の形態を残している。５は復元口径13.8cm、器高4.7cmを測る須恵器蓋で、外面稜線や、口縁端部処理はまだ明瞭なものである。これらの遺物から、建物の時期は６世紀後半と考えられ、廃絶時期は建物１とほぼ同時期として矛盾ないであろう。



第10図　山ノ神遺跡　建物２（１／６０）



第11図　山ノ神遺跡　建物２出土遺物（１／３）

建物３（第12図）

建物３は複数の建物が重複するもので、多数の柱穴とA～Gの複数の段状遺構からなる。このうち段状遺構Aは、後述する建物４，５に後続するものであることが切り合い関係より明らかであり、その後B、C、Dと建て替えを行っているものと推定される。なお、E～Gについては段状遺構の一部と考えられるが、全体の様相は明確でない。また、柱穴は明確なものが存在するが、その配置については判然としない点があり、検出時の見落としもあり得ることから、ここでは断定的な表現は控えておきたい。

段状遺構Aはコの字状を呈する壁溝によって構成されるもので、床面の規模は南北約9.0mを測る大型のものである。壁溝の屈曲部の様子が南側と北側で異なる点、北側壁溝端部が幅広がりとなっている点などは注意しておきたい。また、この壁溝沿いに柱穴が列状に並ぶ（C－C'ライン）ようにも見て取れることから、これをひとつの柱穴配置の可能性として指摘しておきたい。

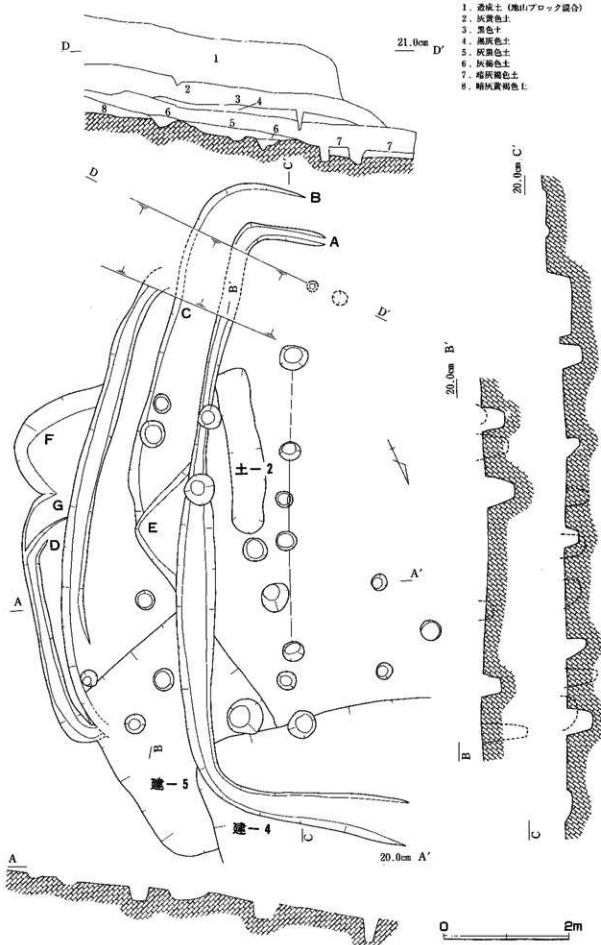
段状遺構Bは Aとほぼ並行するものであるが、明確な壁溝は検出できていない。伴う柱穴についても明確なものはなく、むしろ柱穴を伴わないタイプの建物が存在した可能性が強い。

段状遺構Cも、Aとほぼ平行し、こちらは明確な壁溝を検出できている。柱穴については可能性のあるものもあるが、明確な柱穴配置は抽出できていない。

段状遺構Dは壁溝がコの字状に残存するもので、床面の南北長は3.2m以上を測る。明確な柱穴は抽出できておらず、むしろ柱穴の存在しないタイプの可能性が強い。

段状遺構E～Gはいずれもコーナー部が残存したものと推定されるが、詳細は不明である。いずれも主軸が段状遺構Dと平行関係にある点が注意される。

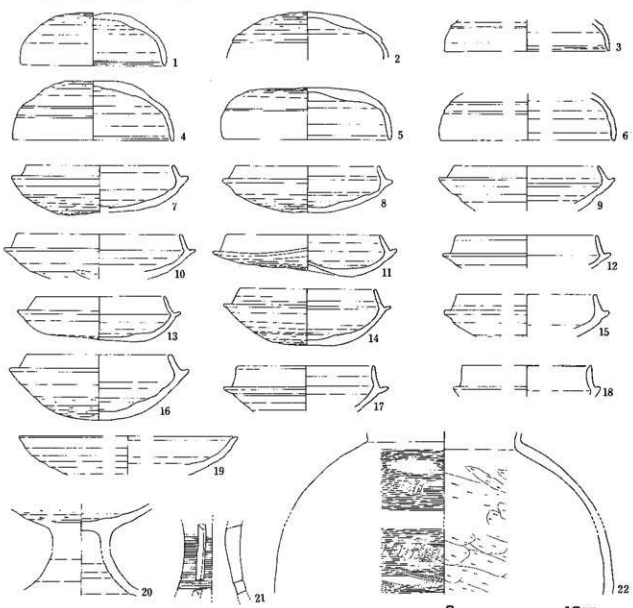
これらの建物群（段状遺構）から出土した遺物（第13・14図）は、ほとんどが破片であり、他時期の混入品も含まれると思われる。しかし、下層遺構である建物４，５に後出する点や、極端に新しい遺物を含んでいないことから、ある程度時期が限定されるものといえよう。須恵器は大半が壺坏で、少量の高坏や甕が認められる。土師器は量的に多く出土しているが、図化できたものはごくわずかであり、甕・甑・移動式カマド・土製支脚など通有のものが認められる。



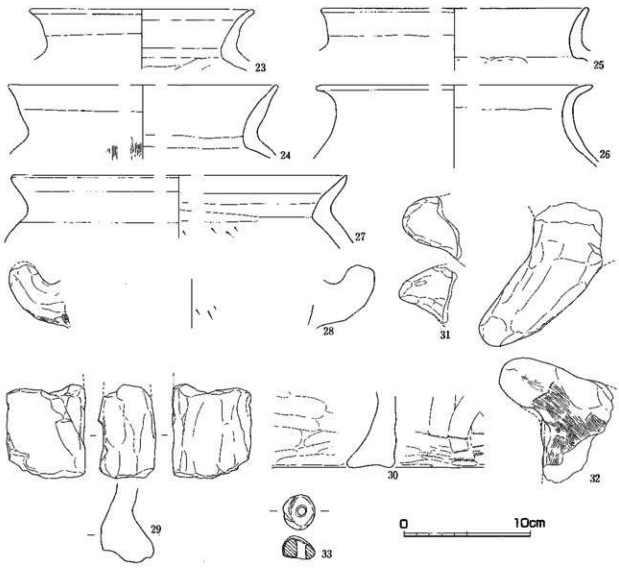
第12図　山ノ神遺跡　建物3（1／80）

1～6は須恵器の蓋で、いずれも天井部は回転ヘラ削り、口縁端部内面に段や沈線を持つものである。また、天井部と口縁部の境は段、あるいは稜線を明確に残すものばかりである。7～18は坏で、底部外面は回転ヘラ削り、口縁部は長く立ち上がるものが多く、18は端部に沈線の痕跡が認められる。これらはいずれも天井部、あるいは底部が丸いものと、扁平なものがある点は二つの技法の存在を反映しているとも考えられ、注意しておきたい。19～21は高坏で、20は端脚、21は長脚二段透かしである。22は壺の体部片と推定されるもので、外面は叩き後カキメ調整、内面は横方向のヘラ削りが施されている。23～27は土師器の甕口縁部で、頸部が屈曲するタイプがほとんどで、26のような頸部が湾曲するタイプは少ない。28、31は甑の取っ手部と考えられるもので、31は扁平なタイプである。29は移動式カマドの焚き口部の、30は底部の小片である。
32は土製支脚の突起部で、部分的にハケメ調整を残す。33は土錘片で、包含層出土品と同様のタイプである。

以上の点から建物3は数度の建て替えを行っているが、出土遺物、切り合い関係などから6世紀



第13図　山ノ神遺跡　建物3出土遺物①（1／3）



第14図　山ノ神遺跡　建物３出土遺物㊁（１／３）

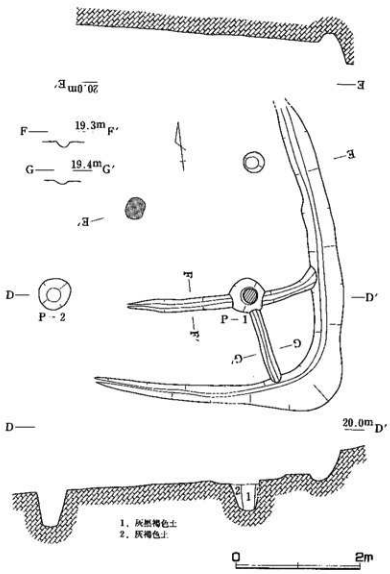
後半の中でも比較的新しい時期のものと考えたい。出土遺物には６世紀後半でも古い時期のものも認められるが、これは下層遺構からの混入品の可能性が強いものと判断している。

建物４（第15図）

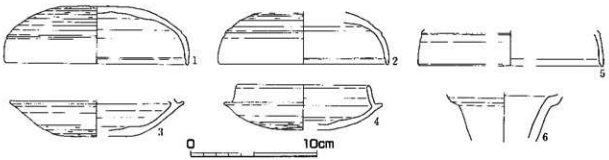
建物４は前述した建物３の下層遺構として検出されたもので、壁溝と柱穴、被熱面などが検出されている。柱穴は確実なものは２穴で、Ｐ－１では径約20cmの柱痕を検出したほか、間仕切り状の溝がＴの字形に造られている。この溝は検出面では西側で消失しているが、本来はＰ－２に接続していた可能性もある。柱穴間距離は梁行き3.0mで、桁方向は調査区外にあるため、不明であるが、3.0m以上はある。壁溝はコーナー部がやや弧状を呈する点が特徴的である。床面の被熱面は粘土貼り等は確認できなかったが、鍛冶炉の可能性を想定して調査していなかったため、その可能性は捨てきれない。以上の点からは、本建物がいわゆる竪穴住居なのか、あるいは掘立柱建物なのか判断が付きにくい。この時期の建物構造の類例が増加した後に、あらためて検討する必要がある。

遺物（第16図）で図化できたのはいずれも須恵器で、壁溝内から1～3・6が、床面よりやや浮いた状態で出土したものが4・5である。1・2は復元口径14.6cm・13.6cmを測り、いずれも外面の稜や口縁端部処理が明瞭に残る。また、回転ケズリは全体の3分の2近く施されている。3は復元最大径13.9cmを測る坏で、口縁部は内傾しているものと推定される。4は復元最大傾12.7cm、器高3.6cmを測る坏で、口縁部の立ち上がりは古い特徴を残している。5は口径不明であるが、口縁部が垂直ぎみに垂下し、外面の稜は段状を呈するなど、古い様相を残している。6は瓶の口頸部と考えられる破片で、表面が風化しているため断定はできないが、波状文の痕跡は全く認められない。

これらの須恵器の胎土・焼成は、壁溝内出土品と堆積土出土品とでは大きく異なり、前者が2mm大の砂粒を非常に多く含み、焼成が甘く不揃いなのに対し、後者は1mm以下の砂粒を少量含み、焼成は断面が灰紫色を呈する良好なものである。このことは、両者のうち蓋坏の型式差とも関係し、古相を呈し焼成良好なものから、やや退化して胎土が粗く焼成不揃いなものへ変化することを示しており、この遺構のみで即断はできないが、遺跡内、あるいは周辺地域の須恵器を検討する上で一つの大きなポイントとなるだろう。



第15図　山ノ神遺跡　建物4（1／60）

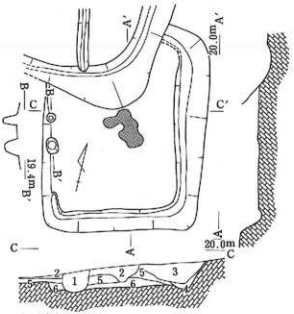


第16図　山ノ神遺跡　建物4出土遺物（1／3）

建物の時期は出土須恵器から、6世紀中葉頃に築造され、6世紀第3四半期のうちに廃絶したものと考えられる。この点は前記した須恵器のうち壁溝内出土品が廃絶時期を、堆積土出土品が築造時期に近いものと仮定したことによる。また、集落の開始期はこれによって切られている建物5の存在を考慮しなければならないであろう。

建物5（第15図）

切り合い関係から建物3，4に先行することが判明しており、これらの建物群の中では最も古い時期のものである。建物構造は主柱穴を持たない竪穴住居で、平面は長方形を呈し、規模は東西2.05m、南北2.85mを測る。床面西側には小ピットが2穴認められ、入り口に関連する施設と推定している。また床面には被熱面が形成されており、鍛冶炉の可能性も検討したが、その形状から移動式カマドに関連する火所の可能性が強いものと考えている。また、この被熱面は小ピット側にやや大きく空間を持つような位置にあり、この点は、小ピットが入り口に関連することの根拠となるものである。壁溝は平面的には全周していないが、土層観察等から西辺にも存在していた可能性が強い。

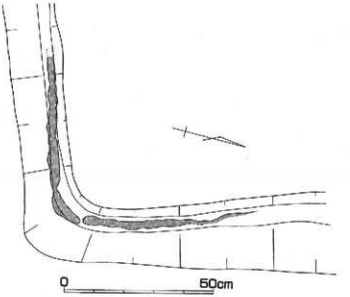


第17図　山ノ神遺跡　建物5（1／60）

第18図　山ノ神遺跡
建物5出土遺物

床面遺物は全く無く、覆土中から須恵器の甕口縁部細片が出土したのみである。しかし、この甕は遺跡谷部で散在して出土したもの（第63図50）と区別がつかないものであり、この建物埋没後に掘りこまれた柱穴（第12図参照）内のものの可能性が強い。

建物の時期は、切り合い関係から前記した建物4に先行することが判明しており、6世紀中葉以前と考えられる。また、本遺跡の古墳時代集落の中では最も古い時期のものと考えられ、開始期の建物構造の一つの形態として注意しておく必要がある。



第19図　山ノ神遺跡　建物5壁材痕跡

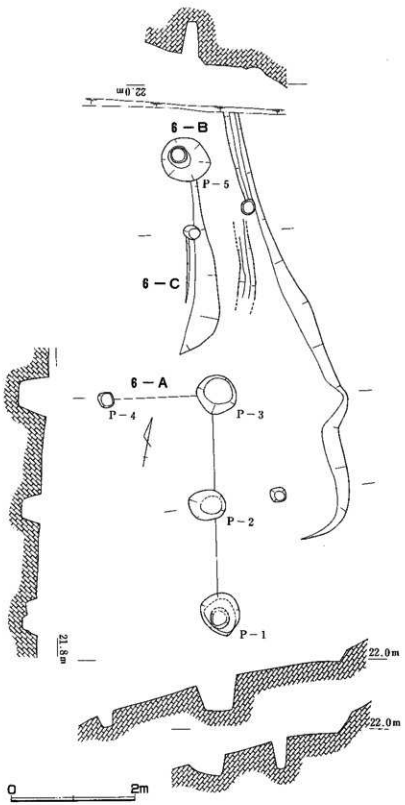
建物6（第20図）

建物6は調査初期段階には1つの段状遺構としていたが、最終的には少なくとも3軒の建物が重複したものであること

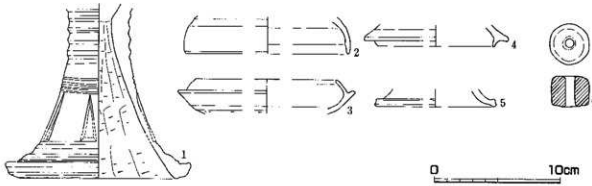
が判明した。建物６－Ａは柱穴Ｐ－１～４で構成されるもので、１×２間、あるいは２×２間の建物と推定され、これに伴うはずの段状遺構は判然としない。建物６－Ｂは柱穴Ｐ－５とこれの東側に走る壁溝で構成されるもので、大半は調査区外にあるため、柱穴配置等は不明なものである。建物６－Ｃは壁溝のみ検出できたもので、Ｐ－５に切られており、これに先行するものであることが判明している。この他壁溝の一部と考えられる溝が検出されているが、位置とレベルから、建物６－Ｂの建て替えに関連する可能性が強い。

遺物（第21図）はわずかであるが、３時期に分類できる。１は建物６－Ｃの壁溝内から出土した弥生土器で、この遺構の時期を示している。高坏、あるいは鉢、壺の脚部で、上部に５段の、下部に３～４段の、脚端部に２段の凹線文を施し、中位には４本のヘラ描き沈線と未貫通の三角形透かし６方向がある。外面調整は風化のため明らかでないが、内面はシボリ痕跡と横方向のケズリが認められる。２～４は堆積土中から出土した須恵器である。２・３は６世紀後半の、４・５は７世紀第２四半期頃のものと考えられる。６は柱穴Ｐ－５から出土した土錘で、建物６－Ｂの時期を考えるうえで参考となる資料である。

以上から建物の時期は６－Ｃが弥生時代中期後葉、他は６世紀後半、そして調査区外の上方に７世紀第２四半期頃の遺構の存在が想定される。



第20図　山ノ神遺跡　建物６（１／６０）



第21図　山ノ神遺跡　建物6出土遺物（1／3）

建物7（第22図）

谷部でも谷底に近い位置で検出されたもので、数回の建て替えが認められる。なお、この建物は後世の削平を受けていることや、8月の猛暑の中調査したこともあり、うまく検出しきれない部分があったことを断っておきたい。検出できたのは複数の段状遺構と、これに伴う壁溝、多数の柱穴である。これらはいずれも前記した理由により、個々の関連が明確でないが、少なくとも2回以上の建て替えを行っているものと推定される。以下では各段状遺構について説明する。

段状遺構Aは浅い土坑状を呈するもので、壁溝は検出できていない。床面からは多数の柱穴を検出しているが、これに伴うものかどうか明確でない。柱穴事態も浅く、むしろ柱穴を伴わない可能性が強いと考えている。

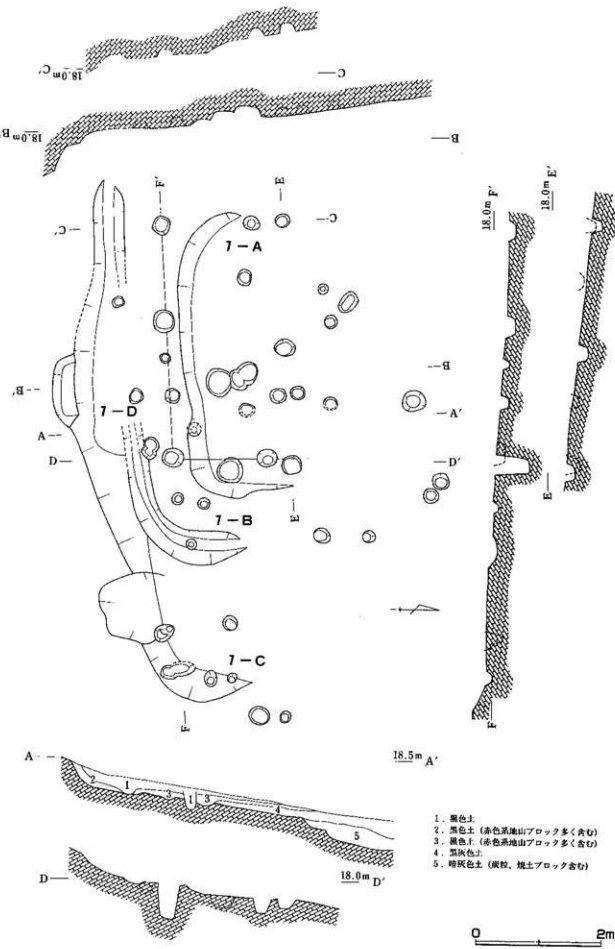
段状遺構Bは平面L字状の壁溝を伴うもので、柱穴は壁溝沿いに走るf－f'、d－d'ラインが配置する可能性がある。この場合梁行き、桁行きとも中間柱が一段浅いタイプとも考えられ、もしそうであれば、桁方向は少なくともう一間西側に伸びることになろう。よって、段状遺構Bは3間以上×2間以上の柱穴配置を持つ建物と想定可能である。

段状遺構Cは段状遺構Bの東側に存在するもので、これと重複するものか、あるいはこれに付属する空間部のいずれかであろう。床面には小ピットが存在するが、これに関連しない可能性が強いと感じている。また、南側の一部に別の土坑状の窪みが存在するが、調査時には明確な切り合い関係は認識できなかった。

段状遺構Dは段状遺構Bの南側で検出されたもので、これとの切り合い関係は明らかでないが、別の段状遺構が重複しているものと考えている。しかし、その形状から単なる土坑となる可能性もあろう。これに伴う柱穴も可能性のあるものがあるが、明確とは言えない状況であった。なお、この段状遺構の南側に付設する小型の段は、後世の土坑が重複している可能性があるが、調査時には明確な切り合い関係は認められなかったものである。

以上のように、各段状遺構は相互の関連性が明確に押さえきれなかったが、他例の状況から基本的に南側高所に向かって建て替えを行っているものと考えている。また、3×2間の建物が存在していた可能性があることを指摘できる点がある他は、建物構造等明らかにできなかった点が問題ではある。

出土遺物（第23・24図）は多数の須恵器や土師器などがあり、いずれも床面に近い位置から出土しているが、各段状遺構との関係は不明である。しかし、これら段状遺構の時期を反映しているこ

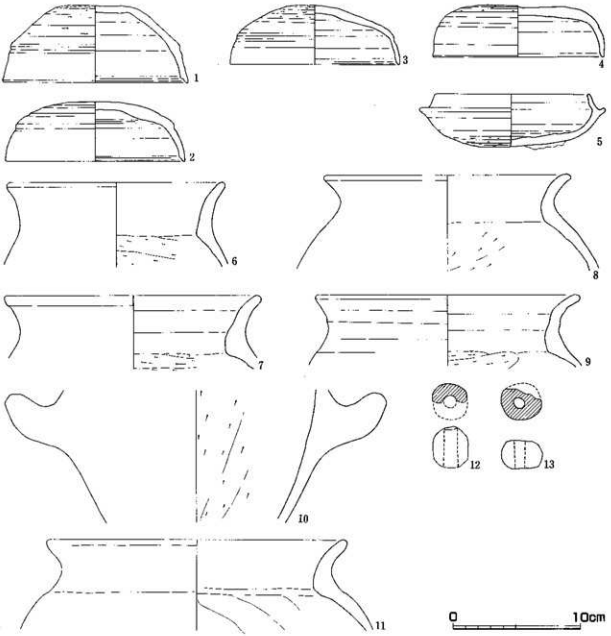


第22図　山ノ神遺跡　建物7（1／60）

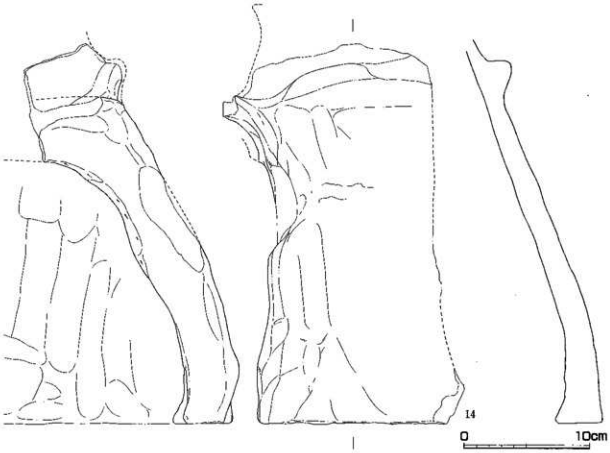
とは間違いないものと判断している。

1～5は須恵器の蓋坏で、いずれも古相を呈するものである。1～3の蓋は天井部が高いタイプで、口径器高はそれぞれ14.7cm・6.1cm、14.2cm・4.8cm、13.5cm・4.7cmを測る。いずれも外面は段に近い稜部を持ち、口縁端部の処理は古相を呈している。4は天井部が扁平なタイプで、口径13.5cm、器高4.0cmを測り、口縁端部処理も前者とは異なる。これらはいずれも砂粒を多く含み、色調が白灰色系を呈し、器壁が厚いものが存在する。これに対して5の坏は砂粒が少なく、薄手で焼成良好なものである。5は最大径14.8cm、器高4.2cmを測り、口縁部の立ち上がりは古い特徴を残す。6～14は土師器・土製品で、風化が著しいものが多い。6～9、11は甕口縁部片で、いずれも口径が体部径に比して小さいものと推定される。10は甑片、12・13は土錘、14は移動式カマド片である。

これらの遺物、特に須恵器の特徴から、本遺構群は6世紀中葉と考えられる。また、移動式カマドは県内最古級のものであり、鍔状突帯を持つなど特徴的である。



第23図　山ノ神遺跡　建物7出土遺物①（1／3）



第24図　山ノ神遺跡　建物７出土遺物㉒（１／３）

（２）段状遺構

ここで言う「段状遺構」とは、斜面で検出されたテラス状の平坦地で、かつ明確に柱穴が伴わないものを指し、その意味では便宜的に付けた名称である。この中には柱穴の存在しない竪穴建物も含まれる可能性があるが、この問題をあえて強調することが目的でもある。

段状遺構１（第25図）

建物２の南側斜面下方で検出されたもので、かなり急傾斜である点、著しい削平を受けている点などから、かろうじて残存していたものである。検出できたのは段状遺構１－Ａ～１－Ｂの３つであり、土層観察から斜面高所に向かって造り替えられていることが判明している。

段状遺構１－Ａは平面がコの字状を呈する壁溝と床面の一部で構成されるもので、切り合い関係から最も先行する時期のものである。明確な柱穴は検出できていないが、斜面が急峻であることから、本来は伴っていた可能性も捨てきれない。規模は東西が2.55mを測り、床面の標高は19.7mである。

段状遺構１－Ｂは１－Ａに後続するもので、同様な壁溝と、床面の一部で構成される。壁溝は西側で直角に曲がっている様子が分かるが、東側ではやや弧状を呈するように見受けられる。柱穴は前者同様検出されていないが、その可能性はやはり捨てきれない。規模は東西が5.4mを測り、床面の標高は19.8mである。

段状遺構１－Ｃはかろうじて検出できたものであり、切り合い関係からこれらの中では最も新しい時期のものであることが判明している。明確な壁溝は平面的にも、土層断面でも認められず、形態規模から土坑の可能性も残る。

遺物（第26図）は２層出土の可能性が強い。１・２は遺小片で、外面に段・回転ケズリを残し、焼成は良好（１は断面紫色）である。３は最大径13.4cmの坏で、口縁部の立ち上がりは古相を呈している。

これらの須恵器から遺構の時期は６世紀中葉と考えられる。

段状遺構２（第27図）

後述する段状遺構２に重複するもので、調査時の状況からこれに後出するものであると考えている。平面は方形状を呈し、コーナー部はほぼ直角に近い形状を持っている。壁溝は東辺のみ認められ、南辺に検出できなかったことは通常と異なる点であり、注意する必要があるだろう。

遺物は出土していないが、６世紀後半のものと考えられる。

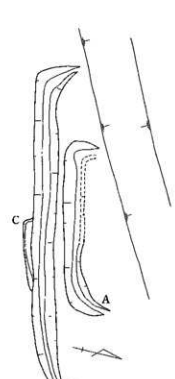
段状遺構３（第27図）

谷部中央の、いわば谷筋上で検出されたもので、コの字状を呈する壁溝と、床面によって構成されるものである。この部分は基盤層が褐色系の色調を持っていた点もあり、検出に戸惑う状況であった。このために後述する段状遺構との関係や、壁溝の一部は明確にできていないなど、やや問題を残している。

検出された壁溝は、他の段状遺構や、建物のものとは異なり、幅広で、深い形態を持つものである。この点を重視すれば、むしろ溝状遺構とすべきかもしれないが、この壁溝で囲まれた部分は明らかに貼り床状の土が認められ、他とは性格の異なる段状遺構として検討すべきものと考えている。これに伴う柱穴は明らかでないが、他時期のものと推定される柱穴群が西側下方に存在している。

壁溝からは多数の遺物が出土しており、検出時にはほぼ完形品として認識できる土師器も含まれている点は特徴的と言える。

遺物（第28図）は２が堆積土中で、他は全て構内の出土である。１は口径12.5cmの須恵器蓋で、砂粒を多く含み焼成は不良である。２は口径13.8cm、器高4.9cmを測るもので、外面の段、口縁端部の形態は比較的古相を持つものである。３～９は土師器で完形近くに復元できるものが多い。３は口径9.0cm器高6.1cmの土師器坏で、内面はケズリ調整を施す。４・５は同一個体と考えられる甕である。７・８は大型の甕で、体部は球形に近いものと推定される。９は甑で、底部側面の小孔は１対と考えられる。



第25図　山ノ神遺跡
段状遺構１（１／６０）

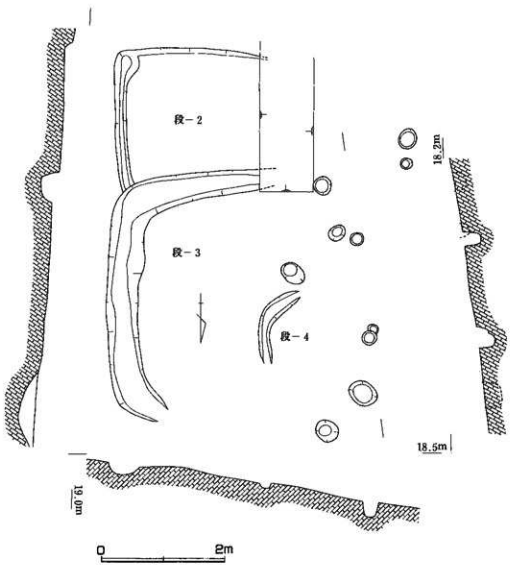
第26図　山ノ神遺跡
段状遺構出土遺物
（１／６０）

遺構の廃絶時期は、須恵器蓋1の型式から6世紀後半でも第4四半期まで下るものと考えられる。また、この時期の土師器のプロポーションを知るうえで好資料となろう。また、土師器が大半を占めること注意すべき点かもしれない。

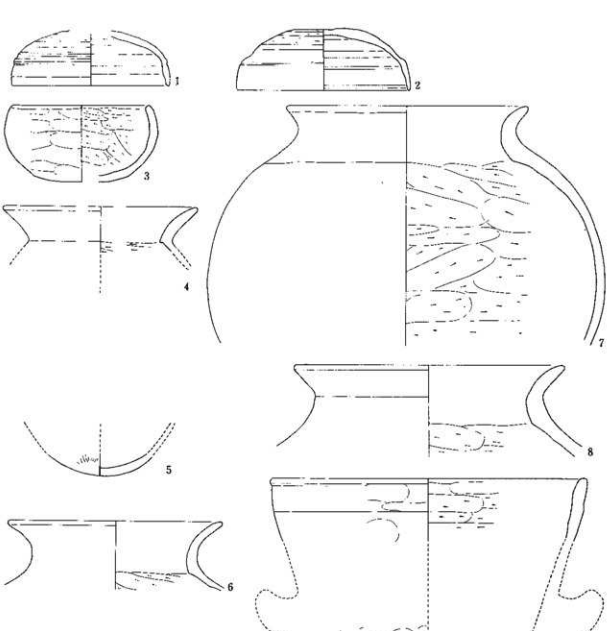
段状遺構4（第27図）

前記した段状遺構3の西側下方に位置するもので、コーナー部の壁溝の一部が検出されたのみである。

遺物は全く出土していないが、他と同様の時期と推定され、柱穴が伴う可能性も捨てきれない。また、段状遺構3との位置関係から言えば、これに先行する時期の可能性が強く、全体の状況から言えば集落の中では古い段階のものとして考えておきたい。



第27図　山ノ神遺跡　段状遺構2～4（1／60）



第28図　山ノ神遺跡　段状遺構３出土遺物（１／３）

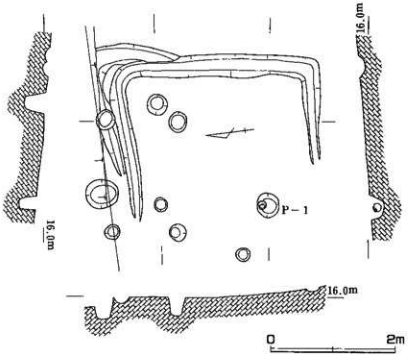
段状遺構５（第29図）

段状遺構３，４の西側下方の谷筋で検出されたもので、コの字状の壁溝によって認識できるものである。壁溝は極めて明確であるが、内部の柱穴はこれに直接関連しない可能性が強く、無柱穴の竪穴住居と考えている。壁溝は一部が重複したようになっており、１回の建て替えが行われたと推定される。規模は南北方向が2.5m前後、東西方向は流出のため不明である。床面の標高は約16.1

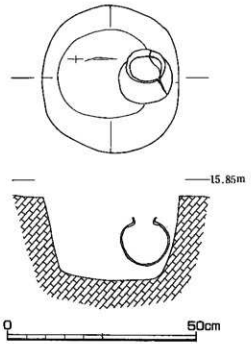
mを測り、東側の段状遺構３より2.3mほど低く、南側の段状遺構７とほぼ同様である。距離的には前者とは約20m、後者とは約２m離れており、建て替え状況などを考慮すれば当時の建物配置のイメージを読みとれるかもしれない。

出土遺物は壁溝内からわずかに出土した（１・３）ほか、直接関係ないと判断した柱穴内から２が出土している。１は復元口径14.8cm、器高5.2cmを測る須恵器の蓋で、砂粒を多く含み、焼成は不良である。３は水晶製の切小玉で、長さ1.4cm、径2.1cmを測り、片面穿孔である。２はほぼ完形の土師器小壺で、復元口径8.5cm、器高11.5cm前後測る。

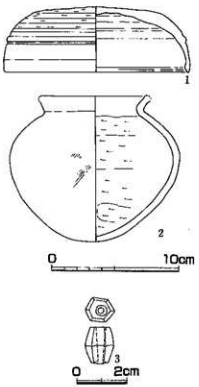
遺構は１の須恵器から６世紀中葉頃と考えられる。また玉類の出土は注目しておきたい。



第29図　山ノ神遺跡　段状遺構５（１／６０）



第30図　山ノ神遺跡　柱穴内遺物出土状況（１／３０）



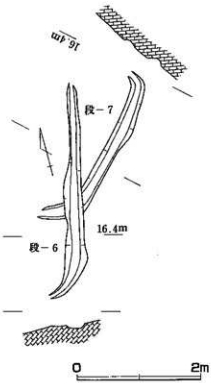
第31図　山ノ神遺跡
段状遺構５他出土遺物（１／３他）

段状遺構６（第32図）

後述する段状遺構７と重複するもので、切り合い関係からこれに後出するものであることが判明している。検出できたのは壁溝と床面の一部のみで、柱穴はいっさい認められなかった。壁溝は南側で弧状を呈しており、ほぼ直角に曲がるように見える。北側は直線的に走る部分で消失しており、規模は不明であるが、少なくとも段状遺構７よりやや大型ものとして造り替えられているようである。

遺物（第33図）はわずかであるが、いずれもほぼ床面に近い位置で出土しており、遺構の時期を示しているものと考えられる。１は推定最大径15.8cmを測る須恵器の坏底部片で、砂粒を多く含み焼成不良なものである。２は復元口径20.2cmを測る土師器の甕口縁部片である。

これらの土器から、この遺構の廃絶時期は６世紀後半と考えられる。

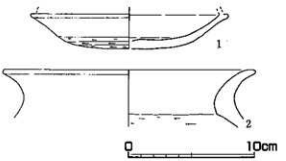


第32図　山ノ神遺跡　段状遺構６・７（1／60）

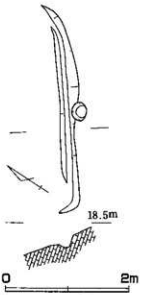
段状遺構７（第32図）

段状遺構６に先行するもので、壁溝と床面の一部のみが検出された。壁溝の形態は平面でコの字状を呈するもので、コーナー部はほぼ直角に曲がる様子が見受けられる。規模は南北2.7mを測る。

出土遺物はないが、切り合い関係から段状遺構６に先行することが明らかであり、時期は６世紀の中葉と考えたい。



第33図　山ノ神遺跡　段状遺構６出土遺物（1／3）



第34図　山ノ神遺跡
段状遺構８（1／60）

段状遺構８（第34図）

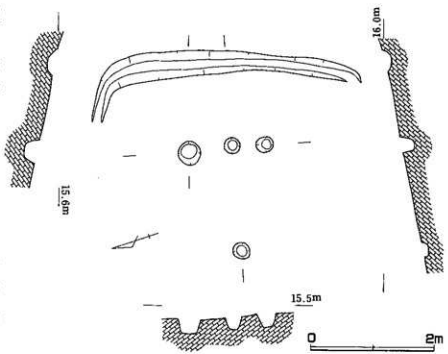
丘陵斜面部のやや急峻な位置に存在するもので、壁溝の一部が検出されたのみである。壁溝に重複する柱穴は、切り合い関係からこれに後出するもので、直接関連するものではない。壁溝は直線的に伸び、コーナー部はほぼ直角に近い形態を呈している。規模は東西3.1m以上を測るものと推定される。

遺物は全く出土していないが、他と同様の６世紀中葉あるいは後半の時期と考えて間違いないであろう。

段状遺構９（第35図）

谷部でも谷底に近い位置に存在するもので、壁溝の一部が検出されている。一見すると柱穴を伴いそうであるが、他の状況からこれに関連しない可能性が強いものと考えている。壁溝は東辺が完存し、コーナー部もほぼ直角に曲がる様子が確認できる。規模は南北4.1m以上を測るものと推定される。

出土遺物（第36図）で図化できたものは須恵器の蓋小片のみで、外面の稜線と口縁端部内面の特徴から、６世紀第３四半期のものと考えたい。

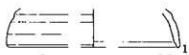


第35図　山ノ神遺跡　段状遺構９（１／６０）

段状遺構10

（第37図）

調査区北側の谷底に存在するもので、床面の一部と壁溝状の溝が検出されているが、遺構の大半は調査区外にあり、全容は明らかでない。また、１回の造り替えが認められ、一見すると重複した溝状遺構に見えるが、調査区北壁の土層観察から、明らかに床面を伴う段状遺構であることが判明している。壁溝はかなり幅広のもので、断面はゆるやかな弧状を呈し、壁溝と言うよりは排水溝としての機能を考えた方がよいかもしれない。



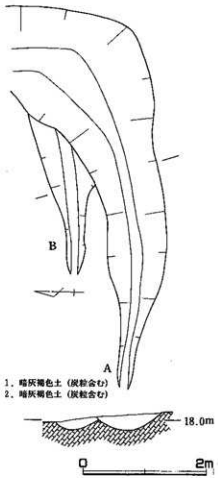
第36図　山ノ神遺跡
段状遺構９出土遺物（１／３）

切り合い関係から南側に位置する段状遺構10－Ａが後出することが明らかであり、ほとんどの遺物はこの溝内からの出土である。この溝に伴う床面直上からは、甕片が出土しているが、これに確実に伴うものか明確にできなかった。

先行する段状遺構10－Ｂは、わずかに壁溝の端部を検出したのみであるが、基盤層ブロック土を含んでいたことから、明らかに人為的に埋め戻されたものと考えられる。溝内から遺物は全く出土していないが、周囲の状況から段状遺構11－Ａと同様のものと判断している。

出土遺物（第38図）はすべて弥生時代中期後半の土器で、ほとんどが小片と化したものである。１は床面と推定している地点の出土であるが、形式的には古相を呈しており、検討を要するものである。口縁端部は上方にやや拡張し、端部に２段の凹線を巡らす。体部内面の下半部は縦方向のケズリ、上半は縦方向のハケメが認められる。２は床面と溝内から出土した体部片で外面はミガキが認められる。３～12は10－Ａの溝内出土で、いずれも小片である。３は広口壺の口縁部で、端部に３

段の凹線を巡らす。4は復元口径19cmを測る大型の甕で、頸部に連続刺突文帯を持ち、口縁部は上下に拡張する。調整は風化のため不明である。5～7は近似した甕で、復元口径はそれぞれ15.5cm、15.4cm、15.8cmを測る。これらは口縁端部が上方に拡張し、いわゆる折り返し口縁を持つものである。凹線は3段巡り、口縁部は強い横ナデ調整が施されている。体部調整は、外面が縦方向のハケメ、内面が縦方向のハケメ後横方向のハケメを施すものがある。8は口径不明であるが、明らかに小型の甕で、口縁部の拡張も前記したものとやや異なる作りである。9は高坏の坏部片で、復元口径約16cmを測る。口縁端部は内側に拡張し、上面に2段の凹線を巡らしている。口縁部の屈曲は緩やかで、内傾するに至っておらず、外面にヘラ描き沈線を3段巡らしている。表面は風化しているが、斜め方向（おそらく多角形状）のミガキ痕跡を残し、内面は風化しているが、ミガキと推定される。10・11は甕底部片で、いずれも体部外面は縦方向のミガキ、内面はケズリである。底部は10がナデ、11はナデ、あるいはミガキと推定される。12は外径3cmを測る紡錘車と推定されるもので、甕の破片を加工したものである。孔径は3mmを測り外面から内面に向けて穿孔されているように観察される。調整は外面が細かいハケメ、内面が粗いハケメで、甕体部の上半部分の破片と考えられる。

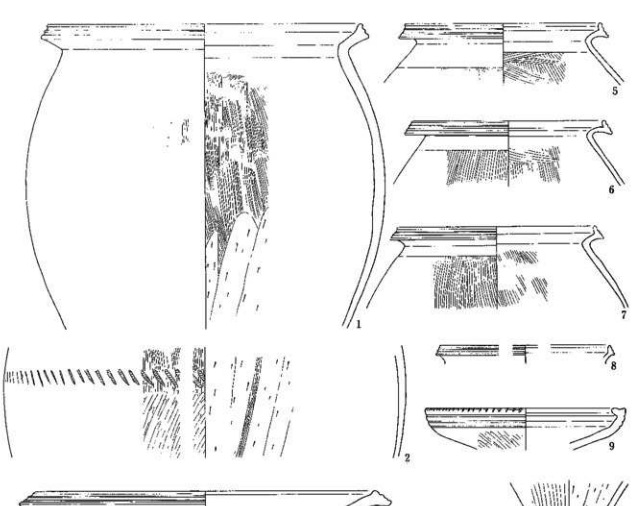


第37図　山ノ神遺跡
段状遺構10（1／60）

これらの遺物のうち2～12は、ほぼ同時期の一括性の強いものと考えており、小片ではあるが好資料と言える。広口壺については他の遺構出土品と区別のつきにくいものであるが、甕については口縁部の造りに特徴が見られ、遺跡内では最も新相を呈するものと判断している。この点は高坏についても同様で、全体として弥生時代中期後葉でも最終段階のものとしてよいと考えている。この点は続く後期初頭の土器との比較が重要となろうが、それについては別の機会に譲りたい。また、遺跡内の当該期土器の編年を考えるうえで重要な一群となるであろう。

この遺構出土の土器群について、もう一つ重要な点はその胎土・焼成（色調）である。胎土についてはほとんどのものが1mm以下の均一な砂粒を多く含み、色調は黄白色を呈するもの（3～7,11など）が目立つ点である。この特徴は他の遺構出土品にも見られるが、この時期の特に薄手の甕に共通する点と考えており、さらに検討すべき事柄である。ただし、丘陵部出土で風化が著しいものは本来の色調を失っていると考えられることから、本遺跡例だけでは判断できない問題でもある。

以上の点から、段状遺構10は弥生時代中期後葉に築造され、1回の建て替えの後廃絶したものと判断できる。その廃絶時期は中期後葉でも最も新しい時期と推定され、その直後、すなわち弥生時代後期初頭の土器が全く見られないことから、この建物の廃絶は集落の廃絶を意味していると考えたい。



第38図　山ノ神遺跡　段状遺構10出土遺物（1／3）

（3）土　坑

遺跡内で検出された遺構には、これまで記してきた建物・段状遺構の他に、これとは明らかに性格の異なるものが存在しているが、以下では便宜的に全て土坑として扱うことにした。ただし、機能的には大きく3～4種類に分類でき、いくつかは性格の判明しているものも存在する。この点については個別に検討しながら、以下に説明することとしたい。

土坑1（第39図）

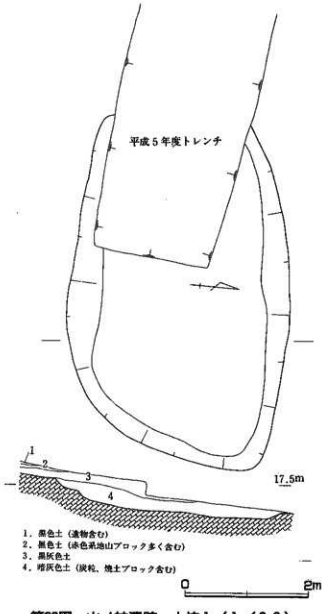
調査区北側の谷底で検出された土坑で、前年度にトレンチ調査を行った時点では、弥生時代の包含層として認識されていたものである。トレンチにより西側は削平されているが、形態はやや長方形気味の長楕円を呈し、規模は長軸が推定5.6m、短軸3.4mを測り、断面は底部がやや平坦で、壁面へはやや緩やかな弧状を呈しながら立ち上がり、全体として浅い皿状を呈するものである。土層

観察から、南側に位置する建物７に伴う造成土によって埋没している状況が明らかになっており、これに先行する時期のものであることは間違いない。また、この土層関係から、土坑の深さは元々30cm程度の浅いものである可能性が強いと考えている。

遺物の出土状況は堆積土に包含された状態であったが、一部は床面に貼り付いた状態であった。また、トレンチ調査時には全面調査時に比して多量の遺物が出土しており、直接この土坑に伴わない可能性もあるが、トレンチと土坑の位置関係から、西側に遺物が集中していた可能性が強いものと感じている。また、遺物の中に磨石や叩石が含まれる可能性がある点は、この土坑の性格を反映しているかもしれない。

遺物（第40～42図）は小片化したものが多いが、多数存在する。また、トレンチ調査時に出土し、混入品を含む可能性の強いものを第40・42図に、全面調査時に遺構として認識した後に取り上げたものを第41図にあげた。

まずトレンチ調査時出土品であるが、１～３は上層の、他は下層の出土品である。これらは基本的に弥生時代中期後葉の中で理解できるものばかりであるが、上層出土の３の底部片は、外面のハケメ調整や形態から、弥生時代でも後期の中葉頃のものと考えられる。



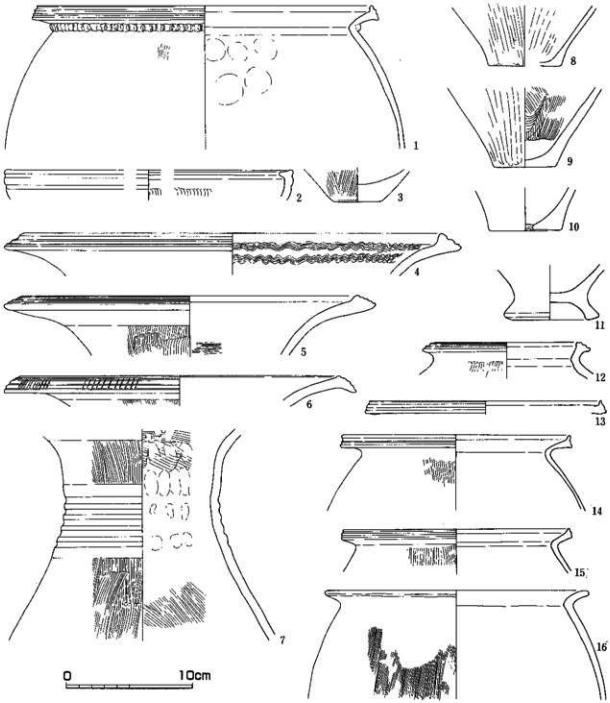
第39図　山ノ神遺跡　土坑１（１／６０）

４～７は壺の破片で、口縁部の開き具合や端部の処理はそれぞれ微妙に異なるが、いずれも端面に３～４段の凹線を巡らしている。また、４は内面に２段のクシ描き波状文を、６は端面に縦方向のヘラ描き沈線を施す点が特徴である。８～10は底部片で、内面にシボリ状の痕跡を持つものや、ハケメ調整を持つものが存在し、注意される。12～16は甕で、口縁部の大きさや、形態がそれぞれ異なっており、大半が端部をわずかに拡張し、端面に凹線文を巡らしているが、16のように単純なものも存在する。

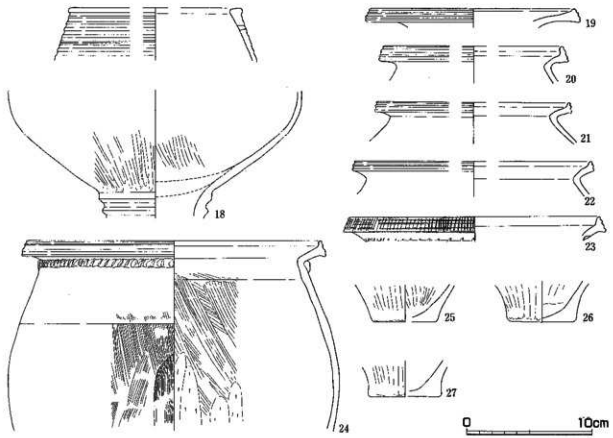
28～30もトレンチ調査時出土の石器である。28は抉り入りのスクレイパーで、片側を欠損している。いわゆる打製石包丁の一種と考えられるもので、刃部はかなり摩耗しており、その様子はこの種のものに見られる特徴的なものと考えている。石材は安山岩と推定され、当地域でこの器種に多用されるものである。

17～27は全面調査時に出土したもので、この遺構に確実に伴うものと判断しているが、細片が多く、一括廃棄されたものか、長期にわたり堆積したものか判断しかねている。17・18は同一個体で、ワイングラス状の形態を持つ脚付き無頸壺と考えられる。口縁部外面には凹線文を巡らし、側面に小孔が認められる。脚部上端には少なくとも2段の突帯を持ち、おそらく脚部は透かし等で飾られるタイプと推定される。19～24は甕で、口縁端部はいずれも拡張するが、その仕方や度合いにばらつきが見られ、同一時期の多様性か、複数の時期の混在か判断できないものである。なお、24の甕頸部の連続刺突文帯は比較的丁寧なもので、23も欠損するが同様の痕跡が認められる。

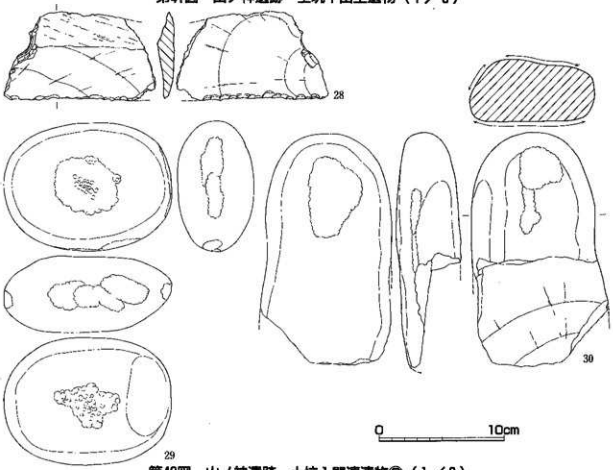
土坑の時期はこれらの遺物から中期後葉でも比較的古い段階の様相を呈していると考えられる。



第40図　山ノ神遺跡　土坑1関連遺物①（1／3）



第41図　山ノ神遺跡　土坑1出土遺物（1／3）



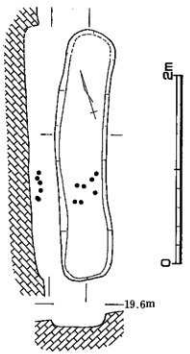
第42図　山ノ神遺跡　土坑1関連遺物㊁（1／3）

土坑２（第43図）

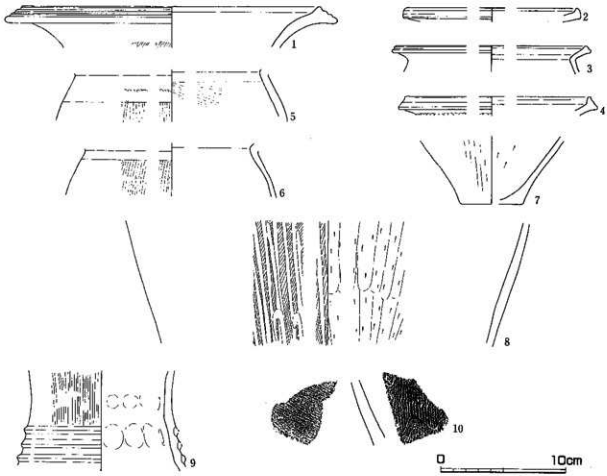
建物３を調査中にその床面で検出した土坑で、平面は細長い長方形を呈し、規模は南北2.0m、東西0.42mを測る。形態からは土壙墓、あるいは木棺墓が想起されるが、基底部のみしか残存していない点や、堆積土の様子からは判断できなかった。また、土器群が土坑中央やや南寄りで集中して出土している点は、土壙墓への供献状態にも見えるが、ほぼ床面に近い位置で出土していること、煮炊き具である甕を多数含んでいることなど、否定的要素を重視しておきたい。

出土遺物（第44図）は、いずれも遺跡内では最も古相を呈する点が注意される。

出土土器から土坑の時期は弥生時代中期後葉でも古い段階であろう。



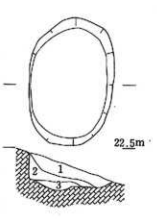
第43図　山ノ神遺跡　土坑２（１／３０）



第44図　山ノ神遺跡　土坑２出土遺物（１／３）

土坑３（第45図）

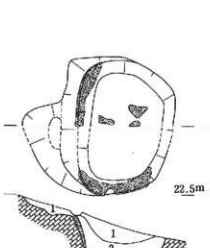
丘陵部尾根筋の斜面で検出した土坑で、平面は長楕円形を呈し、規模は長軸102cm、短軸65cmを測る。壁面の立ち上がりはやや急であるが、上部は削平されており不明確な点が多い。



第45図　山ノ神遺跡
土坑３（１／３０）

土坑４（第46図）

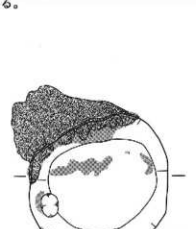
土坑４の近くで検出された土坑で、平面は隅丸方形に近い長楕円形を呈し、規模は長軸111cm、短軸88cmを測る。壁面上部には粘土貼り、被熱部が認められ、堆積土中には炭化物と供に粘土壁の破片が含まれており、本来上部に貼り付けられていたものが崩落したものと推定される。遺物は全く出土していないが、古墳時代集落に伴うものと推定している。



第46図　山ノ神遺跡
土坑４（１／３０）

土坑５（第47図）

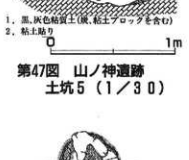
谷部緩斜面に位置する土坑で、平面はほぼ円形を呈し、規模は径110cm前後を測る。上部には粘土貼りが残存し、その一部は土坑外へ平面的に広がっている状態で検出されている。堆積土中には多量の炭化物、粘土壁片が含まれる。赤色熱変部は全面に及んでおらず、この種の被熱土坑の特徴といえる。遺物は全く出土していないが、やはり古墳時代集落に伴うものと考えられる。



第47図　山ノ神遺跡
土坑５（１／３０）

土坑６（第48図）

谷部の緩斜面で検出された小型の土坑で、後世の撹乱を受けているが、ほぼ円形プランを呈し、径50cm前後を測るものと推定できる。粘土貼りも認められ、他と同様な機能を有するものとしてよいであろう。古墳時代集落と同時期と推定される。

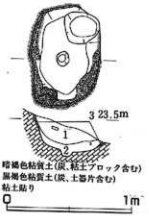


第48図　山ノ神遺跡
土坑６（１／３０）

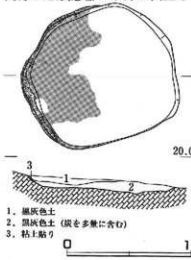
土坑７（第49図）

土坑７に近い位置で検出されたもので、平面隅丸方形、壁面上部の粘土貼りは良好に残る。堆積土中には炭化物、粘土壁片が含まれる。床面中央には小ピットが存在し、この種の被熱土坑の上部構造を検討するうえで参考となろう。

内部から須恵器の小片が出土しており、やはり古墳時代集落と同時期と考えられる。



第49図　山ノ神遺跡
土坑７（1／30）



第50図　山ノ神遺跡　土坑８
（1／30）

土坑８（第50図）

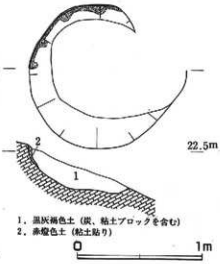
谷底で検出された唯一の被熱土坑で、建物４が完全に埋没後に掘り込まれたことが判明している。

平面は隅丸方形に近い楕円形を呈し、規模は120×108cmを測る。壁面上部にわずかに粘土貼りが残り、他と同様なものといえる。

土坑９（第51図）

丘陵斜面に位置するもので、後世の撹乱を受けているため、一部不明確な点がある。平面はほぼ円形を呈し、規模は径115cmを測る。他の被熱土坑と同様壁面上部に粘土貼りを残しており、内部には炭化物、粘土壁片を多く含んでいた。

この土坑も他と同様な時期の所産で、機能的にも同じものと考えられる。

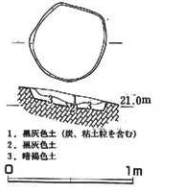


第51図　山ノ神遺跡
土坑９（1／30）

土坑10（第52図）

丘陵斜面で検出された小型の土坑で、平面はほぼ円形を呈し、規模は径55cm前後を測る。壁面の粘土貼りは遺存していないが、堆積土中に炭化物、粘土壁片が含まれており、他の被熱土坑と同様のものと判断している。

時期は他と同様で、古墳時代集落に伴うものと考えている。また、これらの被熱土坑は製炭窯と判断しており、遺跡内では標高22m付近に集中する点が注意された。

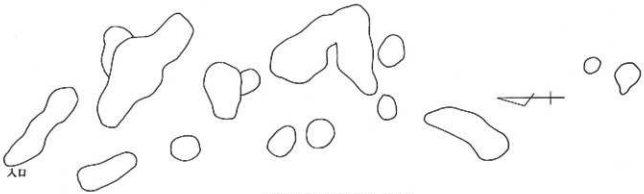


第52図　山ノ神遺跡
土坑10（1／30）

（4）坑道状遺構

調査区東側の丘陵頂部付近で検出された遺構（群）で、前年度のトレンチ調査でいわゆる地下式横穴と認識していたものである。調査開始時にはこの種のものとして想定していたが、入り口と考えられる土坑用の落ち込みが多数検出された時点で、その異様さに驚き、その一部から縄文土器片が出土した時点で、未知の遺構ではないかと考えるに至った。しかし、その後掘り進むにつれて、ほとんどの土坑がフラスコ状になっていたり、斜めに深く掘り込まれていることから、調査を一旦中止し、方法を検討することとした。その後埋蔵文化財センターの図書室で、類例調査を行ったところ、隣接する鳥取県米子市で、これと同様な「坑道状遺構」を知り、人為的なものかどうか検討する必要があることが分かった。つまり動物によって掘り込まれたトンネルの可能性があるらしいのである。こうして、この遺構？が坑道状遺構とその陥没痕であることは判明したのであるが、調査に危険性を伴うため、思い切って重機により掘削、地下１～１．５ｍでの再検出を試みた。その結果、坑道状遺構はほとんど全てが蟻の巣状に連結しており、大半が陥没、あるいは崩壊していることが判明した。

こうした経緯から、記録は写真撮影を主とし、測量は一部にとどめた。また、調査後に分かったことであるが、この種の坑道状遺構が安来道路予定地の調査で他に４カ所、松江道路予定地の調査で１カ所確認されており、いずれも丘陵高所付近に存在することが注意された。

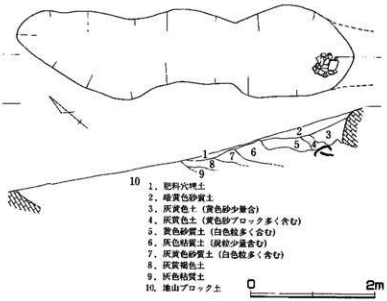


坑道状遺跡陥没痕跡（１／200）

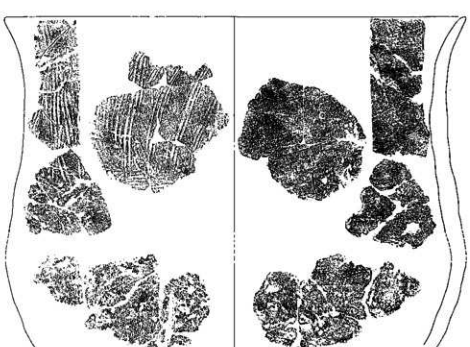
入口部トレンチ調査状況　　地表下1.5m坑道検出状況

第53図　山ノ神遺跡　坑道状遺構

出土遺物は入り口？付近の堆積土上層から縄文土器（第55図）が、陥没後の堆積土中から土師器が出土している。縄文土器は口縁部から底部付近までの破片であるが、復元が困難なもので、図示したものは推定復元である。口縁部は外反し、外面には縦方向の条痕が、調整よりはむしろ文様として施されているようである。体部下半は雑なナデ調整のみで、内面は条痕後ナデ調整が施されている。器壁は1.2cm以上と厚手で、胎土には白色の小礫多数のほか、一部繊維状のものが含まれているように観察される。このように、器形や土器の成形は一見すると押型文土器の特徴を持つように見受けられる。ここでは早期にまで遡るものと考えてたいが、押形文土器に伴うものか前後する時期のものか不明である。



第54図　山ノ神遺跡　坑道状遺構入口（1／60）

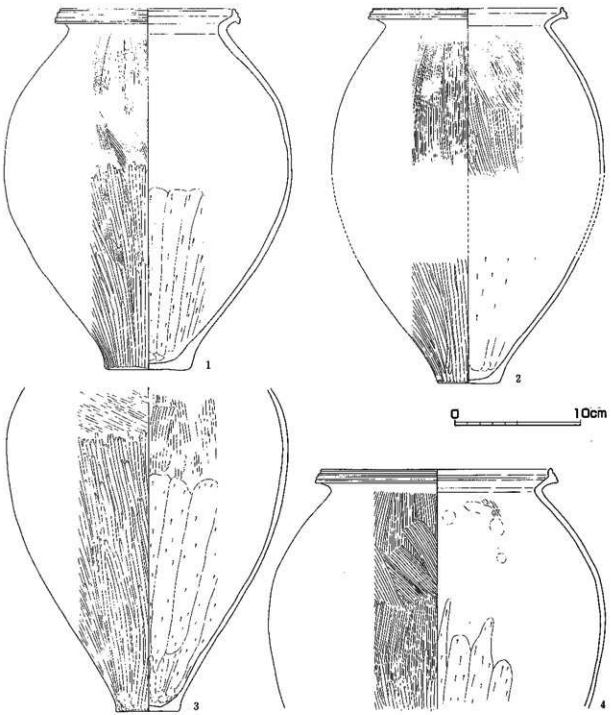


第55図　山ノ神遺跡　坑道状遺構出遺物（1／3）

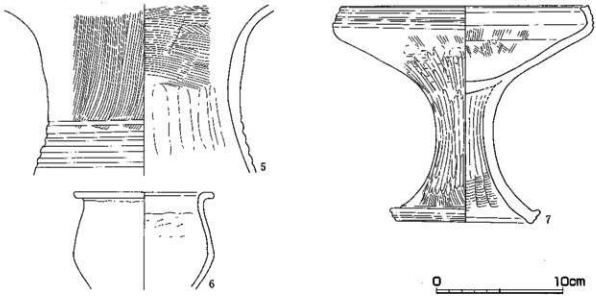
（5）土器溜まり（第7図）

調査初期の段階で、谷底の厚い堆積土を重機により除去中に発見したもので、土層観察から古墳時代以前の包含層と判断していた。その後この土器溜まりの下層から柱穴等が検出されたが、明確な住居とは認識できず、ここでは土器溜まりとして扱うことにしたものである。このような理由から、本来は何らかの遺構内の一括遺物の可能性が高く、型式的にも矛盾しないものと考えている。

出土した遺物は全て弥生土器（第56・57図）である。1はほぼ完形に復元できた甕で、口径13.8cm、胴部最大径22.7cm、器高28.5cmを測る。全体の器形としては、胴部最大径の位置がかなり下方



第56図　山ノ神遺跡　土器溜まり①（1／3）



第57図　山ノ神遺跡　土器溜まり②（1／3）

にあり、口縁部径は胴部径に比して小さいものといえる。口縁部は上下に肥厚し、外面に凹線文を巡らす。体部外面は上半を縦方向のハケメ、下半を縦方向のミガキ調整で、基本的に他の甕と共通している。内面は下半を縦方向のケズリ、上半をナデ調整しており、この点も他の甕と共通している。2は図上では完形近くに復元できるもので、1とほぼ同様の特徴を持つが、口縁部は1よりやや拡張度が低く、頸部内面の屈曲も稜線をなす点、内面上半に顕著なハケメ調整を施す点が異なる。3は口頸部を欠くが、他の特徴は他と同様で、内面上半はハケメ調整が見られる。4は胴下半部を欠き、1～3よりやや大型品である。口縁部は上方にのみ拡張し、体部外面はハケメ、ミガキが、内面は下半のケズリが見られる。5は壺の頸部片で、やや大型品といえる。頸部はほぼ筒状を呈するが、中程に最小径を持ち、口縁部へ向かって大きく開く様子が見受けられる。下半には凹線文を巡らせる点が特徴で、調整は外面が縦方向のハケメ、内面が上半は横方向のハケメ、下半は縦方向に長い指頭圧痕、あるいはシボリ痕が見られる。6は小型の壺で、胴部は中程で最大径を持ち、やや算盤玉状を呈している。口縁部は復元径11.2cmを測り、端部は丸く収めている。外面はナデ、内面は頸部以下に横方向のケズリ調整が見られ、この時期のものとしては珍しいものといえる。7はほぼ完形に復元できた高坏で、口径19.4cm、最大径20.4cm、筒部最小径4.4cm、脚底部径10.7cm、器高17.0cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲後内傾し、外面に凹線文を巡らし、端部は凹線により面取りされている。坏部は外面が横方向のケズリ後にハケメ、ミガキ調整され、一部にはケズリ以前と推定される指頭圧痕も認められる。内面はハケメ調整後ナデと推定される。脚部は緩やかに裾広がりとなり、外面はハケメ後のミガキ調整、内面はシボリ痕とハケメ調整が認められる。脚端部はやや肥厚し、外面に凹線文を巡らせている。

これらの土器は弥生時代中期後半と考えられるもので、遺跡内ではこれより古相を呈するもの、新相を呈するもの両方があり、仮に3期区分すれば第2期に位置付けることも可能である。しかし、この一群は混入品を含む可能性も捨てきれないため、ここでは暫定的なものとしておきたい。

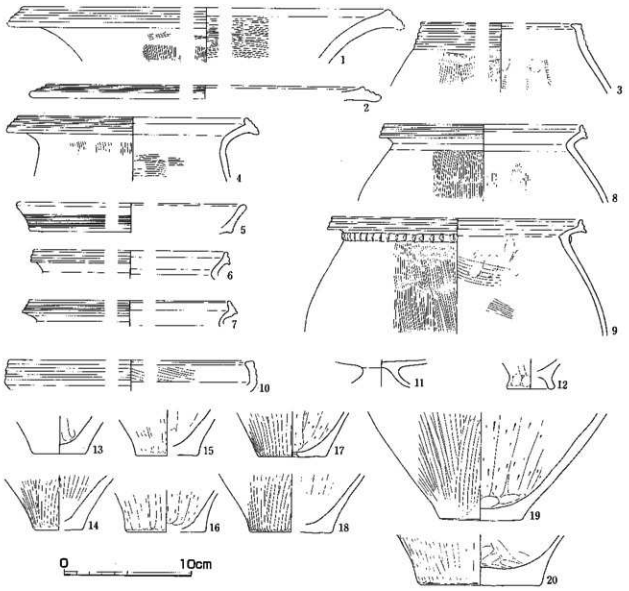
（6）遺物包含層

今回の調査では谷部堆積土を中心に多くの遺物が出土している。以下では便宜的に標高19m以上と以下に分けて紹介したい。これは遺物の本来の位置をある程度反映させることが目的であり、非常に大雑把ではあるが、何らかの傾向を読みとることはできよう。なお、石器、瓦については一括して扱うことにした。

標高１９ｍ以上包含層出土遺物（第58～60図）

これらは谷底の高い側で出土したもので、弥生土器が比較的多いのが特徴といえる。また須恵器は全体に新しい様相を持つものが多い傾向があり、７世紀代に下る資料も少量認められる。

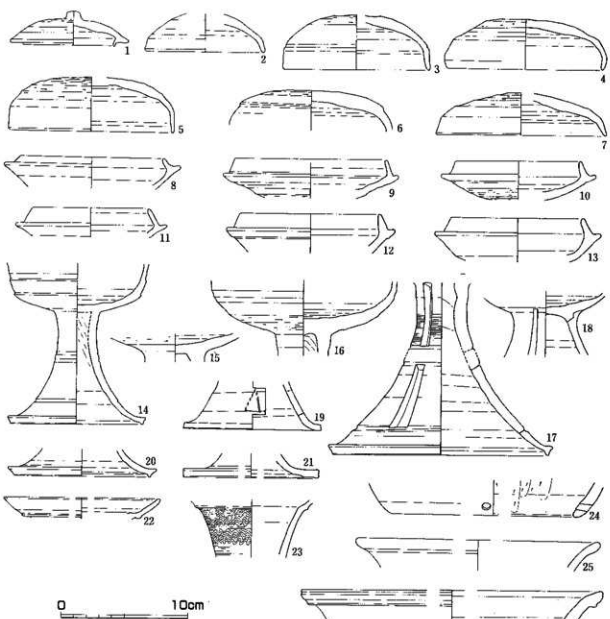
弥生土器（第58図）はほとんどが小片であるが、ほぼ各器種が出そろっている。時期的にはわずかに後期のものを含むが、ほとんどが中期後半のものである。１～４は壺で、大型で口縁部が大きく開くタイプ（１・２）、中型で筒状の頸部から屈曲気味に口縁部が開くタイプ（４）、そしてワイ



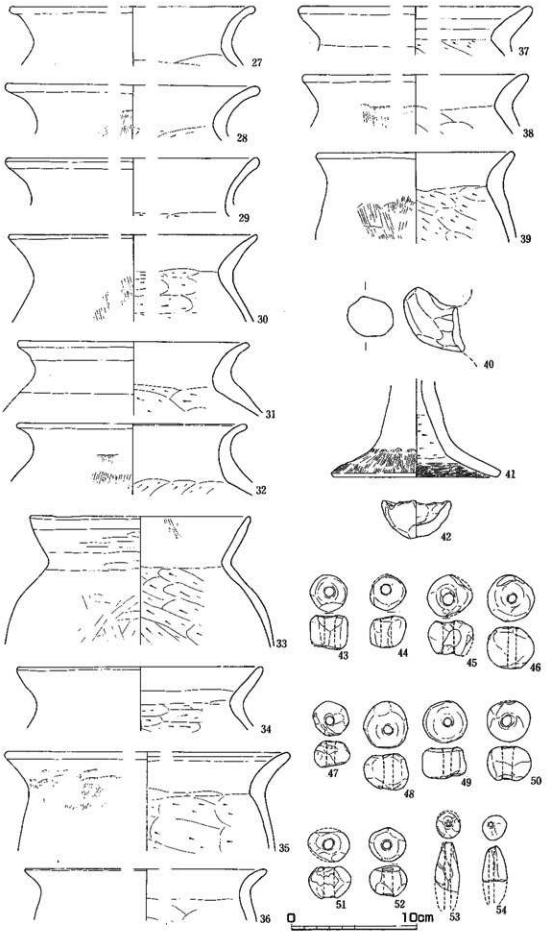
第58図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物①（１／３）

ングラス状の形態を持つ無頸タイプ（3）などがある。5～9は甕で、いずれも口縁部に何らかの拡張が見られるものである。このうち5は外反する口縁部外面に多条沈線文を持つもので、後期に属するものである。9は頸部外面に連続刺突浮文を巡らせる大型タイプである。高坏は中期後半の10と、古墳時代前期にまで下る可能性のある11などがある。12～20は底部片であり、大型品以外は大半が甕と推定される。内面は縦方向のケズリを残すものがほとんどで、弥生時代中期後半の特徴を持つといえる。

第59図は須恵器である。ほとんどが2～3㎜大の砂粒を多く含む胎土を持ち、6世紀代の須恵器の重要なと特徴となっている。1～7は蓋で、1・2は7世紀代に下る小型品である。他は天井部に明確な回転ヘラケズリを施し、外面の稜は痕跡と化したものが多い。8～13は坏で、口縁部の立ち上がりは比較的高いが、極端に伸びるものはなく、蓋と同様6世紀後半でも新相を呈するものである。14～21は高坏で、短脚を有するものと長脚を持つものとがある。このうち長脚2段透かしを持つ



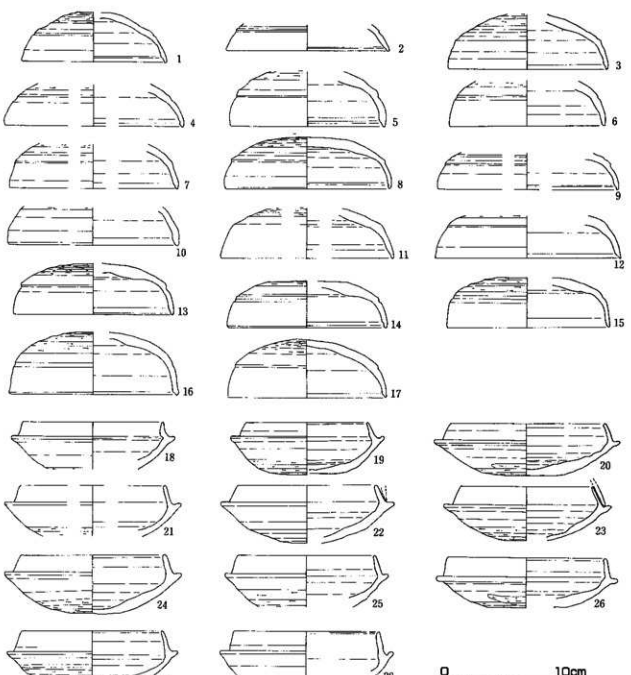
第59図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物②（1／3）



第60図　山ノ神遺跡　標高19m以上包含層出土遺物③（1／3）

17はこの地域では6世紀末から7世紀頃まで残存することが判明しており、出雲東部の中では例外的な現象といえる。22・23は脇の口縁部と推定されるもので、口縁部は短く開き、頸部の長いタイプと推定される。24は甑の底部小片で、側面に小孔が貫通するタイプである。25・26は甕の口縁部片で、口頸は小片のため不明確である。

第60図は土師器と土師器焼成の土製品であり、大半は風化のため調整等不明確な点がある。27～39は甕で、極端な大型品が見られない点が特徴といえよう。また、頸部は明瞭な屈曲部を残すものと、緩やかに外湾するタイプとの両方が認められる。このことは5世紀的な土師器甕の特徴が終焉する現象を示してるともいえ、遺量の土師器があれば、ある程度時期を推定できることを示唆している。41は高坏脚部で、6世紀後半の数少ない資料といえる。42はミニチュアの坏で、いわゆる祭



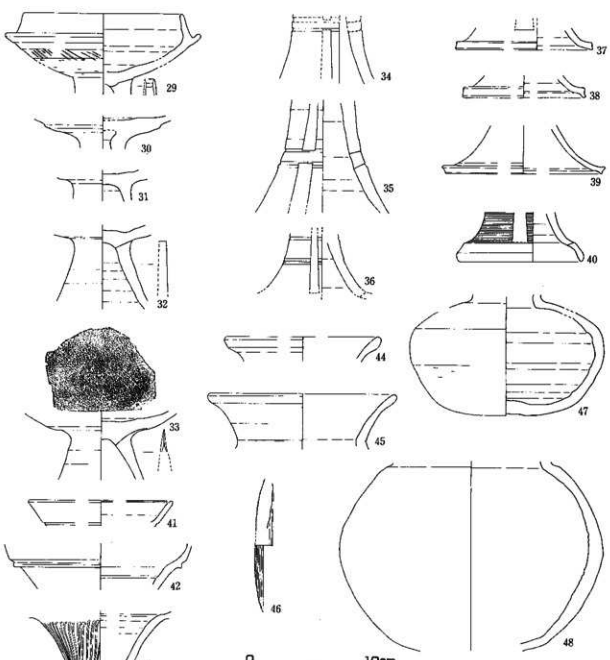
第61図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物①（1／3）

祀的な行為に伴うものとも考えられる。43～54は土錘で、球形あるいは短い筒型となるものと、細長いタイプ（53・54）とがある。

標高19m以下の包含層出土遺物（第61～64図）

標高19m以下は大半が谷底の低位部であり、遺跡内では丘陵裾部にあたる。この谷底堆積土中には多くの遺物が包含されていたが、このうち明らかに上方から流れ込んだものも多く、前述した19m以上出土遺物と接合したものも少なからずある。

第61～63図は須恵器である。1～17は蓋で、いずれも外面に段あるいは稜を残し、天井部は回転ケズリが施されている。また、ほとんど全てが口縁端部の内面に段や沈線を巡らしており、全体と



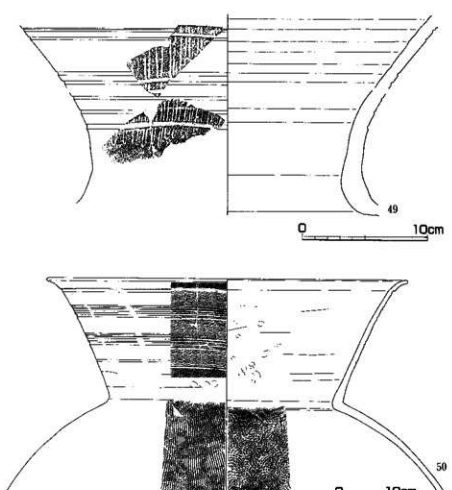
第62図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物②（1／3）

して19m以上のものより古相を呈するものが多い。特に13～16のような回転ケズリが2分の1以上の範囲に施されるものは、遺跡内でもっと古い時期のものと推定される。

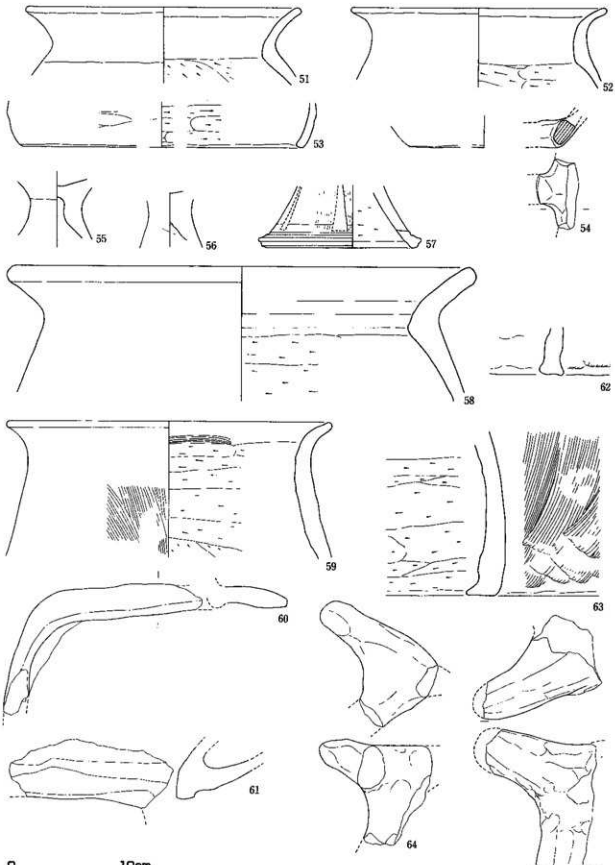
18～28は坏で、蓋と同様、古相を呈するものが多い。特に28については前代の特徴を残しており、遺跡の開始期を考えるうえで参考となろう。これら蓋坏のうち2㎜以下の砂粒を非常に多く含むのは5，6，7，10，12，17，18，19，22，23，24，25，27であり、厚手の造りのものが多いが、単純には型式と関連しないようである。

29～40は高坏であるが、全形の分かるものはなく、長脚、短脚、無蓋、有蓋いずれも存在するようである。29は有蓋高坏で、坏部外面にタタキ痕を残す。33は短脚のもので、脚部に2方向の三角透かしを施し、坏部内面には布目痕（11本／cm）と、これによるナデ調整が認められる。これは他と比して明らかに新しい時期（7世紀前半）のものである。35・36は長脚二段の高坏脚部で、方形透かしが3方向に施されている。37は透かし方向不明である。40は短脚の高坏脚部で、カキメが施され、方形透かしを3～4方向持つものと考えられる。これは前代の高坏の特徴を残すものであり、注意しておきたい。なお、これら高坏のうち30，31，39は砂粒を多く含むものである。

41～43は鉢で、口縁部が大きく開くタイプと推定される。41は口縁端部内面に沈線を巡らし、43は頸部にヘラ描きの退化波状文を施している。42は砂粒を多く含む胎土である。



第63図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物③（1／3、1／6）

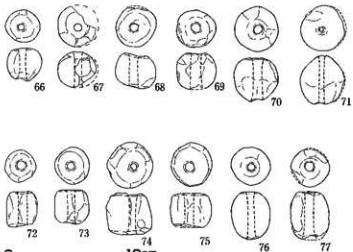


第64図　山ノ神遺跡　標高19m以下包含層出土遺物④（1／3）

44～46は提瓶と考えられる小片である。口縁部は玉縁状を呈しており、体部片46は外面にカキメが施されている。これらはいずれも砂粒を多く含む胎土を持つ。

47は長径壺、48は広口壺と推定され、いずれも砂粒を多く含む。

49・50は大型の甕である。遺跡内からはこの他にも甕片が出土しているが、量的にまとまったものはこの2点のみである。特に50は図化していないが、底部付近の破片も存在しており、標高19m以上の地点からも少なからず出土している。49は砂粒を多く含む胎土を持ち、口縁部外面に上下の振幅が大きなヘラ描き波状文を施した後、7段以上の沈線を巡らす特徴的なものである。



第65図　山ノ神遺跡　包含層出土遺物①（1／3）

第64・65図は土師器（一部弥生土器）と土製品である。

51，52は甕で、いずれも古相を呈するものである。53は甑底部と推定されるが、上下が逆転し鉢となる可能性もあろう。54は甑底部片で、ふんどし状を呈す古いタイプである。

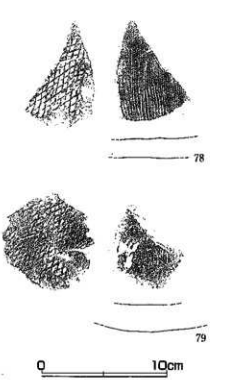
55・56は高坏で、56は外面に丹塗り痕跡が残る。55については須恵器焼成の可能性もある。

57の脚端部は弥生土器で、透かしは三角形と推定され、方向は不明である。

58～63は移動式カマドの破片である。58はかなり大型品で、復元口径37.5cmを測る。59は復元口径25.8cmを測る。60・61は焚き口上部の庇部分で、60は水平に、61は上昇するタイプと考えている。62・63は底部片で、いずれも外面は縦方向のハケメ調整、内面は横方向のケズリ調整である。

64・65は土製支脚片である。いずれもナデ調整と考えられるが、風化しているため判然としない。

66～77は土錘で、球形に近いタイプ（66～71）、球形に近いがやや円筒状を呈すタイプ（72～75）、やや長めで、ラグビーボール状を呈すタイプ（76・77）が存在する。



第66図　山ノ神遺跡
包含層出土遺物②（1／3）

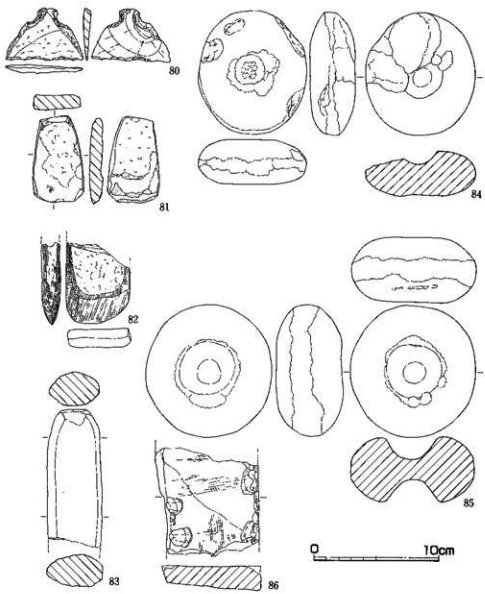
その他の遺物（第66・67図）

78・79は平瓦片である。いずれも小片で、耕作によると思われる欠損部が多数認められる。上面は布目痕、下面は細かな斜格子タタキ痕が認められ、78は暗灰色で焼成良好、79は灰色で、やや焼成不良なものである。時期的にはタタキの特徴から7世紀代の可能性があるものと考えている。

また、同様な瓦片は本遺跡東側の平Ⅰ遺跡、平Ⅱ遺跡でも少数であるが出土しており、西側の徳見追跡では見つかっていないことから、本遺跡以東にこの種の瓦を使用した建物、あるいは窯跡が存在する可能性が強い。

80～86は包含層出土の石器である。80は安山岩製のスクレイパーで、いわゆる石匙タイプである。81は扁平片刃石斧と考えられるが、著しく風化しており、両刃の可能性もある。石材は黄白色を呈し凝灰岩と推定される。82は黒色頁岩と推定される石材で作られた両刃の石斧で、刃部の形態や削痕から縦斧と考えられる。83は柱状蛤刃石斧の基部と推定されるもので、端部は敲打された痕跡が残る。石材は縦方向に摂理が多数見られる変成岩の一種と推定される。84は叩き石で、中央部は浅めの窪みが認められる。85も叩き石であるが、中央部の窪みは深く、滑らかに加工されており、特徴的である。86は砥石で、全面が使用されており、著しい敲打痕も認められる。

これらの石器のうち80は縄文時代、86は古墳時代後期、他は弥生時代中期後葉のものと考えられる。



第67図　山ノ神遺跡　包含層出土遺物③（1／3）

第3節　小　結

山ノ神遺跡では弥生時代中期後葉、古墳時代後期（6世紀後半）の遺構が主に検出されている。以下では要点を整理し、今後検討すべき問題点を記しておきたい。

（1）弥生時代中期後葉の集落について

①集落に立地と土器編年について

当地域では、中期中葉の集落が平野中央部に立地するのに対し、後葉の遺跡は出雲平野を除き、大半が丘陵縁辺部に立地する。このことは中期後葉土器の編年上も重要な問題点であって、両者に時期的な差が存在する可能性が強い。

②建物構造について

今回の調査では明確な竪穴住居は検出できなかった。この点は出雲東部の当該期集落で、今のところ共通する現象である。今後検出される可能性は強いが、本例のような竪穴住居を持たない集落も想定すべきかもしれない。

③石器について

出土した石器の性格・量から、当該期には鉄器が一定量使用されている可能性が強いが、その場合石器を含めての器種ごとの組成が問題となる。

（2）古墳時代後期集落について

①土器について

集落の出現期を示す土器群のうち、前代から引き継ぐものと、この期から新たに加わる器種等の問題。さらに当地域では異質な様相（強いて言えば濃内色の強い）を持つ須恵器の系譜と、近隣に位置する高畑古窯址群との問題。

②建物構造について

本遺跡では少なくとも集落の開始期には小型の無柱穴竪穴住居が多数存在していたものと推定される。これについては前代の集落との関係や、集団の系譜とも関連する問題である。

③集落構造について

各建物の分類と、その変化について、同時期の横穴墓との関係を考慮しながら検討する必要がある。この点は後述する五反田遺跡の集落とも関連する問題である。

（3）坑道状遺構について

本遺跡例は初例ではないが、本格的な発掘はこれまでほとんど試みられておらず、今後とも課題であろう。またその築造時期については陥没後に伴う遺物によっては判断できないため、今回出土した縄文早期の土器も時期決定の根拠とはならないであろう。しかし、大半の天井が落盤している点や、堆積土の一部は経験的に古い状況を呈しているものと判断しており、この土器が全く関連しないとするのにもやや躊躇している。

第５章　五反田遺跡

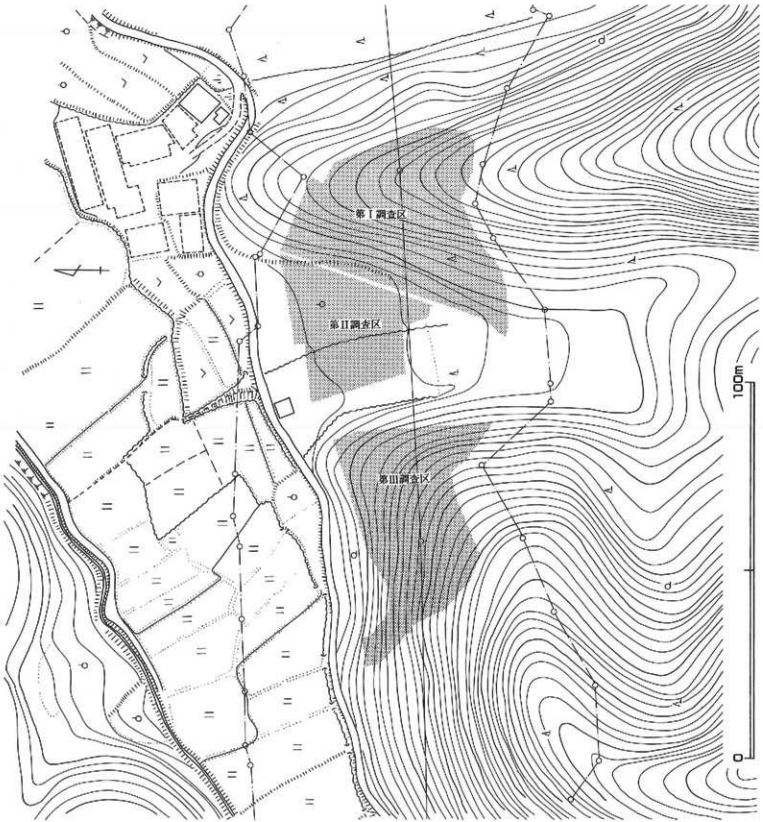
第１節　遺跡の概要と調査区

五反田遺跡は吉佐町内では最も西側に位置する遺跡で、谷奥の丘陵斜面と谷部に形成された集落である。調査区の標高は15～30mに収まるが、遺跡自体はさらに道路予定地の外にまで広がっていることは確実で、実際に谷奥の丘陵斜面には人為的な段状地形が認められる。この地形の全てを踏査したわけではないが、調査区内の谷底から、上流部から流出堆積したものと考えられる製鉄炉の炉壁が出土していることからも、この部分に製鉄関連遺構が存在することは間違いないであろう。このように周辺地形等を考慮すれば、今回調査した部分は、面積的には全体の半分にも満たないものと推定している。

調査区は第３章でふれたように、トレンチ調査の結果に基づき、地形の状況から第Ⅰ～Ⅲ調査区の３カ所を設定した。第Ⅰ調査区は東側の低丘陵の頂部から西側斜面にかけての部分で、最も多くの遺構が検出されている。第Ⅱ調査区は第Ⅰ調査区の丘陵と第Ⅲ調査区の丘陵に挟まれた谷部で、畑地造成により著しい削平を受けた部分である。検出された遺構は第Ⅰ調査区でのものと一連のものと考えられるが、特に丘陵裾部は削平により遺構が消失した部分があり、遺跡全体での時期的変遷を検討するうえで、大きな障害をもたらしている。第Ⅲ調査区は西側の丘陵斜面部に広く設定したものであるが、結果的にはその東側斜面と、北側斜面の一部でわずかな遺構が検出されたのみである。また、この調査区の南側高所では、山ノ神遺跡で検出されたものと同様の、いわゆる坑道状遺構が存在し、調査は途中で断念した。

検出された遺構は（柱穴を伴う）建物が15軒、（柱穴を伴わないが、建物となる可能性のある）段状遺構13カ所、土坑13基、溝状遺構２、坑道状遺構１カ所などがある。このうち建物については、いずれも重複、あるいは建て替えにより明確に柱穴配置が抽出できないものや、壁溝との関係が明確にできてないなど、多くの問題を抱えたものも少なからず存在する。建物、段状遺構の床面には熱変した遺構が多数検出されており、大半は鍛冶炉と考えているが、わずかに移動式カマド用の燃焼部貼付粘土も認められている。土坑のうち熱変の様子や、粘土貼りの状況から明らかに製炭窯と判断されるものが３基存在し、このうち１基は類例の少ない横口タイプと推定しているものである。

これらの遺構の時期・性格についての詳細は後に記すことになるが、その概要は次のとおりである。まず最も古い時期の遺構としては、Ⅰ区の丘陵裾部に位置する古墳時代前期の建物１軒がある。これは出土土器から前期でも終わり頃に位置付けられ、過去の安来道路の調査でもわずかしか見つかっていない時期のものといえる。これ以外の建物・段状遺構は古墳時代終末期のものばかりで、実年代ではおおよそ７世紀代のものといえる。また、前記したように、これらのうち床面に鍛冶炉、あるいはその痕跡を残すものが多数確認され、全体として「鍛冶集団」の存在を示すものと判断されるに至った（ただし製炭窯については時期が下る可能性が強く、直接関連するかどうか留保している）。また、当地域では希な「造り付けカマドを持つ竪穴住居」の存在はこの特殊技術集団の系譜についての問題を提起することになりそうである。その後、遺物には鍛冶滓はもとより、製錬滓（厚手の炉底滓を含む）や製鉄炉の炉壁片（ガラス質滓を含む）を確認するに至り、「鍛冶集団」



第68図　五反田遺跡　調査区配置図（1／1，000）

と言うよりはむしろ「製鉄集団」といい変えた方が、より正確であると、現在では考えている。このことは今回の調査によって、「安来道路予定地内の調査で鉄滓が出土するのは当たり前」という不毛な一言で片づけられていたこの問題を、ようやく現実的な中で論議できることになったことを意味し、最も大きな調査成果といえよう。

第69図　五反田遺跡全景

第70図　五反田遺跡遺構全体図（1／400）

第2節　検出した遺構・遺物

（1）第Ⅰ調査区の遺構・遺物

この調査区は、東側丘陵部の西斜面を中心に展開する建物群と関連する遺構が多数検出されており、遺跡の中心部といえる場所である。後述する第Ⅱ調査区との境となっている斜面裾部は畑地造成時の削平のため、遺構が消失している。また斜面部に立地することから、ほとんどの遺構はテラス状の平坦地を伴っている点が特徴かつ留意すべき点となっている。これは平地立地の遺構と異なる点で、例えば掘立柱建物を建てるためにも斜面を造成して平坦地を造ることが前提となっている。この平坦地と建物配置の関係は様々なパターンがあり、このパターンから建物の入り口の位置から、屋根構造、屋外施設をある程度読み取ることが可能である。

建物1～5、段状遺構1について（第71図）

これらは第Ⅰ調査区北端で検出された建物群で、数度の建て替えや重複により個々の建物の抽出が非常に困難なものである。ここでは調査時の観察と、その後の整理・検討作業から明らかになった、あるいは想定可能な建物（あるいは段状遺構）を抽出して説明しておきたい。

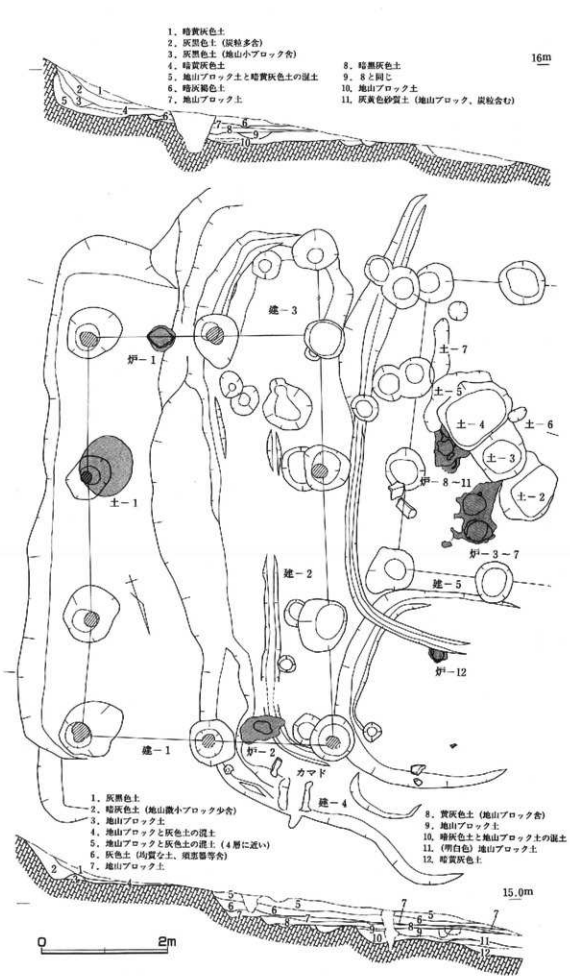
建物1（第72図）

この建物群中では最も新しい時期に造られ、かつ遺跡内では最大規模を持つ建物跡である。床面となる平坦面は標高約15mと群中では最も高く、丘陵斜面を大規模に掘削して造成されている。

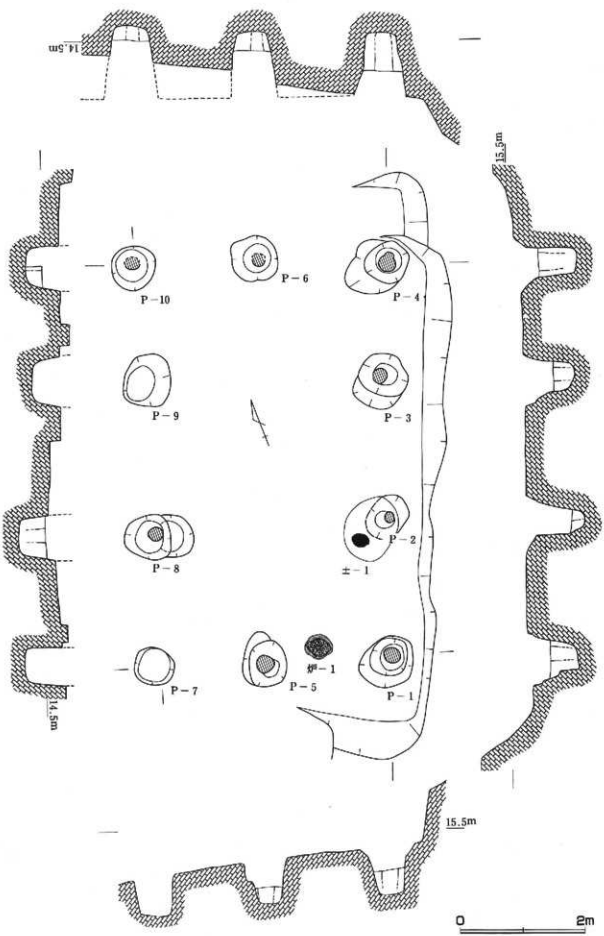
建物は長軸を尾根方向と平行な南北方向に取り、2×3間（4×6.15m）の柱穴配置を持つ。柱穴内面積はテラス面積にほぼ近いもので、建物を建てるうえで、ほぼ最小限の造成を行っていると言える。柱穴内の床面規模は24.6㎡を測る。柱穴はほぼ円形の堀方を持ち、床面からの深さは80～110cmを測る。隅柱の堀方は中間柱のものに比して必ずしも深いとは言えず、どちらかと言えばかなり不均一なものと言える。柱材の痕跡は床面では検出できず、柱穴をある程度掘り下げた段階で確認できた。柱痕は径25cm以下で、最終的に抜き取られてような痕跡も認められた。ちなみに柱間距離は平均で梁行きが2.00m、桁行きが2.05mを測る。

床面では平面的には検出できなかったが、土層断面では壁溝状の溝が認められ、貼り床をした段階では存在していた可能性が強い。床面の施設としては鍛冶炉1があげられる。位置的には建物内とはいえかなり柱穴寄りに存在し、この建物に伴うものか躊躇すべき点もあるが、調査時の観察や床面レベルとの関係から、この建物1に関連するものと判断した。

遺物（第83図1～4）はいずれも堆積土中からの出土で、この建物の時期を確実に示すものは存在していない。しかし、下層遺構との関係から7世紀第4四半期以降のものとして間違いなく、南側に隣接する建物6とほぼ同時期のものと考えられる。



第71図　五反田遺跡　建物1～5、段状遺構1（1／60）

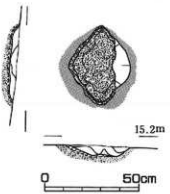


第72図　五反田遺跡　建物1（1／60）

鍛冶炉１（第73図）

建物１の床面で検出されたもので、柱穴Ｐ－１とＰ－２の中間やや内寄りに位置している。平面は菱形に近い形状を呈し、規模は43×32cmを測る。炉壁と考えられる被熱粘土は、西側の一部を除きほぼ全面に貼り付いた状態で残ってる。粘土の厚さは３cm以下で、暗灰色を呈し、一見すると不良焼成の須恵器に近い状態である。内部の堆積土は炭化物と焼土粒を含むものであるが、攪乱されたような状態であった。

遺物は皆無であるが、建物１の床面造成後に造られていることから、７世紀第４四半期以降であることは確実である。

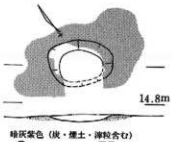


第73図　五反田遺跡
炉１（１／２０）

土坑１（第75図）

建物１の柱穴Ｐ－２を切り込んで造られたもので、平面はほぼ円形を呈し、規模は検出面で径92×82cm、深さ約16cmを測る。堆積土中には炭化物を多く含んでおり、被熱粘土貼りは認められないが、製炭窯と推定される。

時期の分かる遺物は出土していないが、建物１に後出することが明らかであり、８世紀以降のものであろう。



第74図　五反田遺跡
炉２（１／２０）

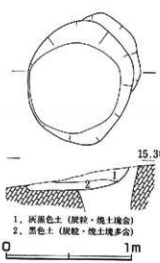
建物２（第77図）

建物１の下層遺構であり、壁溝の一部と柱穴で構成される。柱穴配置は明確でなく、２×３間の可能性を考えているが、建物３との関係もあり、判断できないままである。なお、柱穴の検出は数回実施しており、通常の配置で柱穴がありそうな箇所は、特に念入りに行っている。壁溝は北東側コーナー部が明確に検出できているが、南端は検出できていない。床面施設は確実なものは存在しないが、後述するように、炉３～11、土坑２～７の中に該当するものがあるかもしれない。

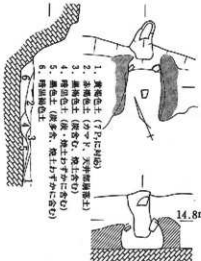
遺物は確実なものはないが、切り合い関係から建物１・４以前、段状遺構１以降であること、また周辺部の状況から判断して７世紀前半に収まるものと考えている。

建物３（第78図）

建物２と重複して検出されたもので、壁溝と複数の柱穴配置からなる。土層観察からは建物２に後出するように観察されたが、平面的な整合性は得られておらず、判断できていない。柱穴配置は明確なものでなく、１×１間の建物が１、２回の建て替えを行ったもの



第75図　五反田遺跡
土坑１（１／３０）



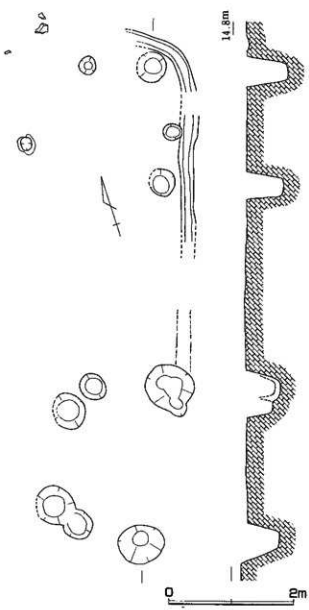
第76図　五反田遺跡
建物４カマド（１／３０）

と考えたいが、決め手を欠いている。壁溝はコーナー部が認められるほか、想定した建物に対応するような造り替え痕跡が壁面において観察された。

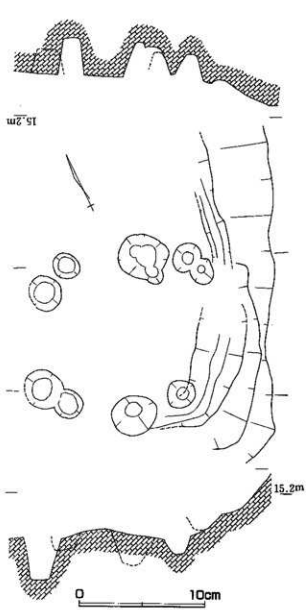
遺物は図化していないが、床面より移動式カマド小片が出土している。建物の時期については土層関係から7世紀前半に収まるものと推定しているが、7世紀第4四半期の可能性も捨てきれない。

建物4（第71図）

遺構群北端に位置するもので、他の建物と複雑に切り合った中から抽出されたものである。柱穴配置は明確でなく、無柱穴の可能性も残る。カマドは北辺に取り付いており、この部分の壁面は確実にこの建物に伴う部分である。カマドは粘土によって構築されており、内部及び崩落土中から丹塗り土師器（第83図9，10）が出土している。床面付近には形態から鍛冶炉と判断した被熱部（炉2）が検出されているが、土層観察からこの建物の床面の貼り替え後、もしくは別の建物床面に伴う可能性がある。また、これと同一面から須恵器坏6、砥石15などが出土している。



第77図　五反田遺跡　建物2（1／60）



第78図　五反田遺跡　建物3（1／60）

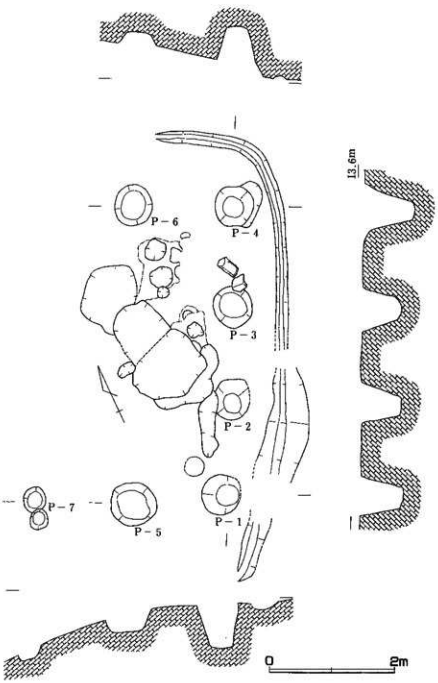
建物5（第79図）

一連の建物群中では最も西側に位置するもので、L字状の壁溝と2×3間分の柱穴配置、そして床面の炉群、土坑群などを検出している。柱穴内の床面規模は3.1×4.7m、約14.6㎡を測る。柱間距離は平均で梁行き1.55m、桁行き1.57mを測り、建物1よりかなり小規模である。柱穴堀方はほぼ円形を呈し、中間柱は一段浅いものとなっている。壁溝は柱穴から70cm以上離れており、南側のコーナーもわずかに残る。壁溝で示される加工段と建物位置の関係から、わずかながら建物の南北両側に空間部が指摘できる。

床面で検出された鍛冶炉はこの建物に伴う可能性が強いが、床面レベルがほぼ同じ建物2に関連するものを含む可能性も残る。これらの施設については後述するとして、遺物はごく少量が出土したにすぎない。

図化できたのは土師器甕（第83図12）のみであるが、この他須恵器蓋坏の細片があり、大半は回転ケズリが認められるものである。

この建物の時期は出土遺物やその位置関係から7世紀第1四半期以前と考えられる。



第79図　五反田遺跡　建物5（1／60）

炉3～11、土坑2～7（第80図）

建物5の床面で検出された遺構群で、調査当初はこの付近で多数の鉄滓（大半が再結合鍛冶滓）が出土しており、最終的には遺跡内で最も鍛冶炉跡が集中する部分となった。炉群は非常に遺存状況が悪く、粘土貼りが残っているものはわずかである。また、被熱面の形態のみから炉底跡と

判断したもの（炉５～７）あり、最大で９基の炉跡が存在していたことになる。これらは数回の造り替えを示しているものと考えられるが、炉３～７（A群）と、炉８～11（B群）の２つの地点で２基が同時操業していた可能性もあろう。炉跡の平面形は不整円形で、やや歪なものも存在し、規模は径30cm前後（炉３）から径25cm前後（炉８）、径18cm前後（炉11）を測る。

土坑２～５はいずれも鍛冶滓や鍛造薄片等を含んでおり、特に３～５は多量である。また、土坑６・７は埋土が全く異なり、滓等も含んでいない。築造順位は切り合い関係から２→３→４→５と、７→５→４が明らかであり、さらに土坑３・４・６は炉８・10を切り込んでいることも判明している。これらのうち土坑３～４は排滓土坑と呼ぶべきであろうが、当初は別の機能を有していた可能性も強く、注意すべき点である。またこれらの土坑は切り合い関係だけで言えば、建物１を含む後出する時期の鍛冶炉に関連する可能性もあるだろう。

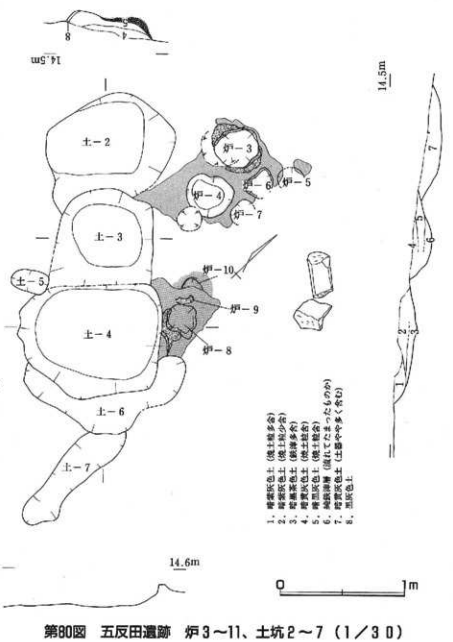
これらの土坑と鍛冶炉が同時期のものとすれば、少なくとも土坑４が機能していたときに操業していた鍛冶炉はA群となる可能性が強いことになる。

また、これらの遺構群の東側床面には石材が２点置かれており、鍛冶作業に関連すると考えている。

遺物は土坑２から土師器甕（第83図13）が、土坑４内から羽口片（第83図14）が出土している。

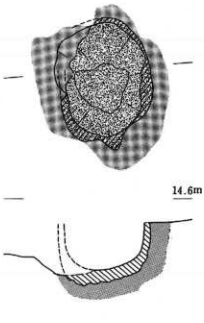
炉12（第81図）

建物群と同時に検出したものであるが、どの建物に関連するものか明確でない。しかし、前記した建物５の壁溝によって切られている点、後述する段状遺構１の埋没後に造られている点などが判明しており、さらに検討が必要である。平面は不整楕円形で、規模は検出面で径36×20cm、深さ約25cmを測り全体とし



第80図　五反田遺跡　炉３～11、土坑２～７（１／３０）

てボール状を呈す。黄灰色を呈した粘土貼りがほぼ全面に残っており、内部は造成土で埋没していた。遺跡内で最も新しいと考えられる炉1とはやや形状が異なる点が注意される。時期は遺構の切り合い関係から7世紀第1四半期におさまるだろう。



第81図　五反田遺跡
炉12（1／8）

段状遺構1（第82図）

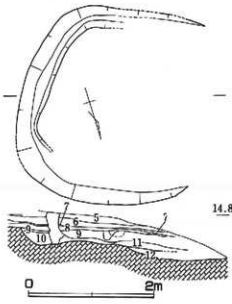
最も下層で検出されたもので、隅丸方形状を呈し、規模は南北3.15mを測る。柱穴は皆無で、壁溝は浅いが、全周していたものと考えている。遺物は出土していないが、切り合い関係等から7世紀第1四半期と推定される。

建物6（第84図）

前記した建物群の南側に位置するもので、いわゆる掘立柱建物とされるものであるが、床面に鍛冶炉を持ち、鍛冶工房としての機能を有していたものと判断している。建物は南北方向に主軸を持つ2×3間の柱穴配置を持つもので、規模は梁行き3.5m前後、桁行き4.8m前後を測る。桁間の中間柱はやや浅く、この間の柱間距離も狭いものとなっている点が特徴である。柱穴は堀方平面が円形を呈し、床面からの深さは50～60cmを測る。また、一部の柱穴は重複している様にも観察され、建て替えの痕跡を示している可能性がある。この他、柱穴にはこの建物と直接関係しないものが含まれており、後世のものが重複していると考えられる。

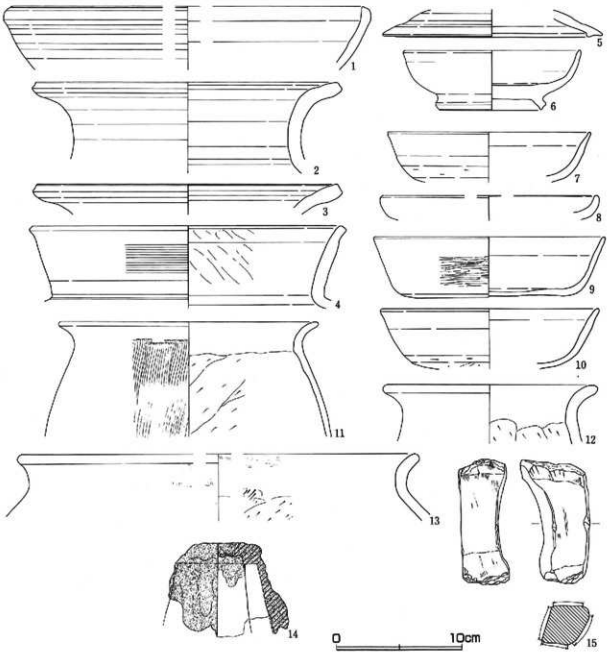
この建物に伴う平坦地は斜面造成によって造られているが、造成盛り土はほとんど流失しており、残存する床面は半分に満たない状況である。壁溝は東辺柱穴列に接するように造られており、特徴的である。壁溝の平面プランは北側で直角に曲がるが、南側では緩やかな弧状を呈し、建物の南西側に空間を造りだしていたものと推定される。この空間が建物にとって入り口を意味するのか、あるいは別の鍛冶関連機能のためなのか検討する必要があろう。また、加工段の壁面は途中で傾斜変換点が認められ、これが壁面の崩落によるものなのか、壁溝に板材を設置した際の裏込め土の採取痕跡なのかも検討課題と言える。

床面中央北寄りには被熱面と被熱粘土貼りが残存し、鍛冶炉の一部と判断している。これは遺存状況は良好とは言えないが、

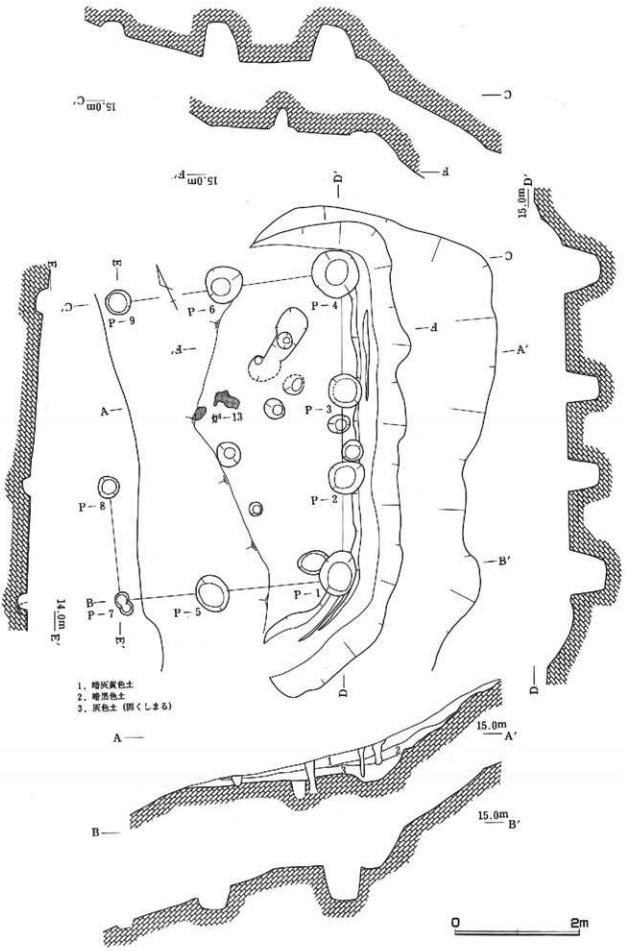


第82図　五反田遺跡
段状遺構1（1／60）

他の鍛冶炉と同様の粘土貼りを有している。また、鍛冶炉の北東部には不整形な土坑が認められ、内部には焼土と炭化物が堆積していた。これについても当初は鍛冶炉と想定していたが、その堆積は二次的であり、別の鍛冶関連の機能を検討しなければならないと考えている。

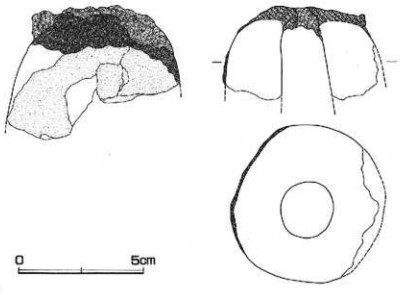


第83図　五反田遺跡　建物1～5他出土遺物（1／3ほか）

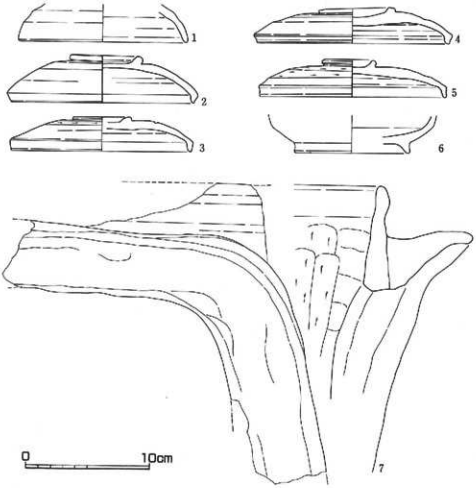


第84図　五反田遺跡　建物6（1／80）

遺物（第85・86図）は大半が床面あるいは壁面上で出土したもので、明らかな混入品を除けばほぼ同時期のものと言える。1は蓋として図化しているが、須恵器高坏の坏部の可能性もあるもので、時期的にはこれだけが古く、混入品と考えている。2～5はいずれも輪状つまみを有する須恵器の蓋で、完形、あるいは完形に近いものばかりである。



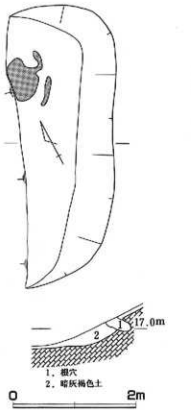
第85図　五反田遺跡　建物6出土羽口（2／3）



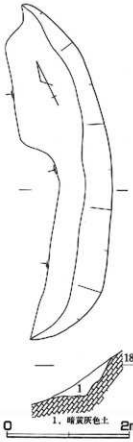
第86図　五反田遺跡　建物6出土遺物（1／3）

6は高台を持つ須恵器の坏底部片で、輪状つまみを持つ蓋とセットとなるタイプである。7は移動式カマドの焚き口から口縁部にかけての破片で、通常は外反するはずの口縁部がほぼ直立する形態を持つのが特徴である。この他、鍛冶関連遺物として鍛冶滓少量とフイゴの羽口片が出土している。この羽口片は遺跡内で出土したものの中では最も大型なもので、胎土も白っぽい特徴的なものである。外径は6.2cm、孔径は2.2cmを測り、先端部には鉄滓とガラス質滓が付着している。

建物の時期は出土した須恵器から7世紀末頃と考えられる。



第87図　五反田遺跡
段状遺構2（1／60）



第88図　五反田遺跡
段状遺構3（1／60）

段状遺構2（第87図）

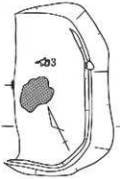
斜面の比較的高所で検出された段状遺構で、平面形は方形に近い形状を持ち、残存する床面は南北長4．2m、東西幅約1．2mを測る。壁溝は平面的にも、土層観察においても全く認められず、当初より存在しないものと判断している。床面の北側には赤色化した被熱面が認められるが、鍛冶炉の特徴である要素は認められず、移動式カマドの燃焼部痕跡と推定している。

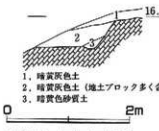
遺物が出土しておらず、明確な時期決定は困難であるが、周辺遺構の状況や、立地から7世紀末の可能性が強いものと考えている。

段状遺構3（第88図）

段状遺構4に隣接するもので、トレンチ調査により床面の一部が失われているが、ほぼ全形を留めている。平面形は緩やかな弧状を呈するもので、残存規模は南北長約5．2m、最大東西幅1mを測る。壁溝は段状遺構4と同様全く検出できておらず、存在しないものと判断している。

時期は遺物がないことから確定できないが、堆積土や立地から、やはり7世紀の末頃ではないかと考えている。





第89図　五反田遺跡
段状遺構4（1／60）

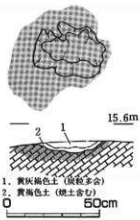
段状遺構4（第89図）

段状遺構2，3の下方で検出されたもので、非常に小規模なものである。平面は隅丸方形に近いが、コーナー部は緩やかな弧状

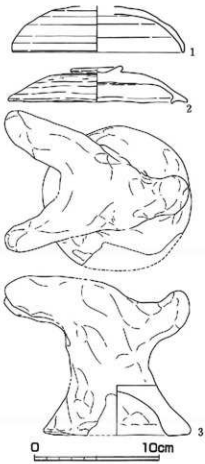
を呈しており、一見すると竪穴建物と認識できるものである。床面は流出した部分があるが、他に比較してよく遺存しており、南北長2.35m、東西幅1.1mを測る。

床面のほぼ中央部には被熱部分が検出されており（第90図）、被熱粘土は残存しないが、リング状被熱面として検出できたことや、形態から鍛冶炉痕跡と判断している。平面は不整長楕円形を呈し、規模は３８×２７、検出面からの深さは６cmを測る。このように検出時に赤色被熱部分がリング状を呈し、堀上げ後に浅い窪みを持つものは粘土貼りが失われた鍛冶炉の痕跡と判断している。

遺物（第91図）は、堆積土中から須恵器蓋片１が、床面からやや浮いた状態でほぼ完形の土製支脚３が、壁溝内から完形近くに復元できた須恵器蓋２と、図化不能な土師甕片が出土している。このうち遺構の時期を示すのは２と考えられることから、この段状遺構は７世紀後半でも中葉に近い時期の鍛冶工房と考えている。



第90図　五反田遺跡　炉14（１／２０）



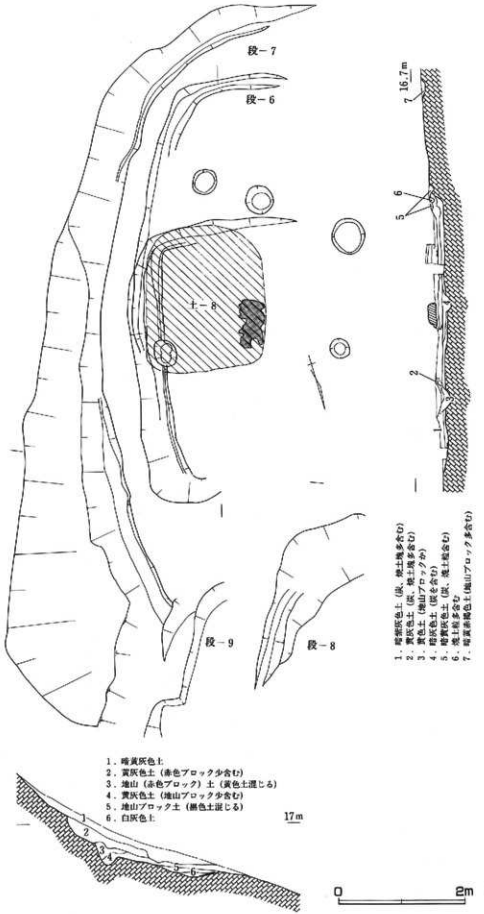
第91図　五反田遺跡　段状遺構４出土遺物（１／３）

段状遺構５～９・土坑８（第92図）

これらの遺構群は、調査前から１つの段状地形として認識されていたもので、最終的に重複、あるいは造り替えによる複数の段状遺構として認識できたものである。最も最初に検出、すなわち最も新しい時期のものは土坑８であり、これについては後で詳述したい。段状遺構は床面に柱穴を伴うものが存在する可能性が強いが、その配置等は明確にできておらず、検出できた柱穴も極めて浅いものである。土層観察から築造順位を求めると、段状遺構５、段状遺構６、段状遺構７、土坑８の順となり、段状遺構８、９については他の遺構との関係が明確にできていない。時期については後で一括して検討する。

段状遺構５

最下層で検出されたもので、平面形は方形に近いものと考えられ、竪穴建物の可能性もある。規模は北西側が流出しているため明確でないが、南北4.2m前後、東西2.8m以上を測る。壁溝は東側で明確に検出でき、本来は全周した可能性が強いものと考えている。床面に被熱粘土が検出されており、形態、被熱具合から移動式カマドの燃焼部と判断している。



第92図　五反田遺跡　段状遺構5～9（1／60）

第93図　五反田遺跡
段状遺構5被熱面（1／20）

段状遺構6

段状遺構5に後続するもので、平面L字状の壁溝がかろうじて残存していたものである。壁溝の形状から規模は南北4.5m前後、東西は2.5m以上を測る。柱穴の一部はこの段状遺構に伴う可能性もある。

段状遺構7

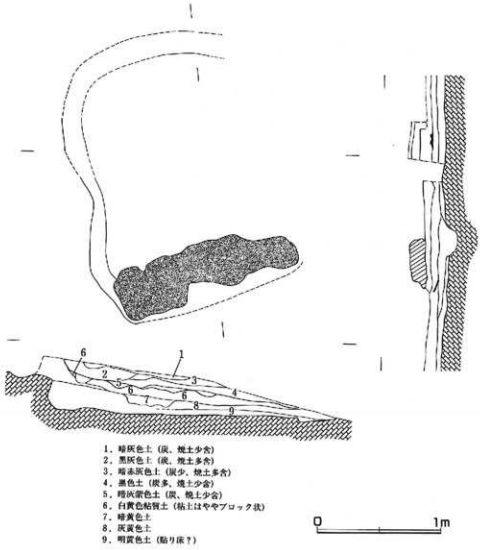
段状遺構6に後続するもので、平面は緩やかな弧状を呈している。壁溝は中央部で途切れるが、本来は連続していた可能性もある。また、北側の壁面は二段になっており、別の段状遺構が重複する可能性も考えられる。

段状遺構８

斜面部でかろうじて壁溝らしい溝を検出したもので、全様は不明である。平面的には緩やかなカーブを持っており、段状遺構の南端部付近のみが残存しているものと考えられる。

段状遺構９

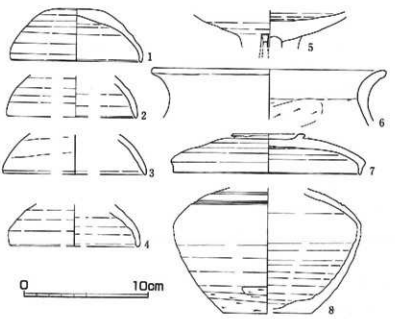
この遺構も段状遺構８と同様かろうじて壁面を検出できたものである。明確な壁溝は検出できていないが、段状遺構８の造り替えと推定している。



第94図　五反田遺跡　土坑８（１／３０）

土　坑８（第94図）

段状遺構５～７と重複する遺構で、重機による表土除去中に、多量の炭化物と、被熱粘土塊群として認識、その後の裁ち割り調査等により、本来は隅丸方形に近い形状を持つ土坑であることが判明した。復元規模は、南北2.2m、東西1.8mを測る。床面には径３cm前後の炭化木が多量に認められ、北側堆積土中には厚さ15cm前後の被熱粘土壁の固まりが残存する。この粘土壁は



第95図　五反田遺跡　段状遺構５～７出土遺物（１／３）

原位置を留めていないものと考えられるが、壁そのものは遺存状況が良好で、土坑上部に構築されたものが崩落したものと考えられる。

段状遺構10～12・土坑９、10（第96図）

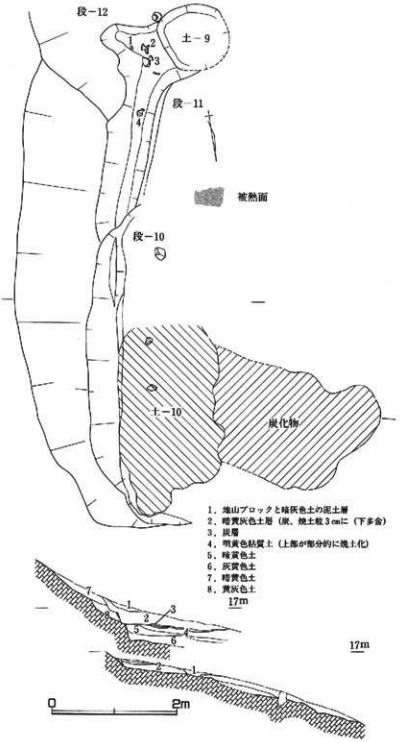
これらは調査区南側の丘陵斜面で検出された遺構群で、土坑は段状遺構に伴う可能性があるものである。また土層観察から遺構の前後関係が判明しているものもあり、以下ではこの点を説明しながら個別の遺構について記述したい。

段状遺構10

壁面と床面の一部を検出できたもので、全様は明確でない。後述する段状遺構１１より新しいのと考えられ、位置的には土坑１０に関連するようにも見える。しかし、土層からはこの遺構が埋没後に土坑が構築されたように観察され、これに先行するものと判断している。時期については、後で土坑１０と共に検討したい。

段状遺構11

段状遺構１０の南側で検出され、壁溝の一部と被熱面が１カ所検出されている。壁溝は幅広で、南側で緩やかに屈曲して土坑９に接続するが、屈曲部で南東方向に分岐、あるいは重複する溝も認められる。これらが同時期に機能していた明確にできなかったが、ほぼ同質な堆積土により埋没しており、その可能性が高いと考えている。また、これらが埋没後に廃棄された土器が、この部分に集中して出土している。



第96図　五反田遺跡　段状遺構10～12、土坑９・10（１／８０）

段状遺構12（第70・96図）

最も南側に位置する段状遺構で、その過半は調査区南側にあるため、全様は明らかにできていない。検出されたのは壁溝と床面の一部のみで、確実にこれに伴う柱穴は抽出できていない。

遺物は堆積土中から出土したものがほとんどで、床面直上からは完形に近い土師器の甕が１点出土している。時期は７世紀の前半と推定している。

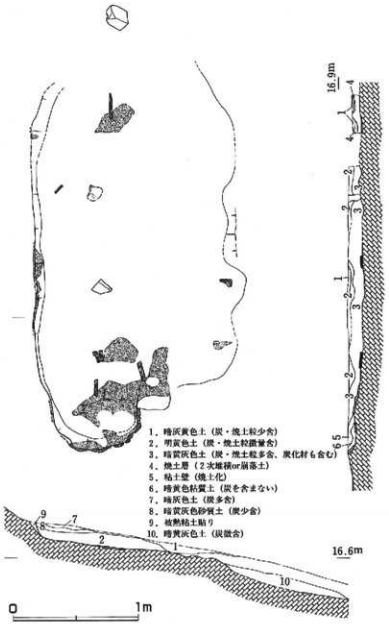
土坑９

段状遺構11の壁溝と接続するような位置で検出できたもので、平面形は隅丸方形に近い形態を持ち、径は約150cmを測る。検出面からの深さは約20cmで、底面には黄白色の粘土が堆積、あるいは貼り付けられていた。この粘土により、調査時でも雨水が浸透せずに溜まる状態であった。

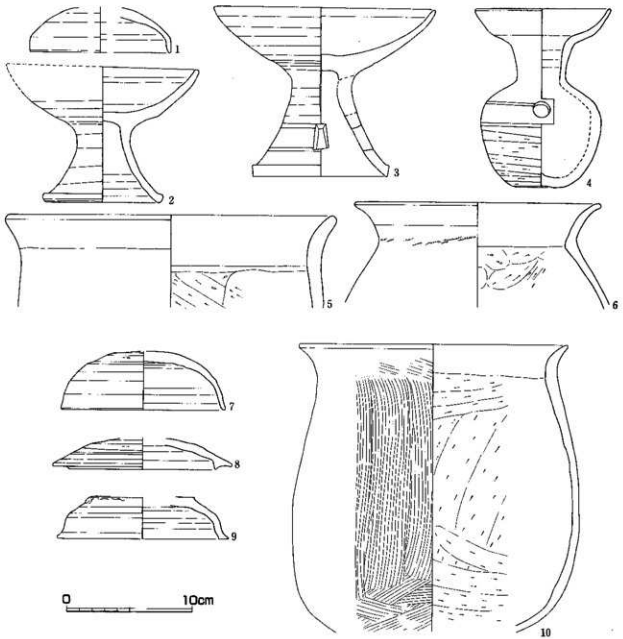
遺物は出土していないが、時期は段状遺構11と同時期、あるいはこれに前後することは間違いなく、７世紀の前半に収まるものと考えている。

土坑10（第97図）

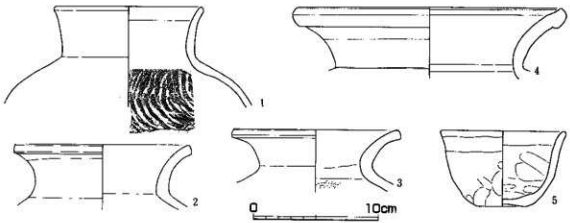
段状遺構１０にほぼ重複するもので、土層観察からこれが埋没後に構築された可能性が高いものである。平面形は長軸を斜面と平行にとる不整長楕円形で、南端はうまく検出できなかった。規模は南北長3.2m、最大幅1.65mを測り、検出面からの深さは最大で、約14cmを測る。床面と壁面には部分的に粘土が貼り付けられており、本来は全面に施されていたものと考えている。この粘土貼りは熱により硬化、灰黒色化しており、土坑内部が還元焔焼成したものと判断している。北端は他に比して良好に遺存しており、約30cmほどの突出部として捉えることができる。また、この突出部分の床面は他所より一段高く作られており、注意される。西側には床面の粘土



第97図　五反田遺跡　土坑10（１／３０）



第98図　五反田遺跡　段状遺構10～12出土遺物（1／3）



第99図　五反田遺跡　土坑10関連遺物（1／3）

貼りが張り出した様子が認められ、この部分から斜面下方にかけて、炭化物や焼土を多量に含んだ土が堆積していた。床面には所々径3cm前後の炭化木が遺存しており、いずれも長軸方向に平行した状態である点が注意された。また、この土坑の下層から長軸線に沿うように割石が見られ、土坑の構築と関連するかもしれない。

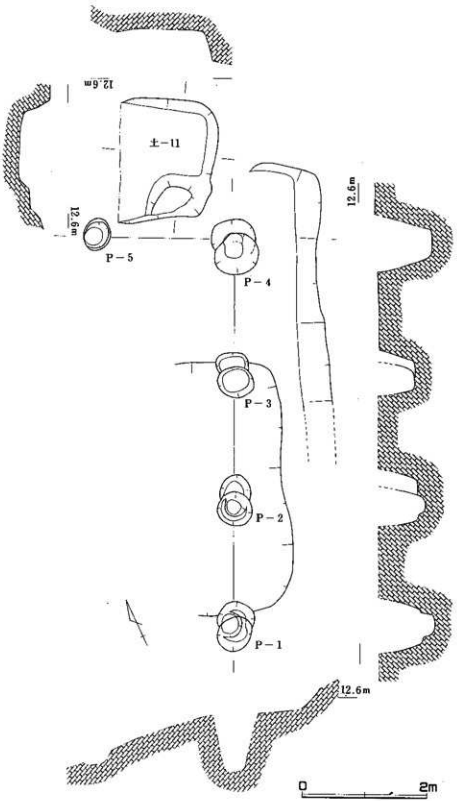
段状遺構10～12出土遺物（第98図）

1～6は段状遺構11の壁溝埋没後に廃棄されたもので、同時期の一括遺物と考えられる。1は口径11.2cmを測り、3の脚部透かしは2方向である。5は土師器の甑、6は頸部が屈曲する古い特徴を持つ土師器甕である。時期は7世紀第1四半期と考えられる。

7～9は段状遺構12の堆積土中出土の須恵器、10は同床面出土の土師器甕である。甕は新相を呈し、7世紀後半の可能性もある。

土坑10関連出土遺物（第99図）

1、2は土坑検出以前の堆積土中出土須恵器である。3～4は土坑構築以前の下層出土品で、5は口径10cmの土師器坏である。これらに明確な時期差はないと考えられ、土坑の時



第100図　五反田遺跡　建物7、土坑11（1／60）

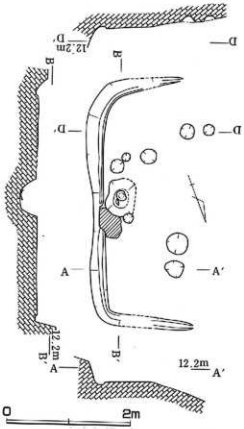
期は判断できていない。

建物7（第100図）

丘陵裾部で検出された建物で、谷部の畑地造成により著しい削平を受けており、かろうじて柱穴と床面が残存したものである。柱穴配置は2×3間と推定され、一回の建て替え痕跡が認められる。桁間の柱穴は一段浅く掘り込まれており、特徴的である。遺物が出土していないが、段状遺構13に後出することが明らかであり、周辺部の状況から7世紀前半のものと考えている。

土坑11（第100図）

建物7の北側に接して検出されたもので、土坑として扱っているが、西側壁面は認められず、段状遺構と呼ぶことも可能なものである。平面形は方形を呈し、規模は南北1.95m、東西1.5mを測り、南側にステップ状の段が造り出されている。建物7に関連する施設と考えており、入口の可能性もあろう。時期は堆積土の様子等から7世紀前半頃のものと推定している。

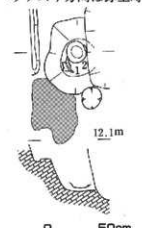


第101図　五反田遺跡
段状遺構13（1／60）

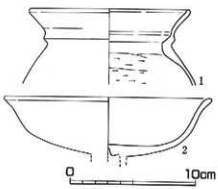
段状遺構13（第101図）

建物7に先行するもので、無柱穴の竪穴住居と考えられるものである。西半部は削平されているが平面は方形を呈するものと推定され、規模は南北3.90mを測る。東辺には壁際土坑（第102図）が造られており、底部から土師器片2点が出土している。壁溝は一部途切れており、その部分では土師器甕の体部片が出土している。なお床面で検出した小ピット群は後世のものであることが明らかなものばかりである。

図化できた遺物（第103図）は壁際土坑内出土の土器2点である。1は二重口縁の甕で、胎土やヘラケズリ方向は弥生時代終末から普遍化するものと同一であるが、口縁部の形態はかなり退化したものとなっている。2の高坏坏部も弥生時代から見られるタイプであるが、形態は新相を呈している。これらの土器から、この遺構は古墳時代前期末と考えられる。



第102図　五反田遺跡
段状遺構13壁際土坑（1／30）

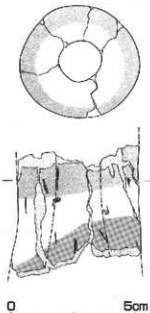


第103図　五反田遺跡　段状遺構13
出土遺物（1／3）

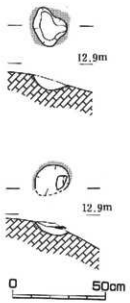
建物８（第104図）

段状遺構14～16と重複して検出された建物跡で、地山面で最終的に認識できたため、これらとの前後関係や、同時性は確認できなかったものである。柱穴配置は１×２間分が確認できるが、西側は著しい削平を受けており、２×２間の総柱となる可能性もある。

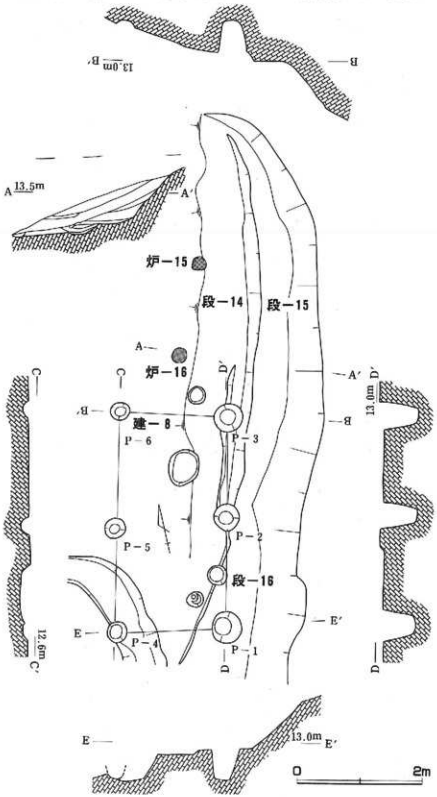
遺物は柱穴内から出土した羽口片（第105図）のみである。外径は4.9～5.2cm、孔径は1.7cmを測



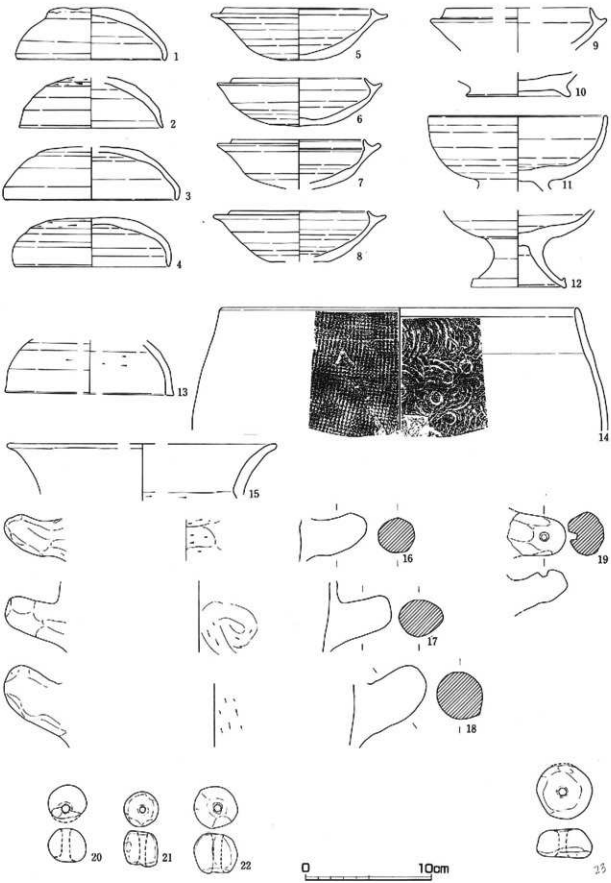
第105図　五反田遺跡
建物８出土羽口（２／３）



第106図　五反田遺跡
炉15(上)・16(１／２０)



第104図　五反田遺跡　建物８、段状遺構14～16（１／６０）



第107図　五反田遺跡　建物８、段状遺構14～16出土遺物（１／３）

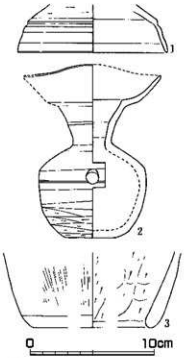
り、色調は黄白色を呈する。建物の時期は周辺部の遺構の状況から、7世紀前半と推定している。

段状遺構14～15（第104図）

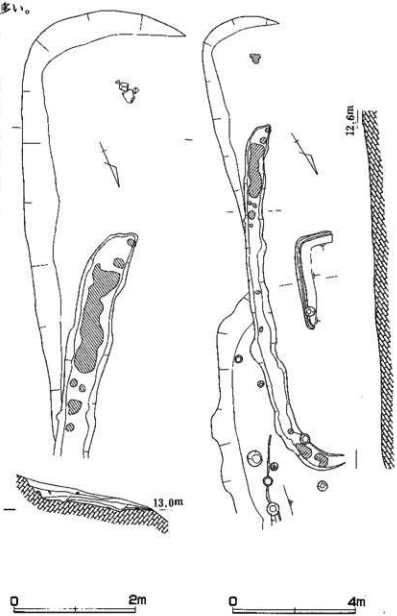
段状遺構14・15は建物8の北側にこれと重複する形で検出されたもので、土層の切り合い関係から15が後出するものであることが判明している。また、これらの段状遺構床面には鍛冶炉（第106図）が1基ずつ検出されており、いずれも炉壁は消失しているが、径20cm前後の円形、あるいは不整円形を呈する窪みとして遺存していた。壁溝については14には伴っているが、15では検出できていない。なお、段状遺構16については壁面と床面の一部が検出されたのみで、不明確な部分が多い。

遺物（第107図）は、堆積土中から須恵器（1～14）や土師器（15～19）、土錘（20～22）、石製紡錘車（23）などが出土している。1～4は蓋で、復元口径はそれぞれ12cm・11.4cm・13.5cm・12.6cmを測る。5～9は坏で、復元最大径はそれぞれ14.0cm・13.2cm・13.0cm・13.7cm・13.5cmを測る。これらの蓋坏は、回転ケズリを施さないものが大半であり、胎土も砂粒を少量しか含まなず、青灰色を呈し焼成良好なものが多い。

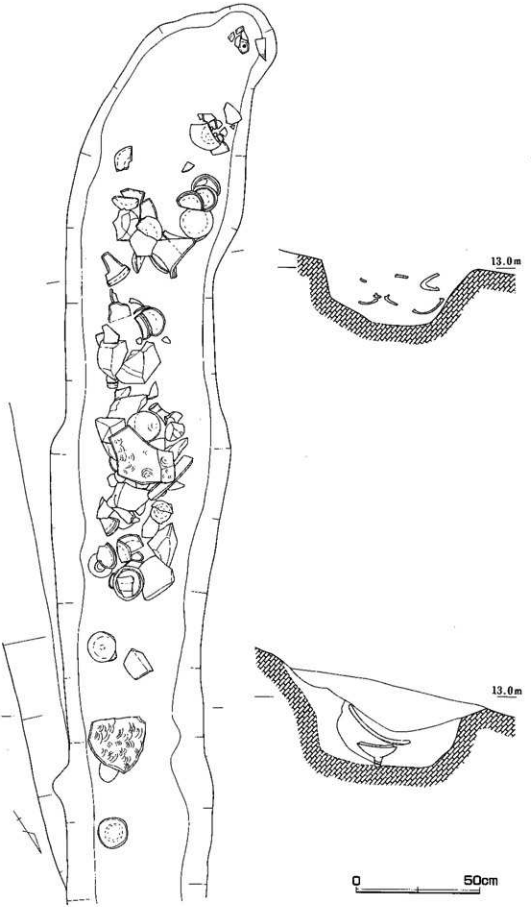
13は高坏等の脚部と推定されるもので、端部が特徴的である。14は鉢と考えられるもので取っ手が付く可能性がある。16～19は甑の取っ手部で19は上面に小孔が認められる。23は白色の凝灰岩と推定される石材で作られたもので、表面の風化が著しく、文様等は確認できない。



第109図　五反田遺跡
段状遺構17出土遺物（1／3）



第108図　五反田遺跡　溝状遺構1、段状遺構17・18（1／120他）



第110図　五反田遺跡　溝状遺構１遺物出土状況①（１／３０）

遺構の時期は出土須恵器から７世紀第１四半期に収まるものと考えられる。

溝状遺構１、段状遺構１７・１８

（第108図）

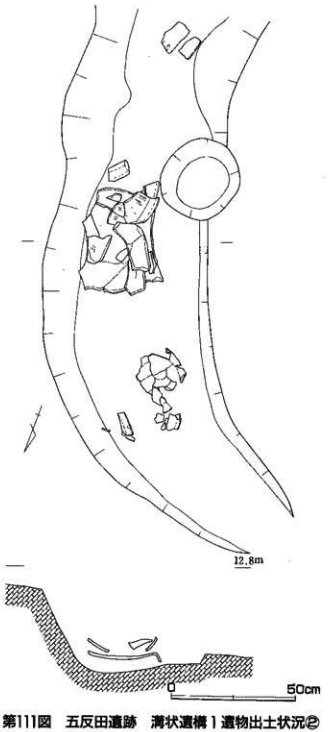
これらの遺構は後述する溝状遺構２・段状遺構19と同様、相互に関連する可能性が高いもので、全体として１つの遺構として捉えるべきものかもしれない。

溝状遺構１（第108図）

この遺構は緩やかな弧状を呈しながら北側で急激にカーブするもので、底面レベルは北側に向かいゆっくりと下降している。規模は検出できた部分で、南北長約11.3m、幅60cm前後を測り、内部からコンテナ約８箱分の土器が出土している。

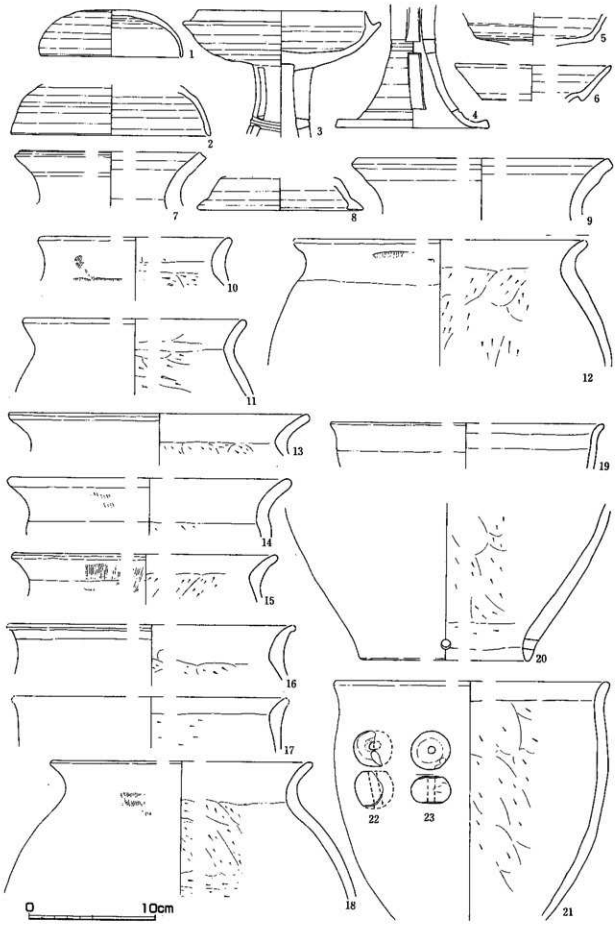
第112図は溝状遺構が検出される以前の上層から出土した遺物で、確実にこの遺構に伴うか不明なものである。１～９は須恵器、他は土師器、土錘で、大半は溝内出土品と同時期のように考えている。

溝内出土遺物（第112～116図）は溝南端部に特に集中するほか、北端部でもやや集中するような傾向が認められ、完形あるいは完形に復元できるものを多く含んでいる。土器群は大半が須恵器で、これに少量の土師器甕、移動式カマド１点などで構成されている。



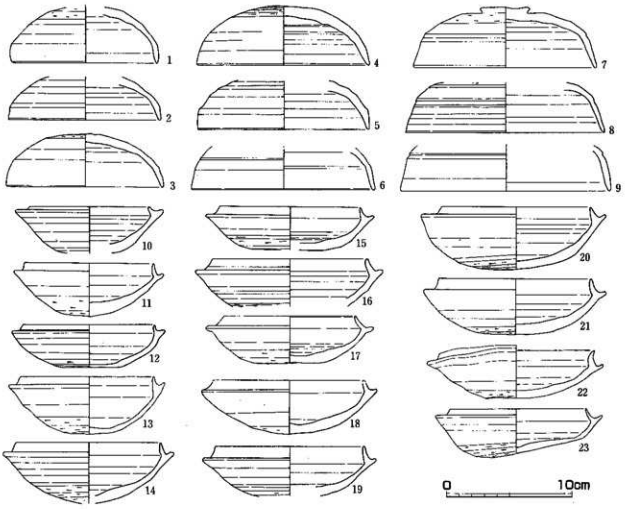
第111図　五反田遺跡　溝状遺構１遺物出土状況②（１／３０）

１～６は須恵器の蓋で、いずれも外面の稜はなく、全体に丸いプロポーションを持つ。また天井部外面の２分の一は回転ケズリが施されているが、口縁端部の造りは単純なものばかりである点が注意される。７～８は有蓋高坏の蓋で、円盤状のつまみを有するものと考えられる。いずれも外面の段や、回転ケズリの範囲など、古式の様相を留めているが、口縁端部の造りは単純なものばかりである。10～23は坏で、蓋同様径にばらつきがあり、口縁部の立ち上がりは短いものが多い。回転ケズリの範囲は２分の１以下に施されるものが多く、全体に丸いプロポーションを持つ点も蓋と共通する。24～26は長脚二段の有蓋高坏で、脚裾部は31～33が対応するものと考えられる。透かしは２方向のものと３方向のものが見られ、口縁部立ち上がりは蓋坏の坏と同様だが、径は大きいものばかりである。28～30は無蓋高坏の坏部で、脚部の形態は不明である。34は短脚の有蓋高坏で、他例

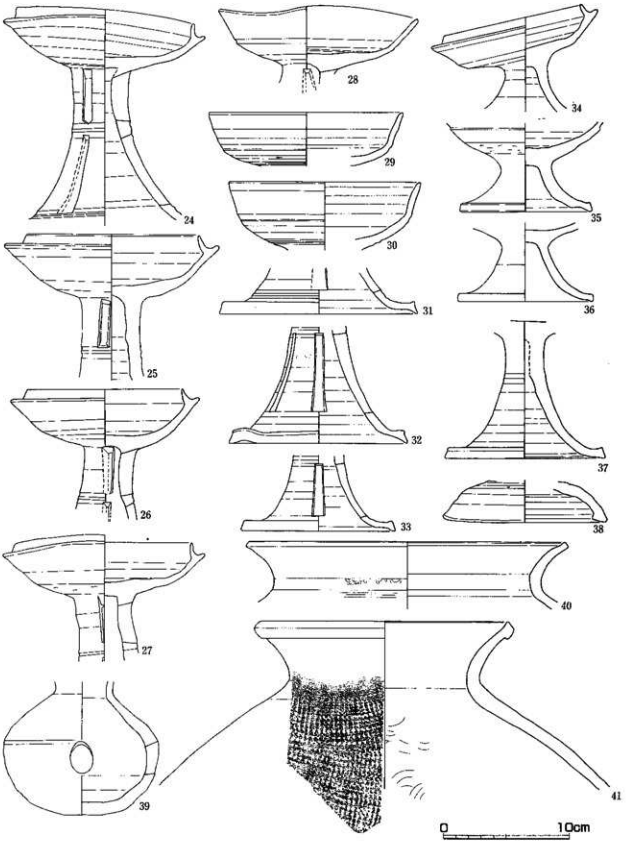


第112図　五反田遺跡　溝状遺構周辺上層出土遺物（1／3）

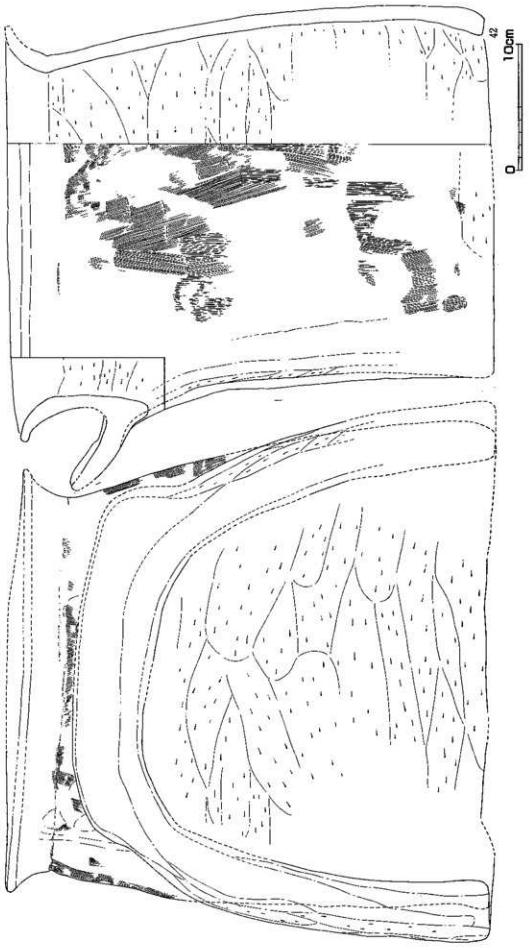
から38に近い形態の脚端部を持つものと推定している。39は脚で、風化のため調整不明瞭であるが、体部に沈線一条が認められる。40・41は須恵器の甕で、復元口径はそれぞれ26cm・21cmを測る。42は土師器の移動式カマドでほぼ完形に復元できたものである。口径33.5cm、器高38cm、基底部幅42cm



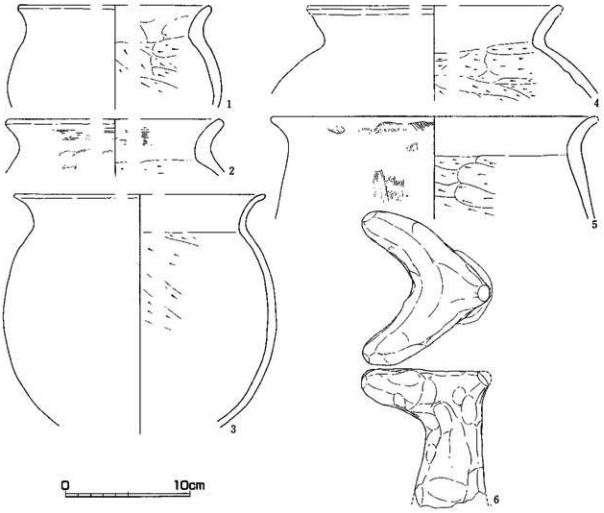
第113図　五反田遺跡　溝状遺構1出土遺物①（1／3）



第114図　五反田遺跡　溝状遺構１出土遺物②（１／３）



第115図　五反田遺跡　溝状遺構１出土遺物③（１／３）



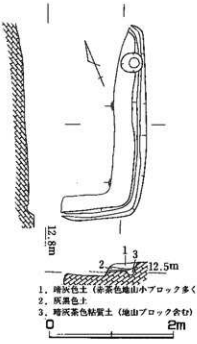
第116図　五反田遺跡　溝状遺構１出土遺物④（１／３）

を測る。１～５は土師器の甕で、６は土製支脚である。

これらの遺物のうち須恵器は胎土に２㎜以下の砂粒を非常に多く含み、焼成にもばらつきが見られる点に特徴がある。この特徴は前章で扱った山ノ神遺跡の６世紀後半の須恵器群と共通し、この次の時期には全く異なる胎土となっている。時期については、６世紀末から７世紀初頭頃と考えている。

段状遺構17（第108図）

溝状遺構１の南側に位置するもので、平面Ｌ字状の壁面と、ほぼ水平な床面により構成される。土層観察では貼り床状の土層や、造り替え痕跡を認識できたが、平面的には捉えることができなかった。また、溝状遺構１との関係は明確にできていないが、後述するように同時期の可能性も強いと考えている。床面直上からは20cm前後の石材が４点集中して出土しており、とくに砥石として利用されたような痕跡は認められなかったが、何らかの機能を有していたものと判断している。



第117図　五反田遺跡
段状遺構18（１／６０）

遺物（第109図）はわずかであるが、ほぼ床面に近い位置で出土している。1は須恵器の蓋で、天井部は回転ケズリを残し、外面の稜は段に近い古相を呈するものである。これは他例から有蓋高坏の蓋と考えられる。2はほぼ完形の甕で、復元口径11.0cm、器高13.8cmを測る。3は土師器の甑底部と考えられる破片である。これらは溝状遺構1と同時期のものであり、竈の存在は注意しておく必要がある。

段状遺構18（第117図）

溝状遺構1の西側下方で検出されたもので、大半は後世の削平により消失している。平面はほぼ方形を呈すようで、規模は南北3.05mを測り、壁溝、貼り床も認められる。

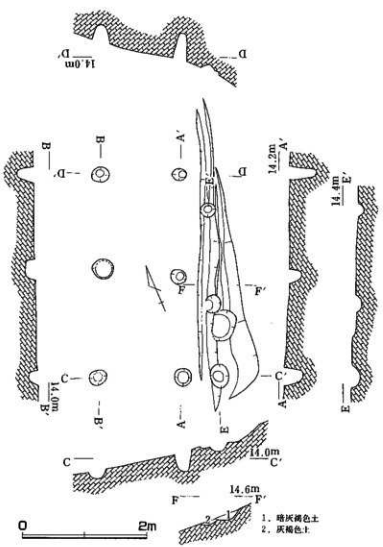
明確な時期の分かる遺物は出土していないが、堆積土の状況や、位置関係から溝状遺構1と同時期と考えている。

以上の点から、溝状遺構1と段状遺構17・18が関連する可能性が強いものと考えている。この点については同様な遺構群である溝状遺構2段状遺構19の項であらためて検討する。

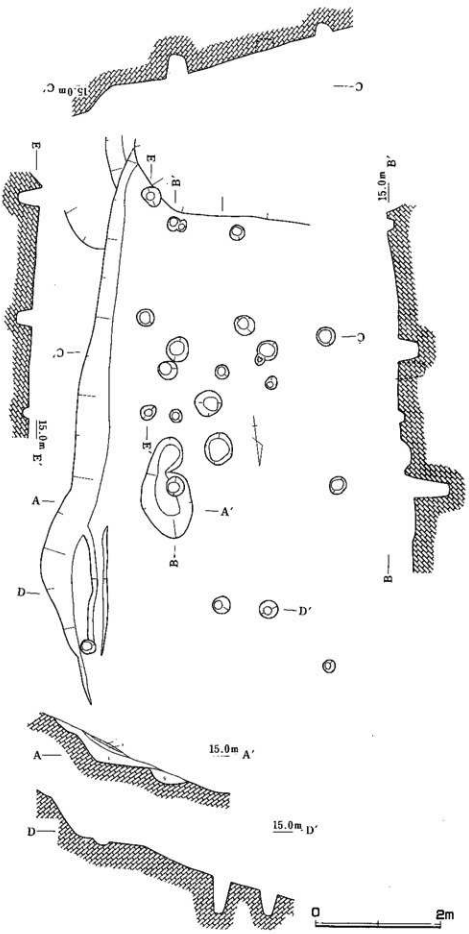
建物9（第118図）

丘陵裾部に位置し、柱穴と壁溝の一部が検出され、1回の建て替え痕跡が認められる。柱穴配置は当初は1×2間（1.3×3.2m）で、建て替え後も同様な配置と推定している。斜面の傾斜から、西側にさらに伸びる可能性は少ないものと考えている。柱穴は径30cm以下の小型のものがほとんどで、桁行きの中間柱は一段浅い点が特徴といえる。壁溝は当初は柱穴からやや離れた位置に配されているが、建て替え後は柱穴に接する構造となっており、注意すべき点である。

遺物は全く出土しておらず、時期決定は困難であるが、位置関係から7世紀前半のものと推定している。



第118図　五反田遺跡　建物9（1／60）



第119図　五反田遺跡　建物10（1／60）

建物10（第119図）

前記した建物９と同様の丘陵裾部に位置するものである。後述する建物11と重複して検出されており、これとの前後関係は土層関係からは不明である。柱穴配置は明瞭とは言えないが、南北方向に並ぶものが想定できそうである。また、柱穴は径が30cm以下の小型のものがほとんどであり、この点も建物９と共通する点である。壁溝は一部に認められるが、土層観察用の畦部分（C－C'ライン）では全く認められておらず、このことは建物、あるいは段状遺構がこの部分で重複していることを意味するかもしれない。

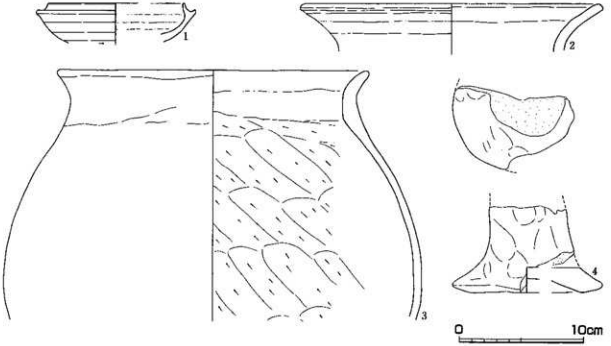
遺物（第120図）は図化できるものが少ないが、ほぼ床面に近い位置で出土しており、この遺構に伴う可能性が強いものである。１は須恵器の坏で、復元最大径12.5cmを測り、底部外面には回転ケズリを残す。２は須恵器の甕口縁部片で、端部は平坦面を持つ。３は復元口径24.5cmを測る土師器の甕で、頸部は緩やかな弧状を呈すタイプである。４は土製支脚の脚端部片で、底面は凹状に作られている。

これらの土器から、この建物の時期は６世紀末～７世紀初頭頃と考えられる。

建物11（第121図）

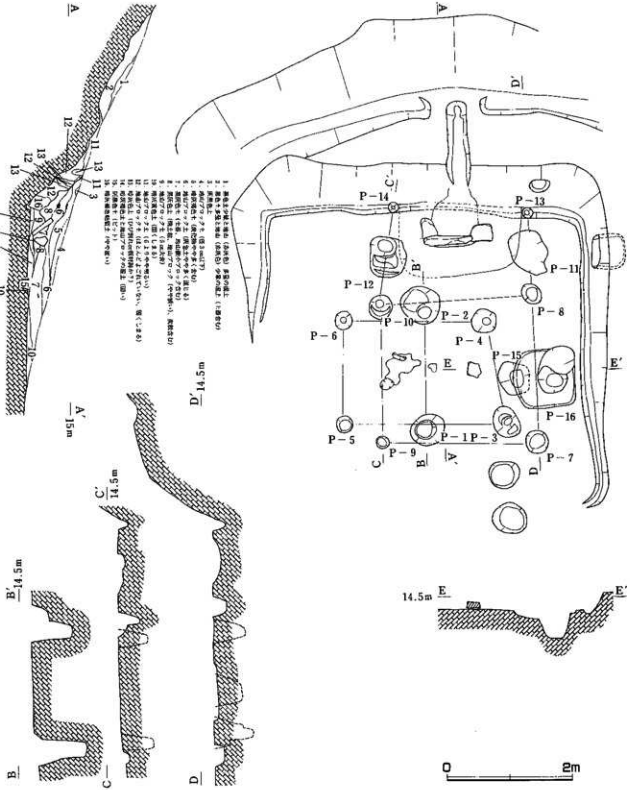
丘陵裾部に位置するもので、いわゆる竪穴住居と呼べる遺構であるが、機能的には鍛冶工房の可能性の強いものである。床面は平面方形を呈し、床面規模は南北5.15m×東西約4.8mを測る。東側の斜面高所には周溝を弧状に巡らしており、西側は流出した部分がある。また、東辺に造り付けのカマドを備えている点が特徴であり、他にも注意すべき施設を備えている。

柱穴配置は３パターンが想定できるが、このうちＰ１とＰ２による二本柱、あるいはＰ３～Ｐ４の四本柱が主柱穴配置と考えられる。これらが同時に機能していたとは考えにくく、１回の建て替えを意味しているかもしれない。また、Ｐ７～Ｐ10は極めて浅い柱穴で、別の建物となる可能性もあるが、カマドの配置とのバランスは良く、検討すべき配置である。この他にも南西側に柱穴が存在



第120図　五反田遺跡　建物10出土遺物（１／３）

するが、これらは調査区外に伸びる建物のものと推定されるものであり、前後関係も明確にできていないものである。このように柱穴配置は建て替えの状況を示しているようにとれるが、壁溝などはその痕跡がなく、通常のあり方とは異なる点が多い。このことは後述するカマドが築造当初には存在しておらず、ある時点で付設され、これに合わせて柱穴配置も変更されたことを意味しているかもしれない。

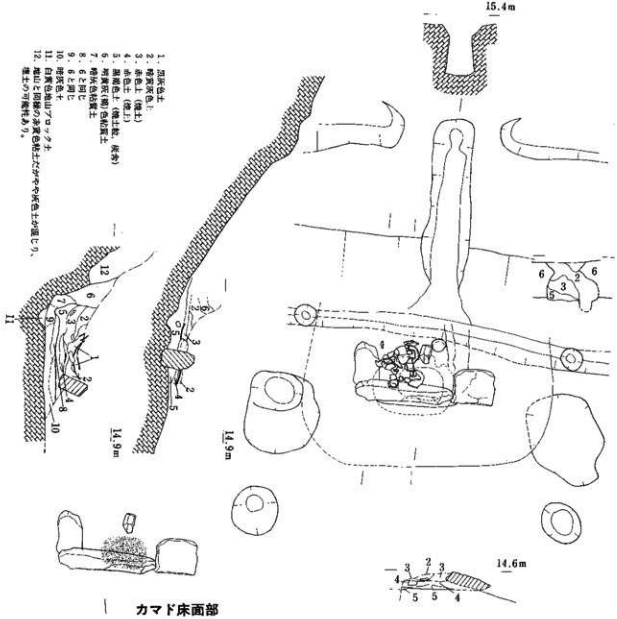


第121図　五反田遺跡　建物11（1／60）

壁溝は流出した部分を除けば全周するもので、後述するカマド下にも存在している。土層観察からこの部分に何らかの壁材が存在し、その裏（外）側には地山に近い粘土が込められていることが判明している。この粘土部分は土圧の関係で、検出時には壁面がオーバーハングした状態となっており、とくに東辺では顕著であった。

周溝は非常に浅いもので、底面レベルは建物床面より0.7m高く、カマドの煙道部分では一段高く造られている。また、溝と建物の間は土手状部分には明瞭な盛土が観察され、この粘土は壁材の裏込め粘土と一体となっているように観察された。

カマド（第122図）は主軸を東西方向に取り、煙道を斜面側、焚口を谷側に向けた状態で、建物東辺の中央よりやや南側に接して造られている。本体部は検出時には崩壊していたが、大型の板状石材３個をコの字状に組み立て、これを芯として構築されている。復元される本体部平面の規模は198cm×125cmを測り、焚き口は幅65cm、高さ約30cmと推定される。燃焼部は床面に粘土を貼り付け



第122図　五反田遺跡　建物11カマド（１／３０）

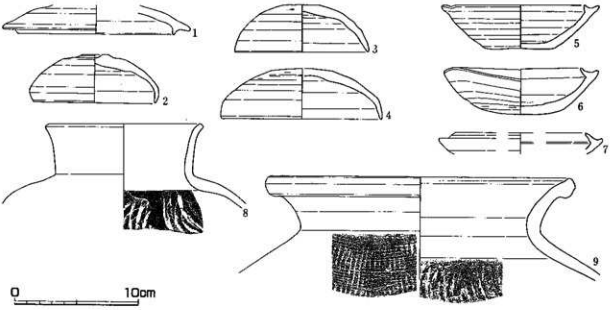
ており、この部分が著しく熱変していた。この粘土床の奥側には柱状の石材を直立させて支脚としている。煙道は断面が長方形に造られており、一旦溝状に掘り込んだ後、蓋をしてトンネル状としていたものと考えられる。煙道と床面の角度は約30度を測り、上端部は緩やかな傾斜に変換している。カマド本体部上には土師甕1個体分、須恵器の蓋、甕がそれぞれ1個体分出土しており、いずれもカマド上に置かれていたものと推定している。

この他に床面や壁面にも通常の竪穴住居では見られない施設が存在する。カマドの南側壁面には幅53cm、奥行き54cmのポケット状の横穴が造られている。床面中央には赤色被熱面や作業台と考えられる石材、そして南辺側には方形土坑が存在し、これらは一見するとか字作業に関連する一連の施設とも考えられるが、現地では明確な物証を得られなかったため、判断するに至っていない。また、カマドの縁辺部にはP11～14のピットが存在し、カマドの両側に壁が存在していた可能性を考えている。

遺物（第123～126）は多量で、カマドに伴うもの以外は大半が堆積土中の出土品であり、直接この建物に伴わない可能性も残るが、時期的にはほぼ同時期のものばかりであり、廃絶時期を示していることは間違いないであろう。

第123図1～9は周溝内の堆積土中から出土したもので、1の蓋のように明らかに新しい時期のものも含まれる。9の甕口縁部片は溝底出土で、体部片も散在していた。

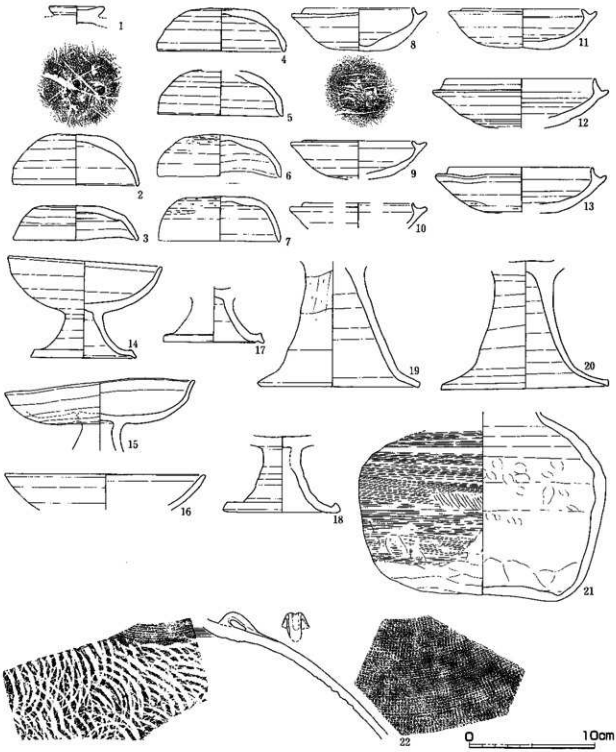
第124図1～22は住居内堆積土中から出土した須恵器で、完形あるいは、完形に近い状態のものが多い。は有蓋高坏の蓋と推定されるものである。2～7は蓋で、いずれも径が10cm前後を測る小型のものばかりである。このうち6、7は回転ケズリが見られる点が注意される。8～13は坏で、径が11cm前後を測るものと、やや大きめのものとがある。14～20は高坏で、短脚のタイプ（14、15、17、18）と、長脚で一見すると土師器の高坏に近い形態のもの（19、20）とがある。21は平瓶体部と考えられるもので、外面にタタキ痕が認められる。22は頸部よりの肩部に環状の取っ手が付くもので、やや薄手の造りである。



第123図　五反田遺跡　建物11周溝出土遺物（1／3）

第125・126図は土師器で、復元が十分できなかったため全形の判明するものは存在しないが、いずれも下膨れタイプの体部を持つものと考えている。

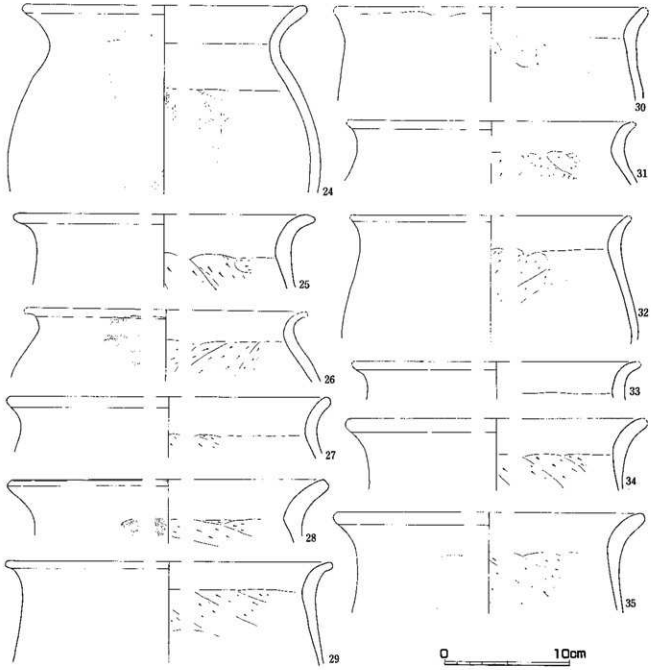
24はカマド上に置かれていたもので、形態や、内面のハケメ調整等、他とやや異なる特徴を持っている点が注意される。39・40・41は甑、42・43は土製支脚、44・45は移動式カマドと考えられる破片である。46・47は土錘で、球形状を呈すタイプである。このうち土製支脚は背面突起を持つもの(42)と、背面に未貫通孔を持つもの(43)とが共存している点が注意される。



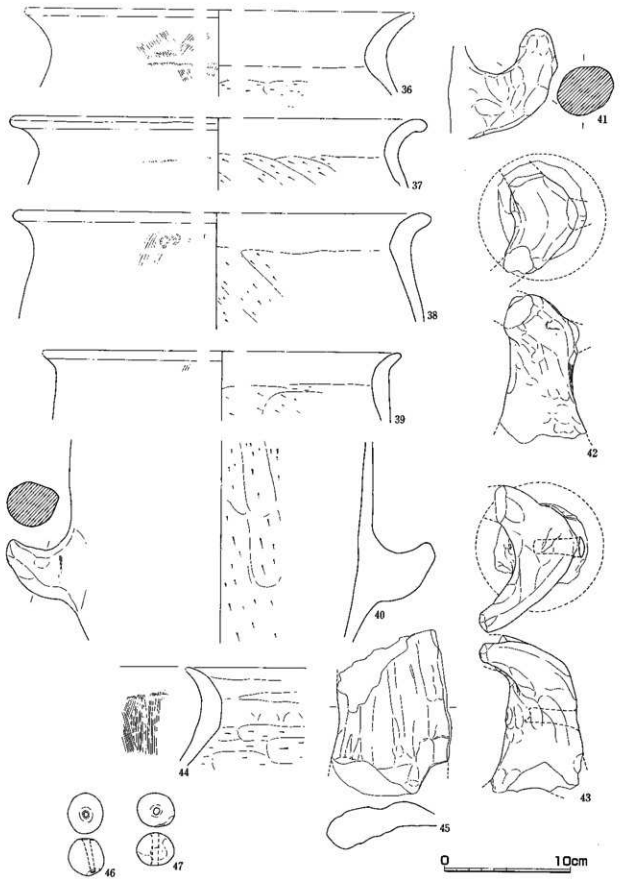
第124図　五反田遺跡　建物11出土遺物①（1／3）

これらの遺物は、ほとんどが同一時期のものと考えられる一括品であり、7世紀前半でも第2四半期にかかるものと考えられるが、摘みが付く蓋が存在しない点など、留意すべき点が多い。また、須恵器に特徴的なものが認められるだけでなく、土師器にも注意すべき特徴を持つものがあることは今後の検討課題である。

このように、この建物は数回の改築を行っている可能性があり、鍛冶工房としての機能も検討すべきものである。さらに山陰の沿岸部では極めて希な造り付けカマドを有している点は、この製鉄集落の出自に関わる重要な問題を提起することになろう。



第125図　五反田遺跡　建物11出土遺物②（1／3）

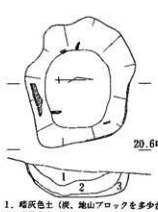


第126図　五反田遺跡　建物11出土遺物③（1／3）

土坑12（第127図）

第Ⅰ調査区の尾根頂部で単独で検出され、製炭窯の特徴を持つものである。平面は隅丸方形を基調としながらやや不整形なもので、規模は98×82cm、検出面からの深さ30cmを測る。堆積土のうち3層は多量の炭化物を含んでおり、一部は原位置を留めている様子であった。壁面には検出当初被熱粘土貼りが認められたが、冬季の調査のため、測量時にはわずかしか記録できなかった。

遺物は全く出土していないが、他例から7世紀の鍛冶集落に関連するものと考えている。

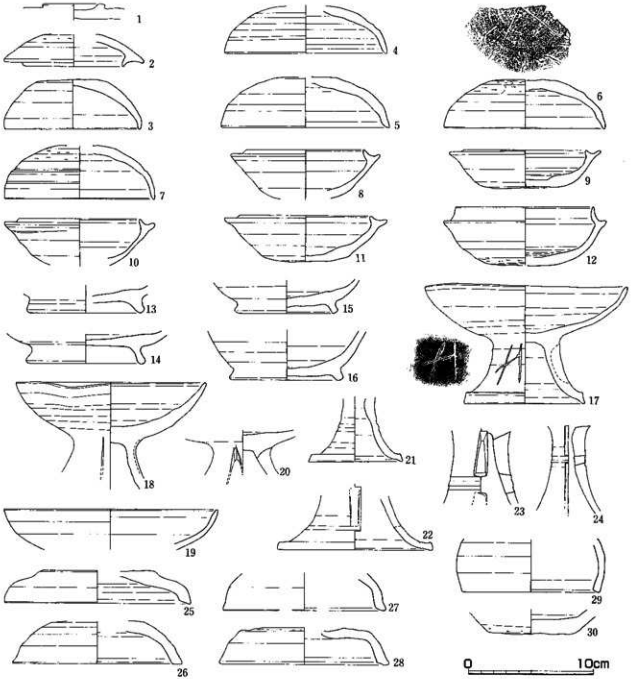


第127図　五反田遺跡
土坑12（1／30）

第Ⅰ調査区包含層出土遺物（第128－130図）

この調査区からは遺構検出に至るまで多数の遺物が出土しており、このうちいくらかは本来遺構に伴う状態であったものを、遺構検出にいたる以前に取り上げたものと考えられる。しかし、中には明らかに包含層、つまり二次的な堆積、あるいは散布状態を呈していたものも多くあり、とくに尾根頂部では遺構がほとんど存在しないにも限らず、七世紀前半を中心とする須恵器細片が少なからず出土している。このことは図示していないが、この尾根上に50cm前後の厚い盛土がほぼ全面に認められていることと関係するかもしれない。この盛土は近代以降の造成土的なものではなく、安来道路調査においてかなり普遍的に見られるものである。時期的には中世、あるいは古代以降のものと考えているが、今回の調査では時期も性格も明確にできなかった。おそらく調査区外の丘陵部を削平した土を運び出したものであろうが、その目的は不明であり、今のところ「道」に関連するものではないかと思っている。また、古墳時代終末期から中世にかけて、丘陵利用の面でこれまで明らかにされていない遺構が多数存在しており、大半のものはこれまでの調査ではほとんど無視されてきている。このいわば一つの分野ともなりうる研究対象については、別の機会に記すことにしたい。

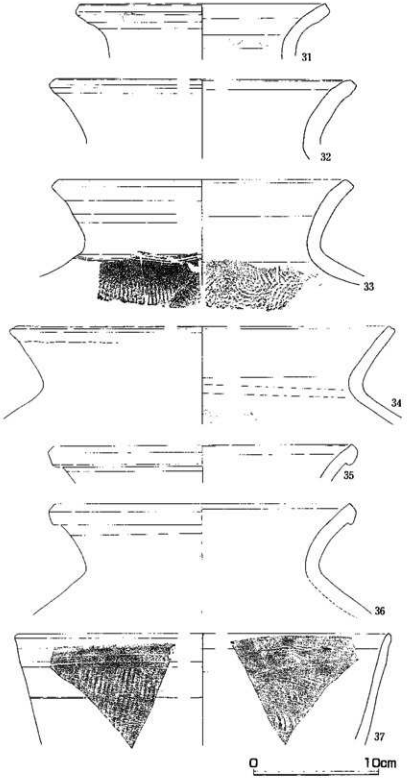
1～16は須恵器の蓋坏類で、輪状摘みを有す1が最も新しい時期のもので、回転ケズリを残す7、6，12などが集落開始期のものであろう。これらの内2は遺構からはほとんど出土していないもので、調査区外にこの時期（7世紀第2四半期～中頃）の遺構が存在することを示しているものと考えている。18～24は須恵器の高坏で、長脚二段で2方向に透かしを持つタイプ（22～24）も認められる。25～29は端部に特徴的な形態を持つ脚部片と考えられるものである。これらは高坏の脚部となる可能性も強いが、長頸壺、蓋、あるいは全く別の器種とすべきもの可能性もある。このうち25，28は天井部に接合痕跡等が認められる。29は端部の特徴から脚部と推定したが、形態からは容器となる可能性もある。



第128図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物①（1／3）

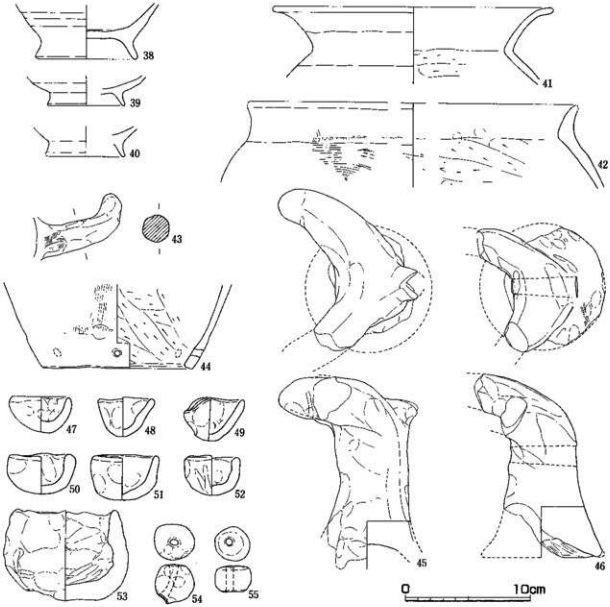
31～36は須恵器の甕口縁部片で、口縁端部の特徴は平坦面を造り出すもの、玉縁状を呈するものの二種が存在する。これらは遺構出土品とほぼ同様な状況と言え、少なくとも35，36は集落開始期のものと考えられる。

37は須恵器の甑、あるいは深鉢で、内面のタタキ痕はナデ消されている。また、外面に横方向の沈線が認められることから、取っ手上端の位置が推定できる。



第129図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物㉒（1／3）

第130図は土師器、及び土製品で、特徴的なもののみ図化している。38～40は坏で、高台の特徴や、胎土から平安時代（10世紀後半～11世紀）のものと推定している。41はくの字口縁の甕、42は移動式カマドの口縁部となる可能性がある。43は取っ手の破片で、鉢あるいは甑のものと考えられる。44は甑の底部片で、水平方向の小孔が6方向に付くものと推定される。45・46は土製支脚で、背面突起を持つものと背面から内面への貫通孔を持つものとがある。47～53はミニチュアの坏で、いずれも手捏ね品である。大きさは口径5㎝前後、器高3㎝前後を測る小型品と、口径9㎝、器高7㎝を測る大型品とがある。54・55は土錘で、球形タイプと円筒状タイプとがある。



第130図　五反田遺跡　第1調査区包含層出土遺物③（1／3）

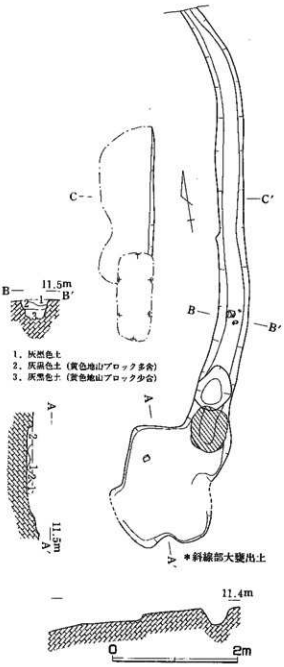
（2）第Ⅱ調査区の遺構・遺物

この調査区ではわずかな遺構と谷部に形成された自然流路の一部を検出している。また、調査区東側、すなわち第Ⅰ調査区から続く丘陵裾部は畑地の造成による著しい削平を受けており、ほとんどの遺構が消滅していると考えられる。自然流路については調査期間内にできるだけ遺物採取を目的とした調査を実施したが、完掘するに至っていない。この自然流路からは調査後の遺物整理により製鉄炉の炉壁が少なからず出土していたことが判明し、谷奥の調査区外に製鉄遺構が存在することは間違いないと判断している。

溝状遺構２、段状遺構19（第131図）

調査区東側に位置し、本来は丘陵裾部の緩やかな斜面部と考えられる場所である。これらの遺構はいずれも畑地造成時の削平を受けており、基底部がかろうじて残ったものである。しかし、前述した溝状遺構１と段状遺構17・18とに極めて近似した配置状況を示しており、これらの遺構が一つの機能を有していた可能性が高いと考えている。溝状遺構２は溝状遺構１と同様に南北方向に緩く弧状を呈し、北端で急カーブする平面形を持っている。南端では浅い皿状の形態となり、内部には約10cmの割石が置かれいた。そして溝との接続部分では一段深く窪んだ土坑状の施設が存在し、この窪み南側の溝南端部には須恵器の大甕（表土除去時に誤って破砕）が安置されており、これらが一体となって機能していたものと考えられる。溝底部は北側に向かって緩やかに下降しており、あえてこれらの機能を推定すれば、皿状部分が何らかの作業空間を、大甕と土坑状の窪みはは水を利用する作業を、溝は排水施設を意味しているものと考えられる。総合的に判断すれば水を使用する作業場的な遺構と言うことになろうが、このことと製鉄（鍛冶）集落との関係は検討すべき課題となる。

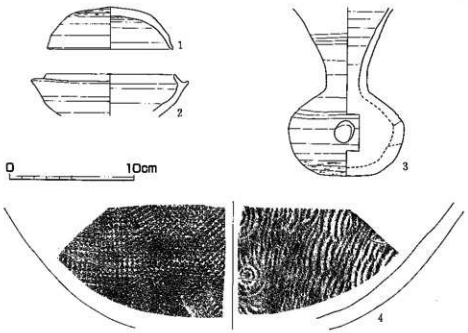
遺物（第132図）は前記した大甕４のほかに、構内より少量の須恵器が出土している。１・２は蓋坏で、外面の回転ケズリが認められる。３は碗で、口縁端部は欠損するがほぼ完形に近いものである。これらは溝状遺構１と同時期と考えられ、碗の存在はこれと同様注意すべき点であろう。



第131図　五反田遺跡　溝状遺構２、段状遺構19（1／60）

段状遺構19は東側を溝状遺構2に囲まれるような位置にあり、基底部がかろうじて検出できたのみである。壁溝については十分に確認できなかったが、存在した可能性もある。規模は南側を後世の攪乱によって、北側は削平によって失われているが、2.7m前後と推定している。

時期は遺物が全く出土していないが、堆積土は溝状遺構と共通しており、ほぼ同時期と考えている。

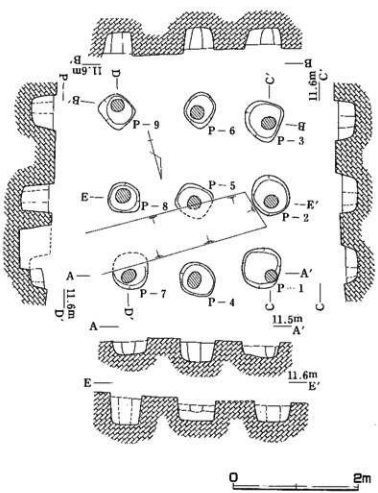


第132図　五反田遺跡　溝状遺構2出土遺物（1／3）

建物12（第133図）

第Ⅱ調査区で最も谷底に近い位置で検出された建物跡で、倉庫と考えられるものである。柱穴配置は2×2間の総柱配置を持ち、規模は東西2.35m、南北2.65mを測り、柱穴堀方は隅丸方形、あるいはこれに近いものが含まれる。柱痕跡が残り、規模は径22cm前後を測る。また、中央に位置する床柱は、土層観察により、一旦柱穴を埋め戻した後に建てられていることが判明している。

遺物は全く出土していないが、柱穴埋土の状況は他と同



第133図　五反田遺跡　建物12（1／60）

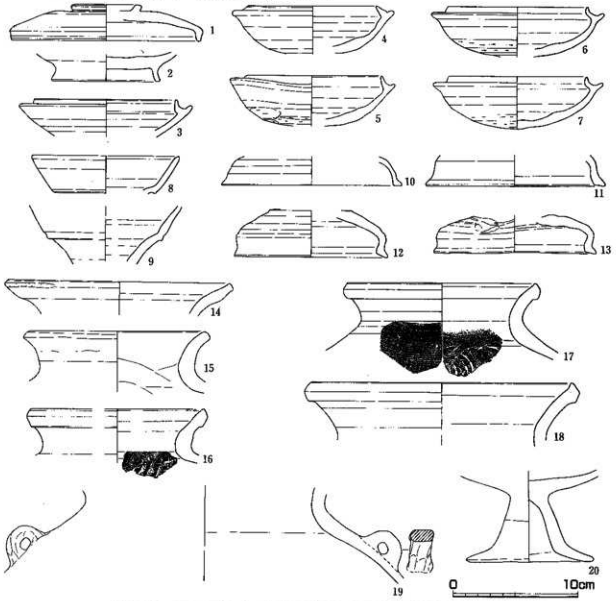
様であり、７世紀代のものと考えて間違いないであろう。

その他の遺構について（第70図）

第II調査区では個別の実測図を載せていないが、この他に土坑13や、建物になりそうな柱穴群が存在する。

土坑13は溝状遺構２の西側で検出された不整形な土坑で、規模は長径245cm、短径120cm、検出面からの深さ約30cmを測るもので、堆積土は大きく３層に分離できた。底面は凹凸が著しいもので、一見すると粘土採掘坑的な形態に似ており、堆積土から人為的に埋められたものと判断している。溝状遺構２との関連も十分考えられるが、遺物も全く出土しておらず、性格、時期とも不明である。

柱穴群のうちとくに建物12の北東側に隣接するものは、柱痕跡も認められ、当初は建物12と同様な総柱建物を想定していたが、堀方自体が削平により極めて浅く、結果的に明確な建物を抽出できていない。また、丘陵裾部付近は著しく削平されており、断片的にやや大型の柱穴が存在する点は、この部分にも建物が存在した根拠となるものである。

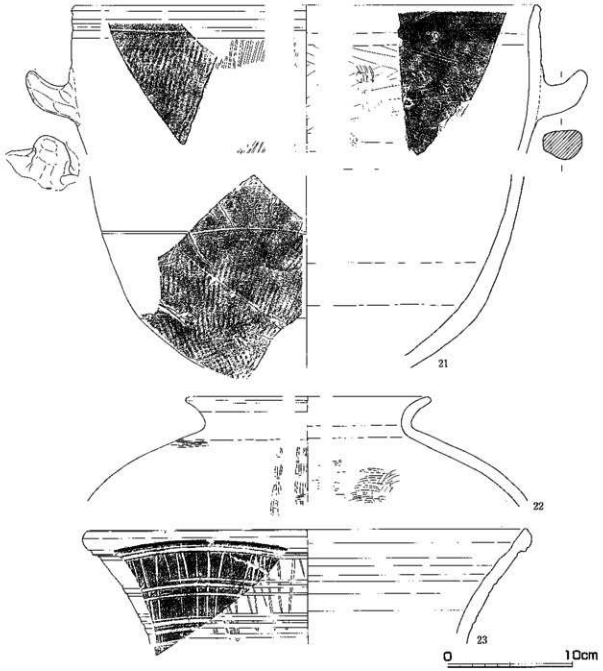


第134図　五反田遺跡　第２調査区包含層出土遺物①（１／３）

第Ⅱ調査区包含層出土遺物（第134・135図）

第Ⅱ調査区では、東側丘陵裾部を削平し、西側谷部を埋める畑地造成が行われている。このため、東半部では遺物は細片がわずかに出土したのみであるが、西半部では造成土下に遺物包含層（大半が自然流路内）が残存していた。図化したのはこのうち特徴的な須恵器のみであり、土師器については割愛した。これらは概ね第Ⅰ調査区出土須恵器と同時期のものであり、7世紀第2四半期頃の遺物が見られない点も共通する。また、10～13のように端部が特徴的な脚部片や、19・20・21・23のような特徴的な一群の存在も注意される。

これらは製鉄炉の炉壁片と伴に出土しており、この集落の性格を色濃く反映しているものと言える。



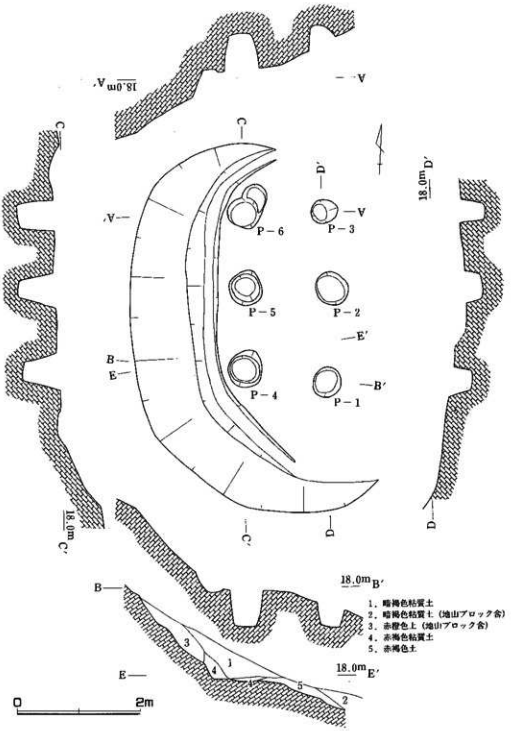
第135図　五反田遺跡　第2調査区包含層出土遺物②（1／3）

（3）第Ⅲ調査区検出の遺構・遺物

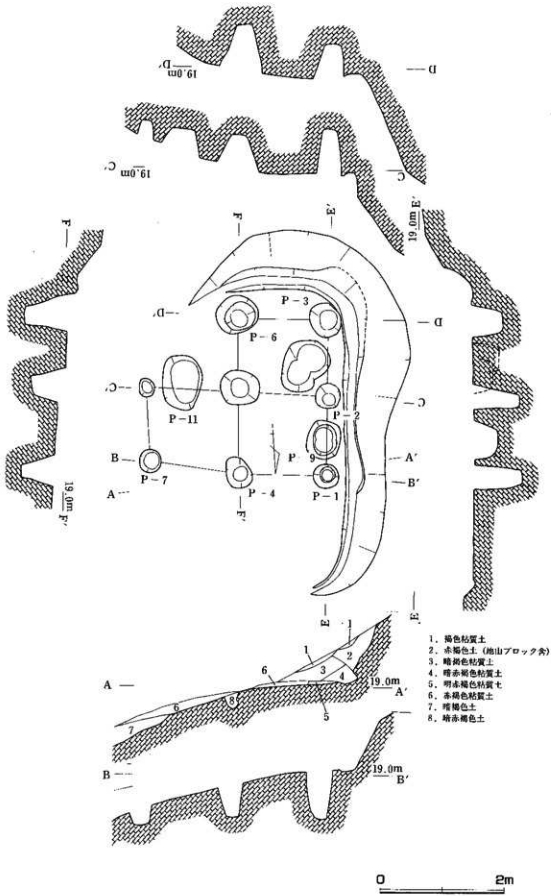
この調査区では東側斜面を中心に遺構が検出されており、第Ⅰ・Ⅱ調査区で検出されたものとは時期が異なる様子が窺えた。

建物13（第136図）

東斜面北端に位置する1×2間（1.3×2.5m）の建物で、伴う加工段は緩やかな弧状を呈している。柱穴堀方は径が45cm前後を測るやや大型なもので、壁溝との最短距離は50cmを測る。建物と加



第136図　五反田遺跡　建物13（1／60）

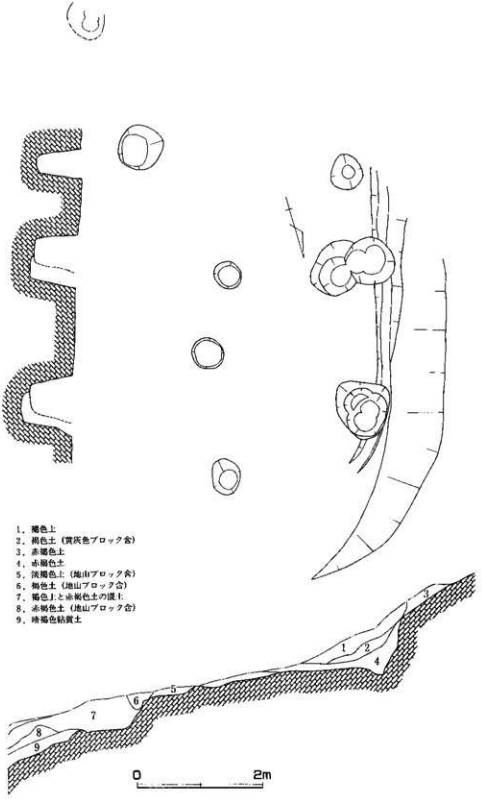


第137図　五反田遺跡　建物14（1／60）

工段床面との配置関係から南側に入口、あるいは作業空間を有していたものと推定している。 図化できた遺物（第139図）は高台付き坏の底部片で、7世紀第3四半期頃と考えられる。

建物14（第137図）

建物12の南側高所に隣接する2×2間（2.9m×2.5m）の総柱建物で、平面コの字状を呈する加



第138図　五反田遺跡　建物15（1／60）

工段・壁溝を伴う。また、この建物とは異なる柱穴が存在するが、明確な配置は抽出できていない。柱穴堀方はやや小型のものが多く、床柱は一段浅いものとなっている。建物は壁溝に接し気味に配置され、北側に何らかの機能を有した空間が存在する。なお、壁溝部分の土層観察から、土留め用板材の存在を想定している。

遺物（第140図）は1が床面からやや浮いた堆積土中から、2が柱穴P－2付近から出土したものである。1は口径15.7cm、器高5.3cmを測り、底部外面に「×」のヘラ記号が認められる。2は平瓶で、口径8.4cm、頸部高7.6cmを測り、中程に沈線1条が巡る。

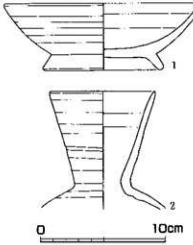
これらの須恵器から本建物は7世紀の第3四半期頃と考えてよいであろう。

建物15（第138図）

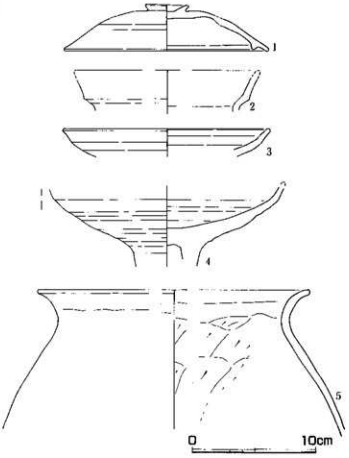
東斜面南端に位置し、調査区内で一部が検出されたものである。柱穴配置は明確でないが、堀方の規模や、調査区外に続く加工段の大きさから、かなり大型の建物が想定される。また、壁溝沿いの柱穴は2回の建て替え痕跡を残している点も注意される。

遺物（第141図）は堆積土中から1，2が、柱穴内から3，4が、壁溝内から5が出土している。1は輪状摘みを持つ須恵器の蓋で、口径16.4cmを測る。2は土師器甕口縁部片で、古墳時代前期末のものとの推定している。3，4は須恵器の高坏片で同一個体の可能性もある。

第138図　五反田遺跡　建物15出土遺物（1／3）



第140図　五反田遺跡建物14出土遺物（1／3）



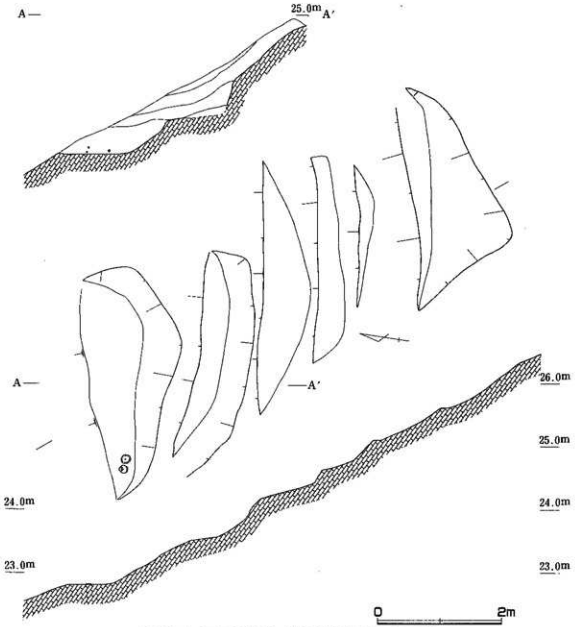
第141図　五反田遺跡　建物13出土遺物（1／3）

これらの出土遺物から、この遺物は7世紀第3四半期を中心とする時期と考えている。

階段状遺構（第142図）

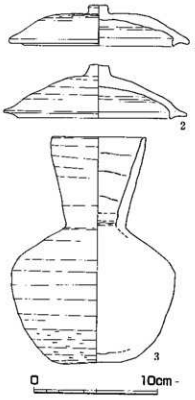
調査区北側の急斜面に位置し、小規模な段状遺構が階段状に連続するものである。個々の加工段はいずれも平面が緩やかな弧状を呈し、一部の土層観察（A－A'ライン）からはこれらが同時に機能していたものではなく、下方から順次斜面上方に向かって造り替えられているように見える。

遺物（第143図）は最下段の床面西端部から、須恵器の完形品3点がまとまって出土している。このうち1についてはトレンチ調査時に取り上げたため明確な出土位置は不明である。1 2 はほぼ同タイプの摘付き蓋で、口径はそれぞれ12、14.8cmを測る。2は器高18.1cmを測る長径壺で、体部下半は回転ケズリ調整である。これらの遺物は7世紀第3四半期のものと考えられ、この遺（群）



第142図　五反田遺跡　階段状遺構（1／60）

の築造当初の時期を示していると判断している。性格については不明と言わざるを得ないが、通常の段状遺構とは形態が異なる点、集落からやや離れた急斜面に立地する点、遺物の出土状況などから見て、何らかの祭祀的行為の場と考えてよいのではないだろうか。

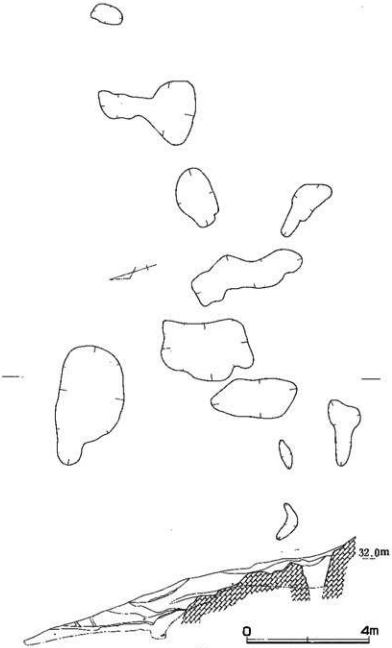


第143図　五反田遺跡
階段状遺構出土遺物（1／6 0）

坑道状遺構（第144図）

調査区北向き斜面の上方で検出されたもので、当初は加工段と認識して調査を実施したが、極めて不自然な堆積状況が認められ、最終的にトレンチにより坑道状遺構の陥没痕跡と判断した。この坑道状遺構は本書掲載の山ノ神遺跡等でも検出されており、今のところ性格不明なものである。調査は山ノ神遺跡と同様な理由からトレンチ調査のみを行い、完掘は断念した。

遺物は図化していないが、7世紀後半頃の須恵器や土師器片等が出土しており、陥没以前の遺構の存在を示しているのか、丘陵高所に別の遺構が存在するのか判断できていない。



第144図　五反田遺跡　坑道状遺構（1／2 0 0）

第3節　小　結

五反田遺跡では古墳時代終末期（7世紀代）の遺構を中心に、古墳時代前期末、そして平安時代前半頃と推定される少数の遺構が検出された。ここでは簡単に総括を行い、問題点（今後の検討すべき事項）を明確にしておきたい。

（1）古墳時代前期末の竪穴住居（段状遺構13）について

①丘陵裾部に単独で立地する点

この時期の集落は、これまで丘陵部での調査例しかなく、土器形式の問題とも関連する。

②壁際土坑の存在と5世紀型竪穴住居の出現期の問題

県内の壁際土坑は少なくとも5世紀代の竪穴住居には見られ、最古例になる可能性がある。また、機能の問題については、底部に粘土の水性堆積が認められることが注意される点である。

③出土土器の時期の問題

甕は口縁部が非常に退化したものとなっているが、胎土や焼成はいわゆる小谷式のものと共通し、これの最終段階の状況を示している。高坏は小谷式の中では新しい要素を持っているが、次の時期のものとは異なる。土器型式の過渡期の現象を考えるうえで、丘陵部出土の小谷式土器の検討が必要である。

（2）古墳時代終末期の集落について

①出土土器の編年と集落変遷の問題

出土した須恵器は（6世紀末～）7世紀初頭から7世紀末（～8世紀初頭）頃に比定でき、各時期毎に集落が移動する様子が判明している。また、周辺部の他の遺跡群全体から見た場合、6世紀後半頃から8世紀にかけて、集落の移動現象がある程度解明できる可能性がある。

②製鉄関連遺構・遺物について

周辺部の遺跡からも少なからず製鉄関連遺構・遺物が検出されているが、この遺跡の場合特に集中して発見されている。これらが集落の部分的性格なのか、全体の性格なのかが解明すべき点となろう。また、製鉄炉が調査区南の谷奥に存在することはほぼ間違いないようで、製鉄から鉄器の製作・補修を行っていたかどうかも検討すべき点である。

③特殊な遺構・遺物と地域性について

造り付けカマドの存在や、竪穴住居の廃絶期については、出雲東部の沿岸部としては今のところ特異な現象として位置付けられ、須恵器についても7世紀初頭までは、松江市周辺部のものとは大きく異なり、むしろ畿内編年の中で理解できるものが多く存在していることは重要な点となろう。この点は製鉄関連集落の構成員の出自とも関連する重要な問題である。

第6章　考　察

本報告では安来市吉佐町に所在する山ノ神遺跡、五反田遺跡の二つの遺跡を紹介してきたが、ここでは相前後して調査した周辺部の遺跡も含めての考察を試みたい。もちろん検討すべき事柄は多数あり、かつ問題を解明することはできていないが、少なくとも今後の研究に向けての方向性、あるいは視点を提供できるものと考えている。

第1節　弥生時代中期後葉の土器について

山ノ神遺跡では、これまでの編年観（註1）で弥生時代中期後葉とされる一群の土器が出土している。これらは明確な遺構に伴うものが少ない点や、大半が細片化していることなど、資料的価値は高いとは言えないかもしれない。しかし、この時期の県内資料は絶対数が多いとは言えず、土器編年上の位置づけをどうすべきか、少し整理する必要があるだろう。以下ではこの点をふまえて、大雑把であるが、他の遺跡例との比較も含めて検討したい。

（1）遺跡内編年作業と仮説

ここでは今後編年作業をするうえでの暫定的な仮説、方法論を提示したい。まず、山ノ神遺跡出土土器全体を一つの大きな時期（以下では便宜的に「山ノ神期」とする）の所産としたい。これについては空白期を含まないことが前提条件となろうが、今のところ連続した土器型式の流れと判断している。また、最終的にはこの遺跡の存続期間という重要な意味を持っているため、その意味でも有効であろう。

次にこれらの土器群をどう細分するかであるが、ここでは細かな型式分類は行わない（数量的にもできない）ことにしたい。また、個別遺構の一括（的）遺物も混入品を含む可能性を検討する余地を残しておきたい。よって、細分案は時期区分とはせず、「相」あるいは「段階」的なものとする。細分は各資料の観察を行った後、相互に比較する方法であり、いわば「引き算」の繰り返しとでも言うべき方法によった。よって、その意味においても、通常行われる細かな型式分類は行っていない。

山ノ神期A相

土坑2出土品（第44図）によって仮提示できるものである。小型の甕は口縁部端面に1～2段の凹線を巡らし、わずかながら上方に拡張している。また、口縁部径は体部最大径に比してまだ大きく、明確ではないが体部内面の下半は縦方向のケズリと考えられる。壺は頸部にまだ貼付突帯を残すものがあり、口縁部については次の段階と変わらないようにも見える。

山ノ神期B相

土器溜まり（第56・57図）出土の一括性の高いもので、小型甕は、口縁端部が上方、あるいは上下への拡張が明確となり、外面に3段の凹線を巡らす。体部内面は下半に縦方向のケズリ、上半に凹凸痕跡とハケメ、あるいはナデ調整が見られる。大型壺は頸部下半に凹線を巡らし、口縁部はやや屈曲気味に開くタイプが存在する。小型の無形壺は通常とは異なり、口縁部は拡張せず、内面にはこの時期には通常見られない横方向のケズリが存在する点は注意される。高坏は1点のみである

が、口縁上端部は一条の凹線を巡らし、脚端部はやや拡張し、外面に２段の凹線を巡らす。

山ノ神期Ｃ相

段状遺構10出土品（第38図）で提示できるものである。甕は、口縁端部の拡張がさらに進み、いわゆる折り返し口縁を呈するものが認められる。体部径に対して、口縁部径はさらに縮小する可能性があり、最大径もやや上昇している可能性がある。高坏は１点であるが、口縁部は大きく拡張し、口縁屈曲部外面の凹線は沈線状に退化したものとなっている。また、通称ネクタイと呼んでいる甕頸部の連続刺突文帯も、退化したものが認められる。

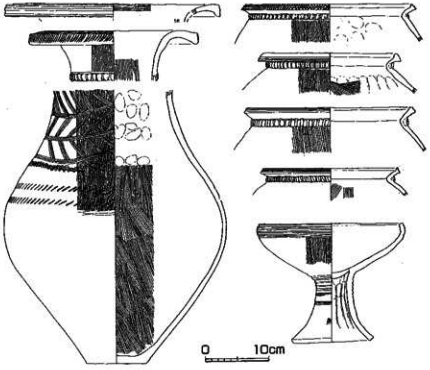
このように中期後葉と考えられる一群を、三つの相に分けることが可能であるが、土坑１出土品（第40・41図）のように一見すると、Ａ相とＣ相の混在を示すものがある。実際に混在を示しているのか、あるいは過渡的な状況を示しているのかは資料が少ないために判断できないが、これらをさらに注意深く観察し、それぞれがＡ相とも、Ｂ相とも微妙に違う点が確認できれば、もう一つの新たな相を設定すべきことになる。ここで抽出した各「相」が、時期区分としての「期」にまで昇華できるかは、次項の作業が必要不可欠であり、その作業の後にあらためてこの遺跡の変遷を知ることができるはずである。

（２）遺跡外を含めた編年作業用の仮説

遺跡内資料では、上記した程度の作業である程度通用するだろうが、やはり混入品の可能性や器種構成の問題などは明確にできない。さらにより広域（例えば出雲部）に通用する編年となれば、これらの遺跡毎の作業の繰り返しが必要となるのは当然であろう。また遺跡間での「引き算」や、各遺跡の相がどのような関係を持っているかを、常に念頭に置いて観察する必要もあろう。また、細かな型式分類の作成など、土器型式をデジタル化することはある程度有効となろうが、遺跡の継続性の問題や、型式が一人歩きする問題などが生じ、時には大きな混乱を招くことになる。以下では、この仮説を中心に据えた場合、今後どんな課題が生じるのかを記しておきたい。

中期中葉の土器群との問題

出雲部で通常この時期に当てられる資料は出雲市の天神遺跡（註２）や、松江市の西川津遺跡（註３）、布田遺跡（註４）などの資料がある。これらの遺跡は今のところ大規模な平野部の微高地上や、旧河川周辺などに立地しており、このうち天神遺跡のものは最も古相を呈するものである。これらのうち布田遺跡



第145図　布田遺跡出土中期後葉土器

では緻密な型式分類が行われており、中期では中葉に続く「後葉」の資料が分離されている（第145図註5）。しかし、この土器群はこれに後続する他遺跡の後葉の土器群との差が曖昧（布田資料では、口縁部の回線文は大型の壺・甕には見られるが、小型の煮炊き甕には見られないようである）で、一部に混乱を生じている。例えば、布田遺跡での弥生時代中期集落の廃絶時期と山ノ神遺跡、あるいは石台遺跡（註6）の中期後葉集落の開始期とを比較するうえで、この「後葉」土器についての検討が不十分なまま、一つの様式設定がなされる点が指摘できる（註7）。よって、一遺跡内で設定された型式はあくまでもその遺跡内で使用すべきで、より広域な編年作成では、その型式使用について相当の注意を要すべきである（註8）。個別資料の検討は十分行っていないが、丘陵縁辺部に展開することの多い中期後葉集落出土の土器と、平野部で展開する中葉～後葉集落（出雲西部平野の場合は別の視点が必要だが）の出土土器は、前後関係が存在していることを仮定して編年作業したほうが、より有効であると感じている。

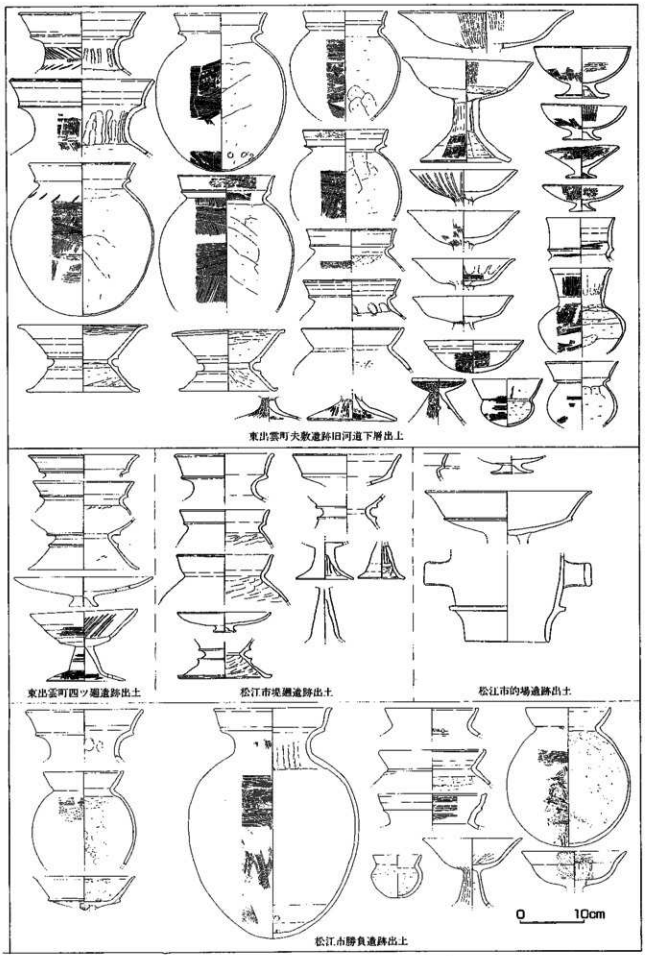
第2節　古墳時代前期末の土器について

五反田遺跡段状遺構13から出土し、図化できた土師器はわずか2点であるが、大きな問題を持つ資料と考えられるため、ここではその位置付けを試み、同時に当該期の土器編年をするうえで、前節同様の問題を提起したい。

まず五反田遺跡の資料（第103図）であるが、甕は胎土や色調は前代の特徴を引き継ぐが、口縁部が著しく退化している。高坏は小型で、脚部内面の円盤充塡は、中心に径2㎜の刺突痕が認められる。これらの特徴は、古墳時代前期でも比較的新しい時期のものとされる夫敷遺跡下層出土品（第146図上段、註9）に比して、甕はより退化、高坏はほぼ同様なものと言える。この夫敷遺跡は平野中央部に立地するものである。では、丘陵部に立地する遺跡で、前期後半から中期初頭とされる資料（第146図中・下段、註10）と比較すればどうであろうか。まずこれら丘陵部出土資料を見ると、甕は口縁部が退化、あるいは短小化するものが多い。高坏は坏部に突帯や稜が見られるものが多く存在し、脚部は短小化、あるいは脚注部が細長いものが存在し、他資料では坏部が非常に小型化したものも認められる。五反田遺跡出土の甕は類例が乏しいが、退化・短小化という点ではこれらと共通する。逆に高坏はこれらの資料にはほとんど見られず、この点においては夫敷遺跡例に近い。

また、この五反田遺跡の住居は壁際土坑を持っており、弥生時代住居と大きく異なる点である。この壁際土坑の発生については、十分検討をしていないが、近隣の青木遺跡ではⅤ・Ⅵ期（古墳時代前期）から出現することが指摘されている（註11）。しかし、このⅤ・Ⅵ（～Ⅷ）期の土器はどう見ても古墳時代前期前半にまで上がるものではなく、前記した丘陵部遺跡に伴うものと同時期と判断される。つまり、丘陵部に立地する青木遺跡では、通常平野部で検出される資料が見られず、集落変遷において大きな空白期（現在の時期区分で弥生時代末から古墳時代前期前半頃）が存在していると考えられる。

五反田資料はわずか2点であり、これだけをもって時期を決定することは困難である。しかし、上記した点を考慮すれば、この資料は夫敷遺跡以降の土器編年を解く鍵となろう。それは、丘陵部出土の当該期の高坏に顕著に現れている。つまり、遺跡単位で高坏のタイプが異なることが多い点や、器種構成のうえで高坏が占める割合などの点である。このことは、弥生時代後期中葉に完成し



第146図　出雲東部古墳時代前期後半～中期初頭土器

たいわゆる山陰的な土器様式の崩壊現象を示していると考えられ、その意味で一つの「時期」と捉えることもできよう。しかし、この現象が同じ山陰でも地域ごとに異なる可能性が強く（註12）、さらに検討する必要を痛感する。

第3節　古墳時代後・終末期集落の移動について

以下では山ノ神遺跡、五反田遺跡、そしてその間に位置する徳見津遺跡、目廻遺跡（註13）について、集落の変遷を検討してみたい。なお時期決定については出土須恵器を目安としたが、須恵器自体の編年が目的ではないため、その分類は暫定的なものであり、土器自体よりはむしろ遺構の立地を重視しながら判断した。

Ⅰ期：6世紀中葉～第3四半期頃（陶邑編年ＴＫ10～43平行期）（註14）

集落の開始期であり、出現箇所はＸ地域（山ノ神遺跡・徳見津遺跡Ⅰ～Ⅱ区）であり、建物は無柱穴の小型竪穴住居が多く見られ、谷低位部に立地する傾向が見られる。建て替えも多く、続くⅡ期の遺構との区別がはっきりとしないものも多い。須恵器蓋は口径が14～16cmを測る大型のものが多く、少数だが胎土に砂粒を少量しか含まず、焼成良好なものが認められる。

Ⅱ期：6世紀第4四半期頃（陶邑編年ＴＫ43～209平行期）

Ⅰ期と同様、Ｘ地域で展開するが、丘陵のやや高所に移動しているようにも見える。建物は掘立柱建物の他、4本柱の竪穴住居が見られるが、小型で無柱穴のものは消失している可能性もある。徳見津Ⅲ区で鍛冶遺構が、山ノ神建物1覆土中に鉄滓が認められる。須恵器蓋は口径が12～13cmと小型化し、外面の稜や、口縁端部内面の処理は退化しながらも存続している。

Ⅲ期：6世紀末～7世紀初頭頃（陶邑編年ＴＫ209平行期）

この期の遺構は、Ⅰ・Ⅱ期の集落とは別のＺ地域で検出されている。立地は丘陵裾の低位部で、建物は小型無柱穴竪穴住居や掘立柱建物が認められる他、溝状遺構や、多数の鍛冶炉が存在する。須恵器蓋は口径が12cm以下のものが多く、天井部回転ケズリの範囲がより縮小する。外面の稜は消失し、丸みを帯びる器形となり、口縁端部は丸く仕上げられるものばかりである。

Ⅳ期：7世紀第1四半期頃（ＴＫ217・飛鳥Ⅰ平行期）

引き続きＺ地域で継続するほか、Ｙ地域で新たに展開する。Ⅲ期同様丘陵裾部に立地し、建物は掘立柱建物の他、カマド付竪穴住居も見られる。鍛冶炉も検出されているが、明確な溝状遺構は確認されていない。須恵器蓋は径11cm前後で、回転ケズリはほとんど見られない。またこの時期から、須恵器は胎土に砂粒を少量しか含まないものが主流を占めるようになる。

Ⅴ期：7世紀第2四半期頃（飛鳥Ⅱ平行期）

この時期の遺構はＹ地域でのみ確認されているが、土器自体はＺ地域やＸ地域でわずかながら確認されており、調査区外に存在する可能性が強い。このように、この時期の遺構は広範囲に拡散、あるいは拡大する可能性があり、丘陵の高所に立地する点も注意される。建物は掘立柱建物が主流のようである。鍛冶炉は検出されていないが、調査区外で引き続き存続しているものと考えている。須恵器蓋は10cm前後に小型化し、つまみを有するものが出現する。

Ⅵ期：7世紀第3四半期頃（飛鳥Ⅲ平行期）

Ｙ・Ｚ地域で多数の遺構が検出されており、Ｚ地域では谷部両側の斜面部で建物等が出現する。

建物は圧倒的に掘立柱建物が多く、これに簡略な建物と推定される段状遺構が伴っている。また、造り付けカマドを持つ無柱穴？竪穴住居も存在し、鍛冶炉も引き続き作られているものと考えられる。須恵器蓋は径が拡大し、輪状摘みを持つものも出現している。

Ⅶ期：7世紀第4四半期～8世紀初頭頃（飛鳥Ⅳ・Ⅴ平行期）

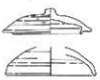
この期の遺構はＹ・Ｚ地域で認められ、丘陵斜面部でも比較的高所に展開しているようである。建物はやや大型の掘立柱建物が見られる他、段状遺構も多く存在する。須恵器蓋は輪状摘みを持ち、内面のかえりが消失するもののみで構成され、径も大型化している。

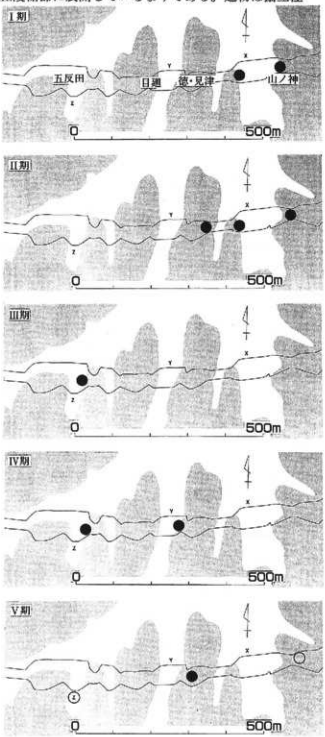
Ⅷ期：8世紀第2四半期以降

Ｙ地域のみで遺構・遺物が確認されており、丘陵裾部に展開しているようである。建物は掘立柱建物と推定され、竪穴住居は確認されていない。蓋はほとんど見られなくなり、坏・皿底部外面に回転糸切り痕を残す。

以上集落変遷等を概観してきたが、限定された調査範囲の中での考察であり、集落の移動を正確に示すことはできていないであろう。しかし、谷部に堆積した遺物も考慮しており、ある程度実体を反映しているものと考えている。

上記したことを考慮しても、以下のことは注目すべき現象として上げておきたい。最も大きな画期はⅡ期とⅢ期の間にあり、集落の大きな移動を示しているものと考えている。このことはⅡ期とⅢ期

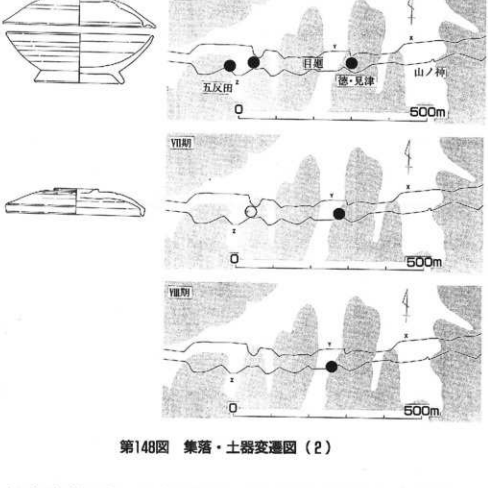




第147図　集落・土器変遷図（1）

では、鍛冶作業の規模を反映する出土鉄滓量の違いにも関連し、次節であらためて検討したい。また、集落構造的には掘立柱建物と竪穴住居の関係が問題となろうが、遺構の時期が明確でないこともあり、今後に問題を残している。

次に注意しておきたいのが、Ⅴ期の集落立地についてである。この期の建物はわずかに確認されたのみであるが、徳見津遺跡Ⅳ区のように丘陵最高所に移動しており、同様の現象は近隣の平Ⅱ遺跡においても認められる。まだまだ類例は少ないが、松江市周辺の状況（註15）とは異なり、今後検討すべき問題である。また、同時に集落の拡散が生じていると見ることも可能であり、当該期の古墳（横穴墓）の築造時期とも絡む重要な問題と言える。



第148図　集落・土器変遷図（2）

集落の終わりについては、Y地域で9世紀の祭祀的な遺構が検出されている他は確認できておらず、このことは当地域での古代鉄製産集落の継続期を考えるうえで一つの目安となるであろう。

この他にも留意すべき点として、X地域以東の集落との関係が上げられよう。この地域は少なくとも奈良時代から現在まで県境（国境）となっており、鳥取県側でも7～8世紀の製鉄関連遺跡が集中して見つかっている。この点については後述するが、島根県側でもこれまでにカンボウ遺跡、石田遺跡(註16)、平Ⅰ遺跡(註17)、平Ⅱ遺跡(註18)など当該期の集落が発見されており、鍛冶滓や羽口、造り付けカマドを持つ竪穴住居なども検出されている。この一体では同時期の横穴式石室や、横穴墓群なども集中しており、その位置的性格を反映している可能性もあろう。また、山ノ神遺跡以東、平Ⅱ遺跡以西では古代の平瓦が少なからず出土しており、おそらく平Ⅰ遺跡周辺でこれに関連する建物、あるいは瓦窯が存在しているものと推定される。この瓦は叩きの特徴から7世紀まで上がる可能性もあり、とすればこれら集落の変遷と関係することとして検討すべきかもしれない。

最後に前代（5世紀）の集落についてであるが、この時期の建物として確認されているのは、上記したカンボウ遺跡、平Ⅰ遺跡などでわずかに認められる。このことはこの時期の古墳が少ないこ

とと合わせ、6世紀代になって爆発的に遺跡数が増えていることを暗示させ、製鉄集落の出現と合わせて注目すべき点であろう。

第4節　出雲東部の古墳時代終末期における鉄生産について

今回報告した五反田遺跡では、県内では最も古い時期の製鉄関連集落であることが判明した。以下では類例が増えつつあるこの種の遺跡について、若干ではあるが気が付いた点を記しておきたい。

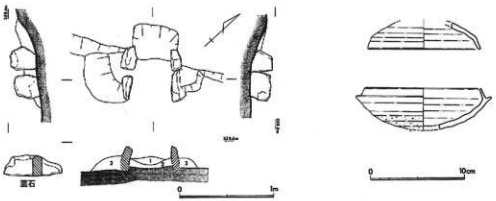
当地域の古代鉄製産については、すでに穴澤義功氏により予察（註19）が行われている。この中で特に重要な指摘は、山陰地域も山陽地域や北九州地域とほぼ同様の動きをしていること、山陰側の砂鉄資源の位置付けがなされたことであろう。このことは現在でも基本的に変わらないが、最近の新知見を元に特に出雲東部地域の現状と見通しを述べてみたい。

県内で最も古い製鉄遺跡は石見山間部の今佐山遺跡（註20）で検出された製鉄炉とこれに関係する集落である。この遺跡では箱形炉の下部構造と製錬滓などが検出されており、炉の周囲で検出された竪穴住居では、6世紀末の須恵器（第149図）と伴に製錬滓、そして造り付けカマドが検出されている。このカマドは五反田遺跡建物11と同様、石材を骨格としたタイプであり、須恵器の特徴も五反田遺跡開始期のものとほぼ同様、同時期と考えられる。このことを持って直接的に両者が関係するものとは言えないが、中国地方での製鉄遺跡の開始期の現象の一つとして注目すべき点であることは間違いない。さらに誤解を恐れずに言えば、このことは山陽沿岸部とは異なり、中国地方山間部と山陰沿岸部に共通する現象として認識すべきと考えている。その意味において、中国地方山間部の果たした役割に一つの焦点を置く必要があろう。

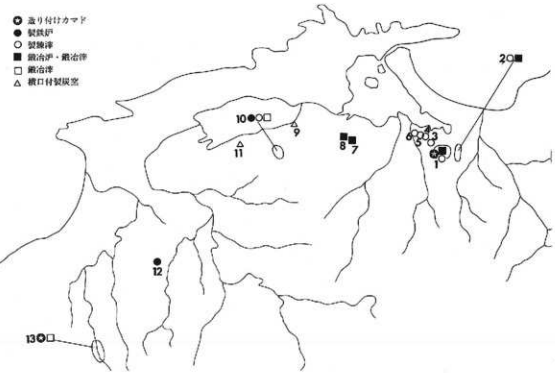
次に宍道湖・中海沿岸部の状況を見てみよう。近年この一帯では大規模な開発に伴う調査が行われており、特に南岸部では多数の製鉄関連遺構が発見されつつある。これらの分布（第149図）を見ると、製鉄炉やその炉壁、製錬滓などを出土した遺跡は、五反田遺跡を含む東部地域（安来市東部から鳥取県米子市西部）に特に集中するほか、古墳時代に碧玉製の玉類を量産する玉湯町周辺の西部地域にも比較的多く見られる。このうち後者では、近年相次いで製鉄関連遺構とされる横口付製炭窯（いわゆるヤツメウナギ）も発見されており、いずれも窯体部はこれまで山陰東部で検出されたものと同様の完全地下式タイプであり注目される。また、当該期の有力後期古墳が集中する松江市の旧意宇郡中枢付近では、7，8世紀の単独鍛冶工房が検出されたのみで、製錬滓等は見つかっておらず、いわば空白地帯である。このことは同時期の地域首長墓とされる石棺式石室の分布（註21）とも絡み、今後の製鉄史を考えるうえで極めて重要な点であろう。

本遺跡を含む東部地域は製鉄関連遺跡が最も集中しているが、各遺跡の内容については未発表資料も多く、今後に多くの整理すべき問題が残されている。また、この地域は旧国境を挟んでおり、律令期の鉄生産・貢納について多くの示唆を示してくれるはずである。今のところその生産開始については五反田遺跡を含んでいると言えるが、そのピークや、終末期の様相についてはむしろ米子市側（旧伯耆国）の遺跡群に注目すべきと考えている。

これら製鉄集団の動向を考えるとき、同時期の後期古墳や集落構造についての現象は密接に関係するものと考えており、何が製鉄集落に普遍的（註22）であり、何が地域性（註23）として抽出できるかが今後の大きな課題と思われる。



今佐山Ⅰ遺跡出土遺物・遺構



第149図　出雲部製鉄関連遺跡

番号	遺跡名	(製鉄関連) 時期	製鉄関連遺構	製鉄関連遺物	備考
1	五反田・勝見津・半丁遺跡	6世紀後半～8世紀	鍛冶炉、排滓、土坑	製錬滓、鍛冶滓、鞴羽口、須恵器、羽口ほか	文献1
2	後田・新山遺跡群	7世紀～平安時代	鍛冶炉	製錬滓、鍛冶滓、鍛造剥片、羽口ほか	文献2～6
3	鳥田南遺跡	7世紀後半？	住居跡	製錬滓、鍛冶滓	文献7
4	宿山遺跡	7世紀後半？		製錬滓	文献8
5	原屋口南遺跡	7世紀中葉、8世紀	横穴墓、鍛冶工房？	鉄鉄炉壁、鍛造剥片	文献9
6	原屋口北遺跡	7世紀後半？	横穴墓	製鉄炉壁、製錬滓	文献10
7	向山地遺跡	7世紀前半	鍛冶工房	鍛冶滓	文献11
8	鳥田遺跡	8世紀	鍛冶工房	鍛冶滓、羽口	文献12
9	布志名大谷1遺跡	7世紀？	横口付製炭窯		文献13
10	布志名北原荒入古墳群	6世紀後半～	鍛冶炉？、製鉄炉	製錬滓、鍛冶滓ほか	文献14～16
11	白石大谷Ⅱ遺跡	6世紀末？	横口付製炭窯		文献17
12	前畑遺跡	6世紀後半？	製鉄炉ほか	製錬滓、砂鉄、木炭	文献18
13	門遺跡4ほか	7世紀		鍛造剥片	文献19

文献1　出雲一般国道建設・出雲道路・straight line建設関係報告概要書、1991年(第1集発行者出雲・米子)1993年(パイパス関係埋蔵文化財発掘調査)
文献2　「出雲」出雲考古学研究会・簸川古代文化研究会編、1982年(第7号出雲考古学会・出雲地域パイパス関係埋蔵文化財発掘調査報告
文献3　「物語遺跡群」第9回出雲考古学研究集会、1992年(第9号出雲考古学研究集会
文献4　「島根県遺跡地図」第2分冊出雲地区、1994年(第2分冊)島根県教育委員会
文献5　「出雲」第28号(第4号)1991年(第4号)出雲考古学研究会
文献6　「出雲」第33号(第5号)1996年(第5号)出雲考古学研究会
文献7　「鳥田南遺跡」1992年島根県教育委員会
文献8　「島根遺跡発掘調査報告書」1984年島根県教育委員会
文献9　「原屋口南遺跡」1992年島根県教育委員会
文献10　「原屋口北遺跡」1996年島根県教育委員会
文献11　「向山地遺跡・原ノ前遺跡」1997年出雲市教育委員会
文献12　「鳥田遺跡」島根遺跡、1997年島根県教育委員会
文献13　「布志名大谷1遺跡・布志名大谷2遺跡」1997年布志名町教育委員会
文献14　「布志名北原荒入古墳群Ⅰ」1997年布志名町教育委員会
文献15　「布志名北原荒入古墳群Ⅱ」1998年布志名町教育委員会
文献16　「布志名北原荒入古墳群Ⅲ」2000年布志名町教育委員会
文献17　「白石大谷Ⅱ遺跡」1995年島根県教育委員会
文献18　「前畑遺跡」1997年島根県教育委員会
文献19　「門遺跡4」1998年島根県教育委員会

第2表　出雲部ほか製鉄関連遺跡一覧表

註1　松本岩雄「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編一』1992年木耳社

註2　『天神遺跡』1977年出雲市教育委員会

註3　『朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』1988年島根県教育委員会

註4　『布田遺跡』『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』1980年島根県教育委員会

註5　園山和雄・足立克己「Ⅳ B区の遺構と遺物（4）その他（a）包含層出土土器」註4同掲

註6　『石台遺跡』『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ』1989年島根県教育委員会

註7　松本岩雄　註1同掲　ではⅣ－1様式中に布田遺跡後葉資料と石台遺跡後葉資料が混在する。

註8　時代は異なるが、現在多用される草田各期遺物変遷図（赤沢秀典）は遺跡内では通用するかもしれないが、空白期の存在や、その最終期の型式が理解されておらず、多くの間違った捉え方がなされている。

註9　『夫敷遺跡』『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ』1989年島根県教育委員会

註10　『四ツ廻遺跡』『（仮）四ツ廻住宅団地造成事業予定地内埋蔵文化財発掘調査概報』　1994年　東出雲町教育委員会、『堤廻遺跡』1983年　松江市教育委員会、『的場遺跡（本庄川流域条里制遺跡）』『松江北東部遺跡発掘調査概報』1990年　松江市教育委員会、『勝負遺跡』『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ』1992年　島根県教育委員会

註11　『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ』1978年　島取県教育委員会

註12　『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ』1983年ほか　島取県教育文化財団

註13　徳見津遺跡・日廻遺跡・陽徳寺遺跡『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』

註14　田辺昭三『須恵器大成』1981年　角川書店

註15　第6章「結語」「浜山池遺跡」『一般国道9号（安来道路）予定地内埋蔵文化財調査報告書西地区Ⅷ』

註16　石田遺跡・カンボウ遺跡・国吉遺跡『一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』

註17　陽徳遺跡・平Ⅰ遺跡『同上11』

註18　平Ⅱ遺跡・吉佐山根1号墳・穴神横穴墓群『同上10』

註19　穴澤義功「山陰地域における古代鉄製産に関する予察」『古代金属生産の地域的特性に関する研究』1993年

註20　『今佐山遺跡』『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』、この他、出雲山間部の羽森遺跡（第149図12）では製鉄炉を伴なう段状遺構から砂鉄・木炭の集積も検出されており、出土須恵器から6世紀後半と考えられている（埋蔵文化財情報第184号）。

註21　『石棺式石室の研究』1987年　出雲考古学研究会

註22　島崎　東　第4章「結語」（『窪木薬師遺跡』『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告86』1993年　岡山県教育委員会）によれば、この鍛冶専業集落遺跡では五反田遺跡同様に、6世紀後葉から7世紀初頭に鍛冶集落の規模・生産が拡大することが指摘されている。また、この集落で検出された土坑24は、五反田遺跡で検出された溝状遺構1、2と共通する可能性が強く、多くの小型製炭窯も見られる。

註23　古墳時代鉄末期から開始される山陰側の製鉄関連遺物は、科学的調査によれば基本的に砂鉄を原料としたものと判断されている点。県内では製鉄開始期の集落出土須恵器が、どちらかと言えば飛内編年で理解しやすいタイプが多い点。出雲東部の後期古墳の中枢部では6世紀後半に竪穴状居が消失するが、これらの製鉄関連集落では竪穴住居が7世紀代にまで残る点。

第７章　科学的考察

安来道路建設予定地内遺跡出土物の金属学的調査

和鋼博物館　副館長　佐藤　豊

第１節　五反田遺跡他出土の鉄滓・炉壁・鍛造薄片・粒状滓等の調査

一般国道９号(安来道路)建設予定地内の事前発掘調査が島根県埋蔵文化財調査センターによって行なわれ、五反田遺跡、山ノ神遺跡、渋山池遺跡、岩屋口南遺跡、岩屋口北遺跡、徳見津遺跡、広田池遺跡が発掘された。出土物から６世紀末～７世紀にかけての遺跡と比定され、出土した鉄滓、炉壁、鍛造剥片、粒状滓について調査依頼があったので金属学的調査を行なった。その結果と若干の考察を加えたので併せて報告する。

１．資　料

資料の明細および外観をそれぞれ表１、写真１～20に示す。

表１　各資料の明細

番号	資料名	明細	重量（g）
No.1	五反田遺跡鉄滓 Ⅰ区加工段５～９堆積土	幅約105mm、長さ約140mm、厚み約40mmの表面黒色で光沢があり流出滓で折られたもの、緻密で重たい感じ	1250
No.2	五反田遺跡鉄滓 Ⅰ区遺物２－４灰色土層	幅約40mm、長さ約50mm、厚み約25mmで表面凹凸状でやや赤色を呈す。一部に木炭を噛んでいる。	120
No.3	五反田遺跡鉄滓 Ⅰ区遺物２－４灰色土層	幅約25mm、長さ約70mm、厚み約20mmでやや棒状のもの表面凹凸で一部に木炭を噛み込む。滓赤色を呈す	50
No.4	五反田遺跡鉄滓 Ⅰ区遺物６	約80mm丸で厚み25－30mmの楕形滓状のもの、表面やや赤色で凹凸状、重たい感じのもの	320
No.5	五反田遺跡鉄滓 Ⅲ区遺物14	幅約60mm、長さ100mm、厚み約60mmで表面黒色で凹凸状、大小の気泡があり軽い感じのもの	420
No.6	五反田遺跡鉄滓 Ⅲ区西側斜面堆積内	幅約50mm、長さ約50mm、厚み約35mm、断面黒色で緻密、重たい感じのもの	260
No.7	山の神遺跡鉄滓 遺物１堆積土	約70mm丸で厚み25mmの楕形滓、表面やや赤色で凹凸状、やや重たい感じのもの	220
No.8	渋山池遺跡鉄滓 ＳＩ-11	幅約20mm、長さ約30mm、厚み約15mm、表面黒色で緻密、鉄滓の破片状のもの	25
No.9	岩屋口南遺跡鉄滓 Ⅲ区１号穴玄門No23	幅約80mm、長さ約120mm、厚み約50mm、表面やや赤色で凹凸状なるも緻密、重たい感じのもの	700
No.10	岩屋口北遺跡鉄滓 ２号穴前庭部褐色土層No.９	幅約80mm、長さ約30mm、厚み約30mmで流出滓の破片状のもの。表面黒色で光沢あり、緻密重たい感じのもの	135
No.11	五反田遺跡鍛造剥片 Ⅰ区七坑３	約５mm幅の鍛造剥片状物	20
No.12	五反田遺跡粒状滓 Ⅰ区土坑３	約２mmφ状の粒状滓	1.0
No.13	五反田遺跡鍛造剥片 Ⅰ区十坑４	約２mm幅の鍛造剥片状のもの	1.0
No.14	御見津遺跡鍛造剥片 Ⅲ区加工段ＳＫ06Ｂ	約３mm幅の鍛造剥片状のもの	1.5
No.15	島田池遺跡炉壁 Ⅰ区１号穴19層	幅約70mm、長さ80mm、厚み約40mmの炉壁で炉内側と思われる面は黒色で光沢のあるガラス状を呈する	225
No.16	五反田遺跡炉壁 Ⅱ区谷部旧河道	幅約40mm、長さ約50mm、厚み約15mmの大きさの炉壁で黒色溶融部と粘土部がある。	40
No.17	岩屋口南遺跡炉壁 Ⅲ区１号穴焚道部No.26	幅約50mm、長さ110mm、厚み約20mmの炉壁で炉内面は黒色ガラス状、外側部は粘土状	150
No.18	岩屋口北遺跡炉壁 ２号穴前庭部褐色土層No.４	幅約55mm、長さ約80mm、厚み約40mmの炉壁で、一部に黒色溶融部があり、外側部は粘土状	160
No.19	五反田遺跡木炭 Ⅰ区土坑９	約25mmφの半分のもの長さ60mmで固く締まっている感じのもの	25
No.20	五反田遺跡木炭 Ⅰ区土坑10	約35mm厚みのもので、長さ約90mmやや軟らかい感じの木炭	50

写真1　資料No. 1 鉄滓の外観

写真2　資料No. 2 鉄滓の外観

写真3　資料No. 3 鉄滓の外観

写真4　　資料No.4鉄滓の外観

写真5　　資料No.5鉄滓の外観

写真6　　資料No.6鉄滓の外観

写真7　　資料No.7 鉄滓の外観

No.8　東出雲町揖屋渋山池遺跡鉄滓

写真8　　資料No.8 鉄滓の外観

写真9　　資料No.9 鉄滓の外観

No.10　安来市佐久保蓼岩屋口北遺跡鉄滓

写真10　資料No.10鉄滓の外観

No.11　安来市吉佐町五反田遺跡鍛造剥片

写真11　資料No.11鍛造剥片の外観

No.12　安来市吉佐町五反田遺跡粒状滓

写真12　資料No.12粒状滓の外観

No.13　安来市吉佐町五反田遺跡鍛造剥片

写真13　資料No.13鍛造剥片の外観

No.14　安来市吉佐町徳見津遺跡鍛造剥片

写真14　資料No.14鍛造剥片の外観

写真15　資料No.15炉壁の外観

写真16　　資料No.16炉壁の外観

写真17　　資料No.17炉壁の外観

写真18　　資料No.18炉壁の外観

写真19　資料No.19木炭の外観

写真20　資料No.20木炭の外観

2．化学組成

各資料から試料を採取し化学分析を行った。各資料の化学組成を表2に示す。このうち炭素および硫黄は堀場製作所ＥＭＩＡ－1200型Ｃ・Ｓ同時定量装置による赤外線吸収法により、その他の元素は島津製作所高周波誘導結合プラズマ発光分光分析装置(ICPV-1012型) により定量した。

表2　各資料の化学組成　　(重量 %)

番号	資料名	C	SiO_2	MnO	P	S	Ni	Cr_2O_3	Na	K	CaO	MgO	V_2O_5	TiO_2	Cu	Al_2O_3	T.Fe	FeO	Fe_2O_3	M.Fe
No.1	五反田1区加工段5~9層積土 鉄滓	0.015	29.27	0.46	0.050	0.037	0.05	0.16	0.23	0.76	1.09	1.21	0.80	8.35	0.01	5.07	36.52	44.47	1.83	0.67
No.2	五反田1区建物2~4灰色土層 鉄滓	0.055	12.23	0.15	0.034	0.087	0.03	0.07	0.11	0.32	0.72	0.51	0.21	2.26	0.01	3.64	59.92	58.66	16.43	0.83
No.3	五反田1区建物2~4灰色土層 鉄滓	0.441	11.35	0.33	0.073	0.120	0.01	0.06	0.04	0.08	0.55	0.99	0.24	4.16	0.01	4.06	52.88	36.86	34.28	0.25
No.4	五反田1区建物6 鉄滓	0.031	14.79	0.28	0.050	0.070	0.02	0.07	0.09	0.39	0.68	0.57	0.27	3.87	0.01	3.79	52.70	50.28	18.86	0.43
No.5	五反田III区建物14 鉄滓	0.049	23.66	0.47	0.066	0.037	0.03	0.08	0.08	0.63	1.27	0.84	0.37	5.33	0.01	4.43	42.74	48.31	6.76	0.46
No.6	五反田III区西側斜面 鉄滓	0.011	24.11	0.48	0.056	0.030	0.03	0.09	0.21	0.63	0.99	0.88	0.43	6.70	0.01	4.42	43.10	48.72	5.99	1.04
No.7	山の神建物1 鉄滓	0.061	21.89	0.19	0.100	0.022	0.03	0.02	0.28	1.11	1.14	0.43	0.04	0.40	0.01	2.72	50.70	55.23	0.48	0.44
No.8	渋山池SI-11 鉄滓	0.031	12.85	0.23	0.070	0.033	0.04	0.06	0.23	0.70	0.88	0.56	0.17	2.51	0.01	2.87	58.45	65.84	9.41	0.69
No.9	岩屋口III区1号玄門 鉄滓	0.019	20.12	0.44	0.082	0.050	0.04	0.10	0.13	0.35	0.77	1.19	0.59	7.98	0.01	4.28	44.75	47.65	10.05	0.68
No.10	岩屋口2号前庭 鉄滓	0.048	24.44	0.63	0.078	0.052	0.03	0.10	0.24	0.72	1.07	1.02	0.45	7.73	0.01	4.23	40.53	48.36	3.26	0.67
No.15	島田池I区19層 炉壁粘土部(A)	0.425	61.92	0.05	0.028	0.082	－	<0.01		0.85	0.14	0.25	0.02	0.71	－	18.84	3.82	－	－	－
No.15	島田池I区19層 炉壁黒色溶融部(B)	0.040	56.76	0.14	0.028	0.028	－	0.02		1.98	0.44	0.62	0.02	0.81	－	16.18	3.56	－	－	－
No.16	五反田II区谷部 炉壁粘土部(A)	0.205	63.18	0.03	0.042	0.004	－	<0.01	－	1.25	0.13	0.43	0.02	0.42	－	18.36	1.76	－	－	－
No.16	五反田II区谷部 炉壁黒色溶融部(B)	0.035	48.04	0.15	0.081	0.001	－	0.05	－	1.44	0.65	0.86	0.14	2.55	－	12.25	16.39	－	－	－
No.17	岩屋口III区1号羨道部 炉壁粘土部(A)	0.033	60.97	0.15	0.030	0.003	－	<0.01	－	0.91	0.20	0.50	0.02	0.63	－	18.38	3.88	－	－	－
No.17	岩屋口III区1号羨道部 炉壁黒色溶融部(B)	0.031	55.88	0.19	0.054	0.004	－	0.03	－	1.42	0.68	1.11	0.090	2.01	－	13.34	10.31	－	－	－
No.18	岩屋口2号前庭部 炉壁粘土部(A)	0.052	62.81	0.07	0.020	0.010	－	<0.01	－	1.70	0.29	0.49	0.02	0.35	－	19.61	1.45	－	－	－
No.18	岩屋口2号前庭部 炉壁黒色溶融部(B)	0.015	59.97	0.15	0.075	0.008	－	0.03	－	2.15	0.78	1.07	0.071	1.43	－	13.13	8.46	－	－	－
No.11	五反田遺跡鍛造剥片 I区土坑3	0.25	4.80	0.13	0.041	0.053	0.06	0.05	0.03	0.07	0.26	0.51	0.13	1.72	<0.01	3.10	65.33	48.62	39.26	0.08
No.12	五反田遺跡粒状滓 I区土坑3	0.25	9.07	0.25	0.080	0.115	0.04	0.09	0.08	0.20	0.71	0.61	0.30	3.96	<0.01	4.17	56.38	49.05	25.78	0.22
No.13	五反田遺跡鍛造剥片 I区土坑4	0.086	1.80	0.04	0.021	0.015	0.09	0.03	0.02	0.05	0.10	0.15	0.03	0.38	<0.01	1.38	70.16	55.64	38.92	0.08
No.14	御見津遺跡鍛造剥片 III区SK－06B	0.11	3.64	0.11	0.010	0.013	0.03	0.03	0.03	0.09	0.07	0.33	0.11	1.44	<0.01	1.72	67.78	47.69	44.38	0.08

3．顕微鏡組織

各資料の顕微鏡組織を写真21～38に示す。

資料No.1、No.5、No.6、No.9、No.10はウルボスピネル＋ファイヤライト組織が主体である。

資料No.2、No.3、No.4、No.7、No.8はヴスタイト＋ファイヤライト組織が主体である。

資料No.11、No.13、No.14は、Feの酸化物が主体である。

資料No.12はヴスタイト組織が主体である。

資料No.15はハーシーナイト($FeAl_2O_4$) が主体である。

資料No.16、No.17、No.18はFe－Al－Ti系が主体である。

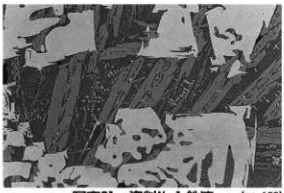
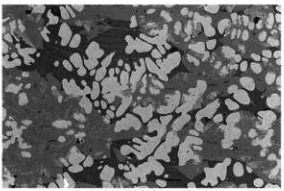


写真21　資料No. 1 鉄滓　(× 100)　(× 400)
角形の白色結晶はウルボスピネル
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



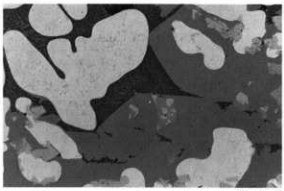


写真22　資料No. 2 鉄滓　(× 100)　(× 400)
丸形の白色結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト

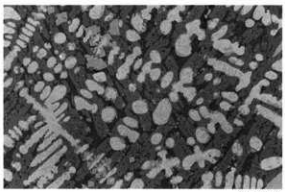
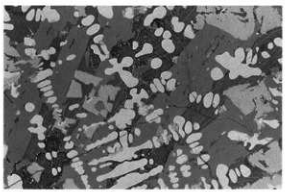


写真23　資料No. 3 鉄滓　(× 100)　(× 400)
白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



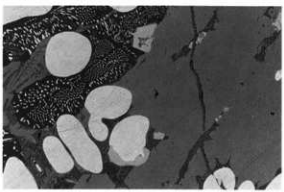
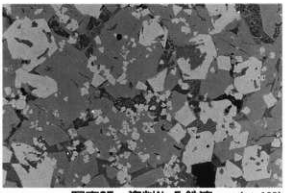


写真24　資料No. 4 鉄滓　(× 100)　(× 400)
白色の樹枝状結晶はヴスタイト
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



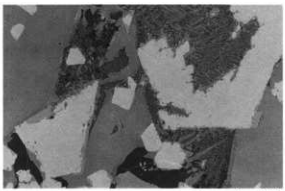
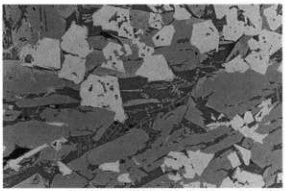


写真25　資料No. 5 鉄滓　(× 100)　(× 400)
角形の白色結晶はウルボスピネル
淡灰色の板状結晶はファイヤライト



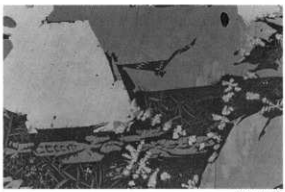
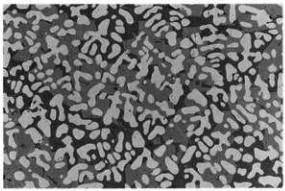


写真26　資料No. 6 鉄滓　(× 100)　(× 400)
角形の白色結晶はウルボスピネル
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



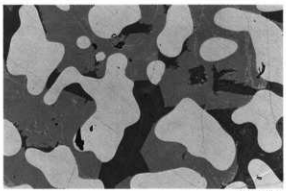
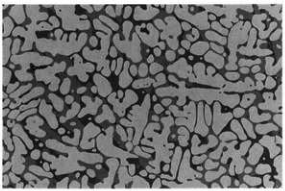


写真27　資料No. 7 鉄滓　(× 100)　(× 400)
白色の丸形結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト



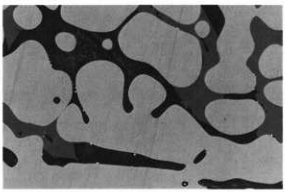
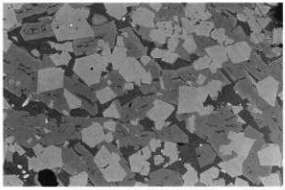


写真28　資料No. 8 鉄滓　(× 100)　(× 400)
白色の丸形結晶はヴスタイト
淡灰色の板状結晶はファイヤライト



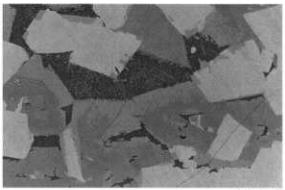


写真29　資料No.9 鉄滓　（× 100）　（× 400）
角形の白色結晶はウルボスピネル
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト

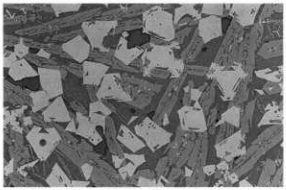
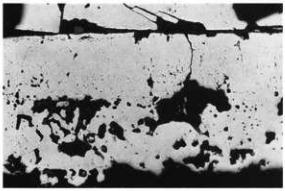


写真30　資料No.10鉄滓　（× 100）　（× 400）
角形の白色結晶はウルボスピネル
淡灰色の棒状結晶はファイヤライト



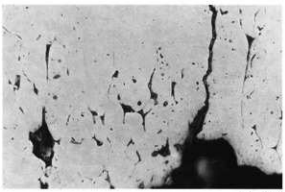
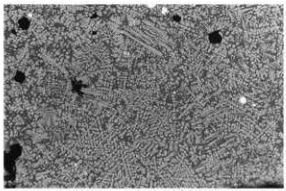


写真31　資料No.11鍛造剝片　（× 100）　（× 400）
白色結晶はFeの酸化物



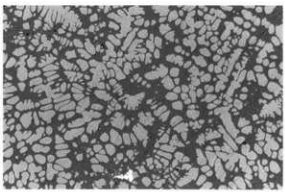
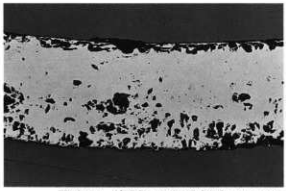


写真32　資料No.12粒状滓　（× 100）　（× 400）
白色結晶はヴスタイト



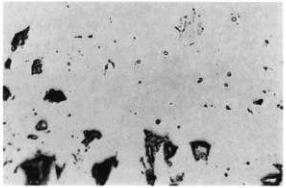
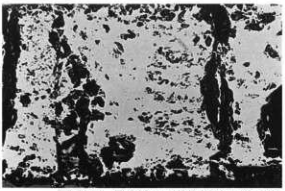


写真33　資料No.13鍛造剝片　(× 100)　(× 400)
白色結晶はFeの酸化物



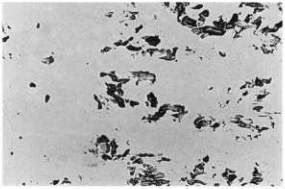
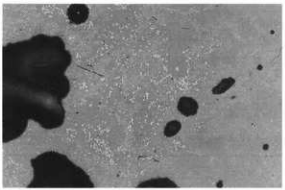


写真34　資料No.14鍛造剝片　(× 100)　(× 400)
白色結晶はFeの酸化物



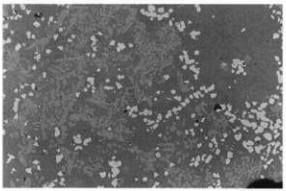
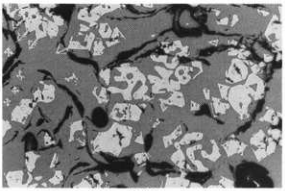


写真35　資料No.15炉壁　(× 100)　(× 400)
白色結晶はハーシーナイト系



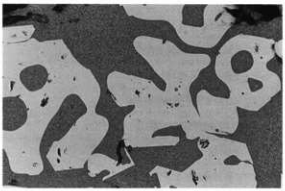
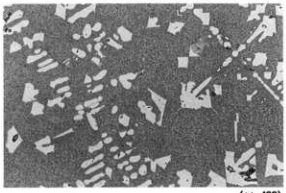


写真36　資料No.16炉壁　(× 100)　(× 400)
白色結晶はFe-Al-Ti系

写真37　資料No.17炉壁　(× 100)
白色結晶はFe-Al-Ti系



(× 400)

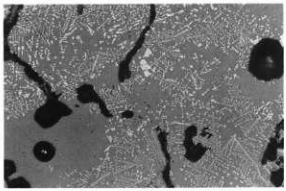
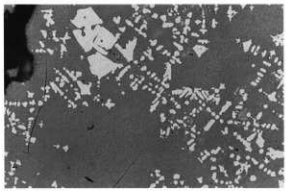


写真38　資料No.18炉壁　(× 100)
白色結晶はFe-Al-Ti系



(× 400)

4．構成相の解析

前項で観察した試料を用い走査型電子顕微鏡(ＳＥＭ)による微細組織の観察ならびにＥＤＸ分析(エネルギー分散型Ｘ線分析)による局部的な定性分析および粉末Ｘ線回折を行なった。

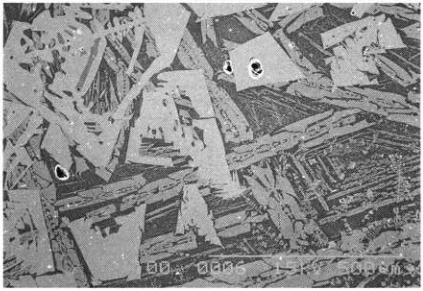
結果を写真40～57と、図１～10に示す。

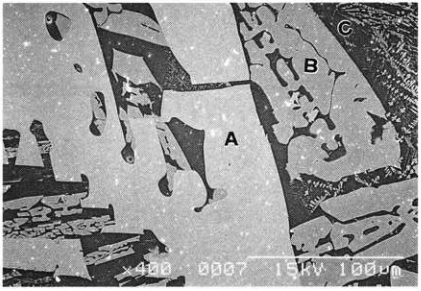
また、これらの結果を総括し、各資料の構成相を示すと表３のようになる。

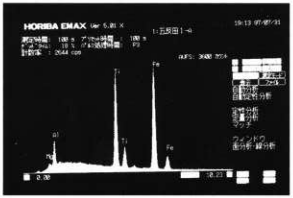
表３　各資料のＸ線回折による相解析

番号	資料名	(W) ウスタイト FeO	(M) マグネタイト Fe_3O_4	(F) ファイヤライト Fe_2SiO_4	(U) ウルボスピネル Fe_2TiO_4	(L) ルーサイト $KAlSi_2O_6$	基地 (ガラス質)
No.1	五反田１区加工段５～３鉄滓			◎	◎		Si-Al-Fe-CA-K-Ti
No.2	五反田１区建物２～４鉄滓	◎	○	◎			Si-Al-K-Ca-Fe
No.3	五反田１区建物２～４鉄滓	◎	○	◎			Si-Al-Ca-Fe-K-Ti
No.4	五反田１区建物６鉄滓	◎	○	◎			
No.5	五反田Ⅲ区建物14鉄滓			◎	◎		Si-Al-Ca-Fe-K-Ti
No.6	五反田Ⅲ区西側斜面鉄滓			◎	◎		Si-Al-Fe-K-Ca-Ti
No.7	山の神建物１鉄滓	◎		◎		○	Si-Al-K-Fe-Ca
No.8	洗山池ＳＩ－11鉄滓	◎		◎			Si-Al-Fe-K-Ca
No.9	岩屋口南Ⅲ区１号穴鉄滓			◎	◎		Si-Al-K-Ca-Fe
No.10	岩屋口北２号穴鉄滓			◎	◎		Si-Al-Fe-Ca-K-Ti

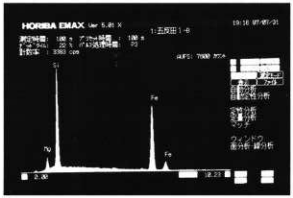
注:◎多い ○あり



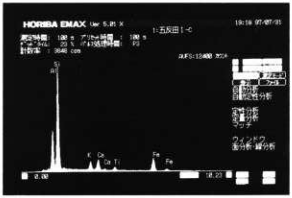




A部　ウルボスピネル



B部　ファイヤライト



C部　基　地

写真40　資料№1のSEM像とEDX分析